Garnet Melodies
リサゆき挿絵付き小説合同誌

表紙

斜森

小説

加瀬
cucumber
大村 千里
トラ柄
にゅー
北野 もーりす

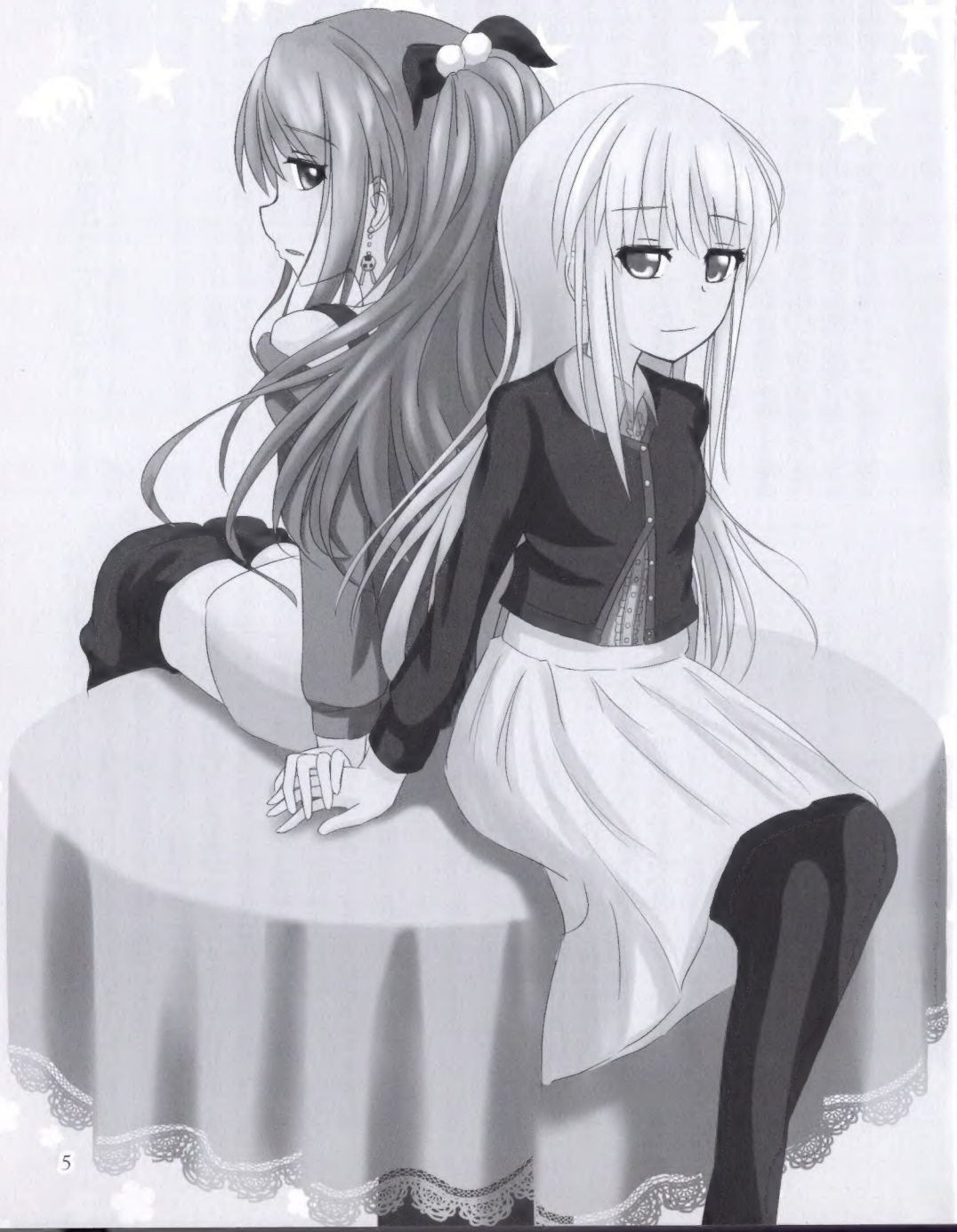
挿絵

あいなめ
加瀬
ズミクニ
斜森
Manato
北野 もーりす

主宰

北野 もーりす

Garnet
Melodies



目覚めはきっと、あなたと二人 6
Novel・Illusut 加瀬

歌声ロストデザイア 14
Novel トラ柄 Illust あいなめ

エウレカ 22
Novel cucumber Illust ズミクニ

結んで、ひらいて 40
Novel にゅー Illust Manato

アルリエッタ、恋をして 62
Novel 大村 千里 Illust 斜森

Voice 86
Novel・Illust 北野 もーりす

あとがき 112

目覚めはきっと、あなたと二人

加瀬

世界が緑の季節に近づいて、透明な雫が青々とした葉脈を撫でる頃。まだ春眠を味わっていたいアタシは、微睡みの中で薄手のブランケットをどこに仕舞ったかに思いを馳せていた。

――――友希那が風邪を引いたのは、そんな時だ。

月曜日。いつもなら家の前に立っている友希那の姿がそこにはなかった。

毎朝一緒に行こうと約束しているわけではない。けれど、最近は示し合わせたように同じタイミングで外に出ることが多くて、そのまま自然とそんな流れが出来ていた。アタシとしては、とても嬉しいことで。起きるのが少し億劫だなと思うような日も、友希那が傍にいてくれるだけで気合が入る。

好きな人に会えるというのは、アタシにとってそれくらいの原動力だった。

だから仕方の無いことなのだけれど、今のアタシは、どうしてもエンジンが掛かりきらなかった。結局あの後五分、十分と友希那のことを待ってみたけれど、玄関が開くことはなかった。授業に遅刻してしまうことは避けたいし、もしかすると何か用事があって友希那は先に学校へ行ってしまったのかもしれない。とりあえず連絡だけ入れておくことにして、アタシは学校へ向けて歩き始めた。

朝日が燦々と降り注いで、整然と並ぶ家や喧騒に染まりつつある街を照らしている。並木も光をいっぱいに溜め込んで、気持ち良さそうにさざめいていた。眩しいくらいのいい天気。今日の気温は昨日より高くなるらしい。こんな日はきっとお気に入りの日傘でも差しているんだろうなと思いを馳せて、視界に入るはずも無い彼女の影を探してしまう。

通い馴れたはずの通学路だったのに、こんなに広かったことを知ったのは初めてだった。

「おはよ～」

「あ！リサちーおはよー！」

教室に入ると、ヒナが元気いっぱいに手を振っているのが見えた。紗夜が前にヒナのことをネコみたいだと言っていたけれど、こうしていると人懐っこいイヌみたい。愛くるしいその行動で、ほんの少しだけ元気になる。アタシが席まで行くのを待ちきれなかったのか、教室の入り口まで駆け寄ってくるヒナ。そのまま突進気味に飛びついてきて、思わず後ろによろめいた。

「こら、急に飛びついてきたら危ないぞ～」

「だってさぁ、リサちー、しゅーんって感じがしたから」

心臓が一際強く脈打つ。ヒナの表現は直感的なもので、理解するのに少しだけ時間が掛かるものが多い。けれど今回は別で、アタシには心当たりが多すぎた。頭を撫でつつ平静を装ってみるけれど、きっと分かっているんだろう。いっそヒナにこの遣る瀬無い気持ちを相談してみようかと思った時、一限目のチャイムが鳴ってしまった。

ひらりとヒナが私の手から離れて自分の席へと戻って行ってしまう。結局アタシは陰鬱とした気持ちを抱えたまま授業を受ける羽目になった。

アタシと友希那はクラスが別だから、一緒に授業を受ける機会は殆ど無い。教室を跨いで会いに行くことはあるけれど、友希那から会いに来てくれることは滅多に無い。今日も、そうだった。このままアタシが友希那の居る教室まで行かなかったら、練習の時間まで会えないのかな。

以友希那に、会いたい。

アタシ、どうしちゃったんだろう。ロゼリアに入る前は友希那と何週間も話さないことなんて沢山あったのに。今朝のほんの数分だけでも友希那の顔を見られなかっただけで、こんな気持ちになってしまうなんて。

なんだか、自分が気付いてない内にどんどん欲張りになっていっている気がする。そんな事を考えていると、気分は余計に落ち込んでいった。

現代文を担当している教師がチョークを軽快に鳴らしながら、黒板に文字を連ねていく。アタシの手元にあるノートは、真っ白なままだった。今から必死になって板書を取る気力も無くて、上書きされていく新しい文字をぼんやりと眺めていた。

「え？今日休み？」

休み時間。次の移動教室に併せて、アタシはそれとなく友希那のクラスを覗いてみた。一際目を引く彼女を見つけるのはそんなに難しいことじゃない、はずなのに。教室内をどれだけ見渡してみても友希那の姿は見つからなかった。机の横にもバッグが掛かっていなくて、一緒にいたヒナも首を傾げている。席を外しているだけかなとも思ったけれど、何だか胸がざわざわして。

通りすがりの子に訊ねてみれば、どうやら熱を出して学校を休んでいるらしい。そういえば、今朝の連絡も返事がないままだった。ひょっとしたら、寝込んでいるのかな。

そう思い始めると、今度は友希那のことが心配で堪らなくなってしまった。病気の時は誰しも心細くなるものだ。友希那だってきっと例外ではないだろう。風邪を引くことに慣れているはずもないし、凄くつらい思いをしているかも知れない。端正な顔立ちが苦痛でゆがんでいく様子ばかりが熱に苦しんでいる友希那の様子が頭を過ぎって、思わずぎゅっと手を握った。こんなときアタシがしてあげられることなんて、大して無いかもしれない。けれど友希那の傍にいてあげたいというどうしようもないエゴが、心の中で渦巻いてゆく。

――――傍にいてあげたい？違う、そうじゃない。アタシが友希那の傍にいたいだけ。

「リサちー大丈夫？顔色悪いよ」
「あっ……ご、ごめん」

ガヤガヤとした喧騒の中に取り残されていたアタシは、鈴を転がすような声にはっとした。眉を下げて心配そうにこちらを覗き込むヒナはやっぱりイヌみたいで、ついつい甘えてしまいそうになる。大丈夫だよ、と笑みを浮かべて見せると、少しだけ心配そうにはされたけれど、ヒナはそれ以上何も追及してこなかった。こういう所が、ヒナは本当に優しいと思う。

本当は、今すぐにだって学校を飛び出して友希那に会いに行きたかった。だけど、そんな事をして友希那が喜ぶ筈もないことは、分かりきっている。どうにも出来ない葛藤を噛み締めながら味のしない弁当を飲集中できない授業と味のしないお弁当を不安ごと一緒に飲み込んで、太陽がオレンジ色に変わるのをひたすらに待っていた。

永遠にも感じるホームルームを終えて、夕陽に当てられて街路樹が影を落とす中をアタシは駆け出す。今日の練習はもちろん中止で、自主練習へと変更になった。ロゼリアを結成してから友希那が休むのは、スカウトの一件があった時以来のこと。皆が不安にならないように説明したつもりだったけれど、風邪なら風邪でその時以上に心配みたいだった。紗夜からは個人的に「湊さんのこと、頼みましたよ」の一言。どこかで聞いた台詞だなと思って、思わず頬が緩んでしまう。

アタシ達の結束は日に日に強くなっていて、一人でも誰かが欠けると音も、気持ちも、どこかぽっかりと穴が開いたようになる。そしてその穴を埋められるのは、その人だけなんだ。

おせっかいだと言われるだろうか。けれど、それでもいい。

アタシはあなたが苦しむところを見たくない。

見守っているだけは卒業したんだ。

全部代わってあげることは出来ないかもしれないけれど、半分くらいは貰えないかな。

背中を押す皆の温かい声と、胸の中で燻るあなたへの想いが、今のアタシの全てだった。

■■■■

家に着いて、階段を駆け上がる。どんなに息が切れようと、玄関から声を掛けようだなんて思わなかった。いつだってアタシ達を繋ぐのはベランダだったから。

小学生の頃、アタシと友希那は間違いなく〝親友〟と呼べる関係だったと思う。毎日のようにお互いの家を行き来して、外へ出れば泥だらけになるまで遊んで。星が綺麗な夜にはベランダで友希那の歌を聴いた。瞳を閉じれば夢の中でも一緒だった。友希那が与えてくれる毎日は宝石箱よりもっとキラキラと輝いて、アタシはその時間を、何よりも大切にしたいと思っていた。

そうしていつの間にか大きくなったこの想いはいつしか友希那の色に染まっていて、これが恋愛感情だと気付くのに時間は掛からなかった。けれど、それを認めるのにはすごく長い時間が必要だった。友希那の傍にいられなくなるかも知れないと思うだけでズキズキと痛む胸も、目が合うだけで高鳴る鼓動も、友希那からの信頼を裏切っているように感じられて、ただひたすらに怖かった。

あの力強く透き通る声で、好きだと言われたい。

あなたとずっと、一緒にいたい。

ちぐはぐなまま共存する確かなこの想いは、今は夕陽の影に隠してしまおう。

勢いをつけて、埃を被ったベランダを飛び越える。窓を数回ノックして返事を待つけれど、反応は無かった。カーテンは閉まっていて、中の様子もよく分からない。さてどうしようかと思案して、試しに窓へ手を掛けるとすんなりと開いた。

友希那の部屋は、窓のすぐ脇にベッドが置いてある。小さい頃はよく確認もせずに飛び込んで、危うく踏んでしまいそうになることが何度もあった。間違っても寝込んでいるであろう彼女を踏んでしまうなんて事がないように、声を掛けながら慎重にカーテンを開く。揺れるカーテンがふわりと空気を纏って、クラシックな薔薇の香りを運んできた。そういえば友希那の部屋に入るのは久しぶりだな。ちょっとだけ、緊張する。

「友希那？入るよ―……」

部屋を覗くと、そこには真っ赤な顔で目を閉じる大好きな人がいた。喉を痛めないようにと呼吸が浅いのだろうか、マスクが上下に小刻みに揺れている口元を覆ったマスクは小刻みに上下していて、眉間にはゆるく皺が寄っている。熟睡できていないのだろう。

胸がぎゅっと締め付けられる。苦しそうだな。怖い夢を見ていないだろうか。起こしてしまわないようにベッドの端へ乗って、スプリングが沈み込まないうちにすぐ床へ降りた。けれど。

「……リサ？」
「！ゆ、友希那、ごめん。起こしちゃった？」

飴色に潤んだ瞳が、こちらを見ていた。

ステージで感じる燦然とした輝きは少しだけ影に揺らいでいて、代わりにどこか幼かったあの頃のような揺らめきを感じる。唯一つ変わらないのは、それでもアタシの心をつよく惹き寄せていること。

やましいことをしているわけでもないのに、目が離せなくて、言葉が見つからなくて。弱っている友希那を前にしてこんな風に思うなんて、どうかしている。何も言わないアタシに痺れを切らしてしまったのか、上半身を起こそうと身を捩る友希那をそっと制して、剥がれかかっていたブランケットを掛け直した。起きられるのにと不満そうな顔をしているけれど、相変わらず顔は真っ赤だし、呼吸だって荒いままだ。

「熱、まだある？測った？」
「午後は、まだ」
「そっか。体温計どこにあるか分かる？持ってくるよ」

友希那が指を差したサイドボードの上には体温計の他に十数本のスポーツ飲料と風邪薬、そして友希那のお母さんからの手紙が置いてあった。盗み見るつもりはなかったのだけれど、体温計を取るときに視界に入ってしまった。すぐに視線を逸らしたけれど、お父さんとお母さんが午後の間だけどうしても外出しないといけないという旨と、ごめんなさいの一言だけは読み取れてしまった。

厳格だけれど娘想いで優しい二人のことだ、きっと心配で堪らなかったのだろう。元気な時でも飲みきれないくらい大量のスポーツ飲料もきっと、友希那を気遣ってのことだ。少しだけ不器用に思えるような心配りもどこか彼女に似ている気がして、何故だかほっとする。

電子音を鳴らして体温計が示した数値は三十七度を超えていた。平熱がどれくらいだったかまでは覚えていないけれど、今の友希那を見る限りはやはり辛いのだろう。聞けばどうやらご飯も食べていないようだった。となれば、アタシの出番なわけだ。

食欲はあるかと聞けば、なくはないと答えたので頭の中で作戦会議を開始する。今の友希那が食べられる物は、何だろう。りんごをすりおろして食べさせてあげようかな。それともおかゆでも作ろうか。あまり沢山用意しても、急に食べたら胃がびっくりしてしまうかも知れないから、ほどほどの量で。勝手知ったるキッチンではあるけれど、さすがに食材まで無断で使うのは憚られる。一旦家に戻って食材を取ってこよう。

脳内会議の結果を抱えベランダの方へ向かうと、突然小指に熱いものを感じて立ち止まる。ふと見てみれば、熱さの発端は友希那の手のひらだった。アタシの小指を力なく握られて、もっともっと、あつくなる。

ドキドキと耳元まで自分の鼓動が聞こえてきて、恥ずかしい。

「ゆ、友希那？どうし――――」

「いかないで」

ここにいてほしいの、なんて言うから。

アタシの心臓はいよいよ破裂してしまうんじゃないかってくらいに強く脈打って、呼吸の仕方も忘れてしまいそうだった。

きっと心細いのだろう。他意がないなんて冷静に考えれば分かることなのに。じっとこちらを見つめる飴色に、このまま吸い込まれてしまいそうで。指先からじんわりと広がっていく熱に身を焦がされて、心すら曝け出したら、アタシ達はどうなってしまうのかな。

夕焼けはもう夜の帳を連れてきて、隠したはずの恋心が一番星のように淡い色で小さくきらめいていた。

「ゆ、きな」

絞り出した声は甘く掠れて、愛おしい人の名前を呼ぶのに精一杯で。汗ばんで上気した肌が、浅く繰り返される熱い呼吸が、アタシの思考を奪っていく。時計の秒針がいつもより遅く進んでいるような錯覚。あるいは、アタシの心臓だけが、早く進んでいるのかもしれない。

友希那の華奢な指先は、アタシの手を捕まえて離そうとしない。不意に、するりと指先が深く絡まっていって、まるで恋人を象るように私達は手のひらで体温を共有した。思わず、頬がかぁっと熱くなってしまう。アタシばっかりがこんなにもドキドキして、なのに友希那は触れ合う指先の感触を確かめるみたいにふにふにと動かしていて、なんだかずるい。

しばらくして、動きを止めていた友希那は、繋いだ指先をそのままに柔らかく微笑んだ。

「……リサに、会いたかったの」

「っ……！」

「窓が開いて、リサの香りがして、嬉しかったわ」

ご飯を作りに行くだけだよなんて、もう言えるはずもなかった。

足の力が抜けてしまったみたいに、ベッド際へしゃがみ込む。もちろん、繋いだ手はそのままで。ほっとしたような表情が胸を甘くくすぐって、つられたアタシも自然に頬が緩む。

友希那のこんな顔を見られるのは、きっとこの世界でアタシだけが持っている特権だ。それがどうしようもなく嬉しい。そうしてこの喜びは、友希那にこんな風に思ってもらえるのならば、それで良いと自分自身を納得させる充分な理由だった。だからこれは、親友としての顔。

「リサはいつだって、私の傍にいてくれるのね」

「もちろん。約束、したからね」

だから大丈夫だよと言えば、また柔らかい笑顔を浮かべて友希那はゆっくり瞼を閉じた。

やっぱり少しだけ顔が赤いけれど、部屋に来た時に比べればだいぶ落ち着いているように感じる。起きるまではこうしていてあげよう。

友希那の瞼に映る夢も、宝石のように輝きますように。

そんな風に思いながらしばらく友希那の顔を眺めていると、次第に呼吸が規則正しいものに変わってきた。きっと昨夜もよく眠れなかったのだろう。これで少しでも元気になってくれると嬉しいな。

空いている方の手で優しく髪の毛を梳いてあげると、銀糸が指の隙間からはらりと星の砂のように零れ落ちていく。柔らかな毛先は窓から差し込むオレンジ色をキラキラと反射させて、きっと今アタシの瞳は輝いているのだろうなと思った。

小さな時からずっと、友希那が魅せてくれる世界に胸を躍らせてきた。友希那が見ている世界へ連れて行ってほしかった。だからこうして、隣にいられる今が、本当に幸せなのに。

「ゆきな」

誰にも聞こえないように、
友希那にも届かないように、
そっと愛しい名前を紡ぐ。
――――どうかそのまま、眠っていてね。

「……すき」

溢れてしまった言葉を取り消さない代わりに、あなたのベッドに顔を埋めることを、どうか許して欲しい。カーテンの隙間を縫って、夜の風がふわりと部屋に入り込んできた。どこか遠くで下校のチャイムが聞こえる。一つ二つと数えながら、あどけない夢に沈んでいった。

■■■■

火曜日。いつもなら家の前に立っている友希那の姿がそこにはなかった。

あの後は結局、八時頃に息を切らせた友希那のお母さんが帰ってくるまで一緒にいた。アタシが居るのを見つけて開口一番に「よかった」とくしゃりと笑った友希那のお母さんは、手を繋いでいるのを見て更ににっこりと笑ってくれた。その後の事は任せしてしまったのだけれど、もしかしたらまだ体調が悪いのかもしれない。

昨日の朝を思い出して、少しだけしょんぼりとする。けれどやっぱり元気な友希那が一番だから。照り付ける太陽を見上げて歩き出そうとした時、玄関が開く音がした。

「おはよう、リサ」

起きるのが少し億劫だなと思うような日も、友希那が傍にいてくれるだけで気合が入る。好きな人に会えるというのは、アタシにとってそれくらいの原動力だった。扉を開けて出てきた大好きな人は太陽よりずっと眩しくて、喜びでジリジリ焼け付く心がエンジンを鳴らす。

「ゆ、友希那！もう大丈夫なの？」

「ええ、昨日はありがとう。助かったわ」

「よかったぁ～！あ、荷物持とうか？病み上がりだし――」

「リサ」

あれ、おかしいな。もう熱は下がったはずなのに。
掴まれた手が熱い。友希那の顔も、なんだか赤い。

「夢じゃなければ、いいのだけれど」

朝日が燦々と降り注いで、整然と並ぶ家や喧騒に染まりつつある街を照らしていた。並木も光をいっぱいに溜め込んで、気持ち良さそうにさざめいていた。眩しいくらいのいい天気。お気に入りの日傘には、今日は二人で入ろうか。

いつもより近くにある友希那の影と、通い馴れたはずの通学路は、いつもとは違う日常へアタシ達を連れ出してくれた。

歌声ロストデザイア

トラ柄

凄いと、称賛の言葉をよく貰う気がする。気が遣えるだとか周りをよく見ているだとか、あとは、場を和ます才能がある、だとか。人懐っこい性格のためか、相談事も少なくはなくて、ロゼリアのみんな、バイト先のモカ、同じクラスの日菜から、頼られたり相談を持ち掛けられることもしばしば。バンドをやることになってから、特に増えたなあという印象で、困った人を助けられるならそれはとても嬉しいことであって、なにも卑下しなくてもいいのではと思ったりもしなくはない。ないんだけど。

「リサはやっぱり凄いわね」

そうやって長年の幼馴染が言葉をアタシに向ける度に、どうしたって心臓が痛みだすのだから、アタシは、きっと周りが思ってるほどできた人ではないんだよ。

カランと、氷の音がした。それが目の前に置かれたグラスに注がれていたアイスコーヒーに、氷が溶けだして沈んだ音だということに気づいたのは音がしてから少し経ってから。ここがどこであたしはなにをしていたのか、ぼんやりと前に座っている人の輪郭にピントが合うまで考えて、いらっしゃいませという声と、来客を告げる鈴の音色でようやく喫茶店に来ていたことを思い出した。随分と思考が寝ぼけたみたいにふわふわしてるのは意識をどこか遠くにやっていたからに他ならなくて、それは、ちょうど音が鳴ったグラスを手に持った人物が大いに関係している。ストローを伝った黒い液体を含んで苦いと顔をしかめたその人は大の甘党で、コーヒーに何個も砂糖を入れるような人なのに。どうして今日に限ってブラックで飲もうと思ったんだろうか。

「砂糖、入れないの？」

「……入れるわ」

眉を目いっぱい寄せて、一言で表すならしかめっ面。珍しいね、ブラックで飲もうと思ったのと声をかけてみれば、そうではないと返される。

「リサが」

「アタシが？」

「ええ、貴女がなにか考え事をしていたように見えたから」

「……え」

「なに考えてるのか、とか、私も考え出してうっかり入れるのを忘れてたの」

「そ、っか」

あたしのせいか、なるほどね。そうやって友希那は用意されていたシロップを流してみるけど、これじゃあまだ足りないのだろう。店員を呼んでシロップの追加をお願いしていた。アタシはというと、友希那と店員のやり取りを見つめながら、また、頭がこことは関係のないずれた考えを浮かび上がらせてしまう。原因ははっきりとわかっていた。いるけれど、どうにも口に出せそうになくて口ごもってしまい、結果的に友希那に心配をかけさせてしまった。これが、みんなに頼られているアタシかと、自嘲気味に笑っていると、タイミング悪く店員とのやり取りを終えた友希那に見られてしまっていた。今日は、噛み合わない日かな。やること成すことが裏目に出てる。

「なにか、可笑しかった？」

「ううん。そうじゃ、ないよ」

「……そう」

手持ちぶさたに口をつけていなかったアタシのグラスを手に持って、なにか余計な言葉が出てこないように、口内に液体を流す。喉元を通った甘いはずのそれは、どこか薄っすらとしか味がしなくて二口目は暫く舌で転がして自分の味覚が正常であることを確かめる羽目になってしまった。ちゃんと甘い。よかった。特に体のほうにまで心のあれそれが影響を及ぼしているってわけじゃないみたい。モゴモゴと口を動かしてはいらない心配をどこか遠くに。それから、可能な限りで通常通りのアタシでいられるよう、友希那に全く関係のない話題を振ろうとして。

「……あ」

機械的な音があたしたちの間から聞こえて、言葉を出そうとした口が止まる。今日は本当にタイミングが噛み合わない日だ。

「……噂をすればなんとやら、だね」

画面上に映し出された文字の羅列は記憶に新しい、つい数分前にアタシが話題に出していた人物。お揃いのアクセ、やっと貰えましたー、と、その子がここにいるわけでもないのに間延びした音声が脳内で簡単に再生されるほどには関りがある子。といってもアタシはこの子について知ってることはそれほど多くなくて、どちらかと言えば、よく話に挙がるもうひとりのほうが、情報的には多い。不器用で素直じゃなくって、それから、アタシが相談をよく受ける子から、とても大事にされている。話を聞いてるとそのどれもが微笑ましいなと思えるもので、今回のこともそうだった。随分前、一緒に出掛けたのに好きなバンドの新譜が出るのを思い出してレコードショップに行ったとかなんとか。その話を聞いてから暫く経っても特になにもなく、あの時、頬を膨らませて、少し悲しげに目を伏せたバイト仲間のモカに思いだしたかのように話を振ればこれまた膨れっ面で聞いてくださいよと、愚痴のようで、違う、ただ単にその子の話がしたいだけなんだろう会話が始まった。いくら誘っても絶対途中で脱線しちゃうんですよね、あたしのこと自由人とかいう割には蘭のほうがよっぽどそうなんですよ、と口を尖らしながらも興味のある話ができるのが嬉しいのか、はたまた、その子のことを思い浮かべて自然に緩んでいるのか。内容はかろうじて怒っていますと主張しているのに、声は愛しさを含んだ、とても優しいものだった。

そのモカから、ようやくお揃いのチャームが買えたとの報告。そっか、よかったねと、心の中でお祝いしているとなにかあったのかと、目の前から声がする。

「いやー。さっき話してたでしょ。その続きみたいなものかなあ」

「ああ、青葉さん」

「そうそう」

そういえば今日の話の始まりはこの子だった。相談というわけでは

ないけど、そんなようなものを聞いたんだと、友希那に言ってしまってから、そこから。最近よくアタシに向けられる言葉を友希那からもらって、意識がどこか別のところに行ってしまっていた。

「また、相談？」

「え、いや、今回のは違うよ。ただの報告だよ」

「そう」

どっちかといえば、モカからは相談よりも一方的な話を聞かされることが多い。それでも、さっきの友希那の会話から予測するに、アタシは頼られているという印象なんだろう。

「モカからは、あんまり相談はされないよ」

「そうなの？」

「うん。それよりも日菜のほうが」

と、ここまで言ってしまったなと一瞬で口を閉じる。案の定、確かに日菜から頼られてるほうが多そうねと友希那が言い出して、話が一番最初に戻ってしまう形になってしまった。

『リサは、みんなから頼られているわね』

『そんなことないって』

『どうして？』

『……だって』

『前から思っていたのだけど、リサは自己評価が低すぎるわ。周りもそうだと思うけど、私だって、貴女のこと頼りにしているから』

これは、喫茶店に入って注文してからの会話。またモカがと切り出して終えた話に対して友希那がアタシにくれた言葉。それから。

『リサは、十分凄いと思うわ』

キシ。音を立てたのはアタシの中心。この人から言葉をもらってしまったことを思い出して、それに対しての、アタシの心臓の反応。

日菜のほうがと届けられてしまった友希那からは、また、初めと似たような会話をアタシに向けてしてくる。やっぱり、リサはみんなから頼られているわねって、おかしいところなんてなにもないのに、口元に手を当てて、友希那は笑って言うんだ。

頼りにされてる、凄いね。言われ慣れたはずのもの。それを、この幼馴染から向けられると、アタシの頭はぐらぐらぐちゃになっていく。そんなことはないよ。そんなことは、ないのって、ぐるぐる同じことが脳内を埋め尽くして、あっという間にいっぱいになっていく。他の誰に褒められてもそうかなと軽く流せるのに、この人から言われるものだけが、アタシをおかしくさせる。理由は、至極単純。アタシが、友希那に後ろめたい感情を持ち合わせているから。

「……リサ？」

「ごめん。ボーっとしてた」

「体調でも悪いの？」

「そういうわけじゃないよ」

ならいいんだけどと、まだどこか心配気にこっちを見ている瞳が見ていられなくて、俯いた。直視していたら、潰れそうだった。優しい日差しみたいな眼差しは、本来アタシに向けられていいものじゃないって。黒い感情が大半を占めてしまった今のアタシには、とても眩しすぎて、こうやって反らして逃げることしかできない。悪手だなと、気づいたのは、友希那のトーンがひとつ下がった、本気の心配声が聞こえてきてから。

「病院に行きましょうか」

「え、いやいやいや、まってまって、本当に大丈夫だから」

「でも」

「……大丈夫、なんだよ」

心の病で内科にでも連れて行かれそうな雰囲気を必死で食い止めて、大丈夫を繰り返す。それでも全然納得する気配のない友希那にアタシは頭を抱えて。

「……もしもの、話なんだけど」

どうにも病院に行くかおかしい理由を話すかしないと解放してくれそうにない友希那に、少しだけ、本当の話をしようと、思った。

ただ、意気地がないとはわかっていても、どうしても予防線を張ってしまう。持ち上げられる言葉で埋め尽くされたアタシとは到底程遠いことを今から言うのだから、もしもの話として出さないといけない気がした、という理由もあるけれど、大半はアタシが臆病だからだ。

「アタシが」

息が、詰まる。文字にしてみたらほんの何十文字かの言葉が、重くて喉の奥から出てきてくれそうにない。代わりに、乾いた息がアタシの周りに吐き出される。

やっぱり言わなくてもいいんじゃないかな。これまでもずっとそうであったわけだし。これからもアタシが心を押し潰せば、なにもないまま、日々は穏やかに流れていくはずだから。

だけど、でも。アタシはずっと抱えていけるのかな。今にも不安定でグラグラ心が揺れ動いているのに、これからもずっとなんて、誰が保証するんだろう。だったら、もしもの話として一度形にでもしてしまったほうが楽なんじゃないか。いい人だ、凄い人だと言われる度に苦しくなるのなら、いっそ。アタシはこんな想いを抱いてる、聖人でもなんでもないちっぽけな人間なんだと、遠回りにでも伝えてみても。

「友希那は……友希那はさ」

歌うの、好き？

迷いに迷って、結局のところ、話の前後が全く繋がっていないことを口走ってしまう。誰が聞いてもわからないであろうアタシの胸の黒ずみを小さく形にした言葉。直接的な物言いではないけれど、今しがた口から出た言葉こそが、アタシを苦しめて追い詰めてる要因に他ならない。ただ、これだけじゃあなんのことかなんて、アタシ以外にはわかりっこないけど。友希那だって、今のをそっくりそのまま言葉通りに捉えちゃってるだろう。

「いきなりどうしたの」

「え、あー。いや、なんとなく」

「……リサ？」

それもそうか。話の切り出しがもしもの話なんだけど、アタシが、と言っておいて、続けて言葉が友希那は歌うのが好きかという問いかけだったわけだし。自分でもなに言ってるんだろって、思わなくもないよ。でも口から出てしまったものは取り消しようがなくて、ちゃんと友希那には聞こえている。

じゃあさ、もしもの後に何を続けたかったのか。言わなくて正解、なんだろうけど。言えなかった言葉を貴女にあげたら、どうなるかな。もしも、あたしが歌うのやめてよって言ったら、友希那は、どうする？

手にしたグラスを、傾けた。もう全部の氷は溶けてしまったのだろう、ぶつかる音もなにも聞こえない。そのまま、今度こそどうか出てきませんようにと、薄められた液体を流し込んでいく

ほらね。アタシは、友希那やみんなが思ってるようなできた人間じゃない。今思ったことが全てで、とても綺麗とは表現し難い感情しかあたしの中にはないんだよ。言えるはずもない黒く濁った感情であたしは構成されていて、胸の内は曇ってぼやけるガラス玉みたいになってるから。だから、アタシは最近友希那を直視できないんだ。

喉の奥が焼けたみたいに痛い。ヒリヒリする。無理やり捻じ込んで戻した言葉のせいかな。体が体調不良を訴えてきて、いよいよ心の不安定さが自身に影響を及ぼしてきたのかと、眉をしかめた。

でも、不安で、仕方ないんだよ。ロゼリアで一番実力がないのははっきりと自分なんだって自覚しているから。勿論努力は怠らないしどうにかみんなに置いていかれないようにと自主練だってしてるけど。最近、友希那がステージに立って歌う度に遠く感じる。確かにすぐ近く、数十メートルも離れていないその距離にいながら、他のメンバーや観客の誰よりも、友希那から遠ざかっている錯覚に陥って、ベースを掲げる手が力を失いそうになる。足元がふらふらと軸を無くしたみたいに定まらない。視界に靄がかかって、友希那が時々霞んで見える。アタシは、なんのためにここにいるのだろうと、一番初め、友希那を近くで支えられるためにということを、意識して思い返さないと、弾けなくなりそうで。

どこにも行かないでほしい。アタシの手の届かない範囲に行かないで。

歌姫として成功すればするほどに埋まらない距離がより一層できてアタシは泣きたくなる。歌わないで、歌って、歌わないで、歌って。なによりも友希那の歌声が好きなアタシと、そうじゃなくなってきたアタシが入り混じって、頭の中でどっちを優先させればいいのか喧嘩し始めるのに、いまだに決着はつかない。試行錯誤してる間は意識もここではないどこかにもっていかれることが殆どで、だから、今日みたいなことが多くなった。

結局、アタシは友希那にどうしてほしいんだろう。そうやって、ずっと、ずっと、同じことを繰り返しては自己嫌悪して、最後は諦めたように笑うんだ。なにもないよって。

「あのさ、さっきのなんだけど」

なんでもないから、とりあえずコーヒー飲んだらここ出よっかと静けさに包まれたここからの脱出を図ろうとしたのに、フワリ。なにかに掴まれる感触がしてそれが阻まれた。温かい体温。冷たい、アタシの手とは真逆の熱がここを去ろうとした手に重ねられていた。

「ゆ、きな」

「リサ、さっきの質問なのだけど」

ああ、今、その返答をしてしまうんだ。零さなくてもよくて、言わなきゃよかったと後悔までしそうになって、最後にはなにもなかったことに自分の中で終わろうとしたのに、掘り返すんだ。聞き流していいよ、本当に、なんでもないんだからと取り繕っても、結構頑固なほうの性格の友希那が引くはずもなく、スルスル、流れるようにして過去の会話が続けられてしまう。

「歌うことは、私の全てだわ」

あ、と、開いた口から短い声と空気が漏れた。チクリ、刺さったのは小さな棘。それほどダメージがないのは、ある程度返答がどんなものか予測できていたから。

「……うん」

「歌以外、私にはないもの」

「……そう、だよね」

「だから、歌うこと、好きよ」

なにを当たり前のことを。友希那ならそう答えるって、誰よりもアタシが知ってたのに。だから、改めて突き付けられた現実で少しでも傷つくなんておかしいにもほどがある。

自嘲気味に笑ってしまえば友希那からは不審そうな目を向けられる。違う、違うよ。友希那の答えがおかしいんじゃなくって。自分自身の考えに呆れて笑ってたんだよ。

どうにもならないことは最初からわかっていた。だから、言葉という形になんかできやしない。あたしは称賛の言葉をかけられる度に、自己嫌悪して、生きていくしかない。

「リサ」

今度こそ本当に、ここから出て帰ろうとしたのに、さっきよりも強く手が握られる。はっとして顔を上げると、逃がさないとでもいうような瞳がアタシを射抜いていた。蛇に睨まれる蛙ってこんな気分なのかな。体が、上手に動いてくれない。なにやってるのって、軽く流そうとしたのに、それすらできない。アタシの口からはたったの一言も出てくれそうにない。

喫茶店にはアタシたち以外にも人はいるはずなのに。嫌にシンとした空気が周りを纏って、話し声もなにもかも、遮断された静かな空間に放り込まれた感覚に陥った。

リサ、と、もう一度名前を呼ばれる。芯の通った、凛とした声。アタシはそれに、なにも返せない。

「リサ。私は、歌うことが好き。ロゼリアで歌うことが、好きなの。隣に貴女がいてくれるから、私はいつも安心して歌えているの。リサがなにを悩んでいるのか全部をわかってあげれることできないけど、でも、お願いだからそんなに自分を苦しめないで」

「な、んで」

自分を苦しめるだなんて結論に至ったの？掠れた声でようやくそれだけ吐き出す。

「私が、歌うことが好きって言ってから、貴女の表情、とても痛ましかったから」

「……それ、だけ？」

「だから、私が歌うことになにか理由があるのか、考えてみたのだけど」

違ったかしらと首を傾げて、直後に、前にも言ったはずよ、貴女が支えてくれるからあたしは歌えているって。真っすぐアタシを見据えて言葉をくれる。

「ふ、ふふっ」

「リサ？」

「ああ、うん、いや、ごめんね。なんでも、ないよ」

咳払いひとつして、今度はアタシから友希那に向き合う。

「……友希那は、これからも歌ってて」
「勿論、そのつもりよ」
「うん、それで、いいんだよ」
「貴女が」

リサがこれからも隣にいてくれるなら、私は歌い続けられるわ。

ずるいな。本当に。アタシがこんな風になってる原因がなにか不透明なままなのに。この人は的確にアタシの欲しい言葉をアタシに与えてくれる。ため息をひとつ吐いて、この人には敵わないやと、肩を竦めた。それと同時にやっぱりアタシは周りが思ってるような人間じゃないね、とも思う。これからもたったひとりのために楽器を続けようと考えてしまうのだから。

歌わないでという言えない懺悔や暗い欲を伴った想いは告白されることなく消えてしまったけれど。

歌って、歌わないで、歌って、その、白か黒かの決着は。

きれいな理由が決め手、というわけにはいかなかった。

エウレカ

cucumber

目が覚めてしまったのは、君がアタシにとっての王子様だから。

「……？」

「違う、違うの、これは」

夢だと思った。思いたかった。深夜のどこかの瞬間に、沸騰した頭では時間もわからない。

ぼんやりとした暗がりの中、至近距離に知っているはずの、知らない顔があった。

「変なこと考えてたわけじゃなくて、その、そういう意味じゃなくて、だからその、ただの間違いだから、私」

離れていくよく知った声に、はっきり怯えの色が混ざる。冷めていく熱、徐々にアタシを侵食していく胸の痛みが、今この瞬間が夢であればいいという一縷の望みをを打ち砕いた。

「……あ、えっと、だいじょーぶ、アタシ何とも思ってないから」

胸の内からこみ上げる嫌な寒さが、アタシをちゃんと嘘つきにしてくれた。大丈夫、何にも覚えてないよ。熱くて柔らかい感触も、高鳴る胸も、離れる瞬間の寂しさも、谷底に落ちていくみたいな絶望も。

「ありがとう。だから忘れて。……起こしてしまってごめんなさい」

薄闇と前髪が表情を隠しているのに、友希那がアタシの答えにほっとしたのが見て取れてしまったから、当たり障りない笑顔を作って自分に貼り付けた。彼女が振り向くことなくドアの向こうに消えるまで。

「忘れて、なんて……ずるいなぁ、友希那は」

自分からしてきたくせに。

叶わないと知りながら、アタシがどんなにその瞬間を夢見ていたか、どれほど焦がれていたか。ずっとずっと封じ込めた心の奥底で望んでいたその柔らかさを、忘れられるわけがない。

そしてそれは、やっぱり叶わない未来だったから。間違いだって、期待してたものじゃないって、触れた同じ唇がそう言ったから。

忘れられるわけがない。唐突に突きつけられた現実に何も考えられなくて、なのにどうしようもなく胸が痛くて、涙も声も出ないんだ。

友希那とキスをした。

朝の光が眩しくて、アタシは恐る恐る瞼を開ける。

考え事をしながら寝落ちてしまったらしい。

いっぱいに広がった明るい視界に映るのはひとりきりの自室。友希那は寝ているのか出かけてしまったのか、家の中はやけに静か。目を開ければそこに彼女がいるんじゃないか、という不安――あるいは淡い期待はカーテン越しの朝日に溶けて、落ち着きと落胆が混ざった息が喉を抜ける。

起きたけど、もう全然眠くなんてないけど、アタシは寝坊したということにして、薄い布団の中に再度潜り込む。まだ朝ごはんを作りながら、友希那におはようなんて言えそうもなかったから。

思えば、高校を卒業して、幼馴染とのルームシェアを提案したのはアタシからだった。友希那料理できないでしょって伝家の宝刀を抜いてしまえば、友希那は照れとも渋々とも取れる表情をしながらも頷くしかなかったらしい。

学業とRoselia(の活動を続ける中、だいたいの家事はアタシがやって、友希那はほぼ音楽に集中してもらう。友希那は『リサばかりに負担をかけている』と時たま申し訳なさそうにするけれど、こうでもしないとアタシの罪悪感が首をもたげてくるからだ。

罪悪感の元はといえば、アタシが友希那に一つ隠し事をしたままルームシェアを始めたことだ。それも、友希那が知ればすぐに今の関係ごとクーリングオフされそうなくらいの隠し事を。

アタシは友希那に恋をしていた。それもずっとずっと昔から。

誰かの役に立てればいい、誰かに笑顔になってもらいたい。その『誰か』はアタシの中でずっと友希那の姿をしていた。

世界で一番大切な人を選ぶなら、アタシは迷わず彼女を選ぶ。

幼い頃、その純粋さゆえに友人に特別な感情を持つ人はきっと少なくない。とはいえ大きくなれば大抵の人がそれを忘れて普通の友情に落ち着くというのに、アタシは残念ながらそうじゃなかった。アタシにとって友希那はずっと特別なままで、世間ではそれを恋と呼ぶことも知ってしまった。

この気持ちは友情なのだと、何度も自分を叱責した。

なのに友希那と恋仲になったところを想像しては、現実であればいいのにと願ってしまう。だからやっぱりアタシは恋をしているのだと思う。なれるものならばそんな関係になりたいと思っていた。例えばデートに行ってカップルストローでジュースを啜ったり、手を繋いで映画を見たり、もっと正直に言えば――友希那とキスをする、とか。

けれどそんな甘い夢は、いざ現実になってみればただ苦しいだけだった。

下心を隠してルームシェアを初めてから数ヶ月。バイトがとびっきり忙しい日で、帰って来てすぐに眠ってしまった。

何時間眠っていたのかもわからない頃、ふと意識が戻ってきた。虫の知らせ、というやつかもしれない。

なぜかベッドで眠るアタシを、友希那がじっと見下ろしていた。友希那はアタシが起きていることには全然気づいてないみたいで、ただそこに存在していた。

それでも眠たい頭は呑気に寝直そうとして、また目をつぶった。アタシが寝てるかどうか確認に来たんだろうと考えて、アタシがまた夢の中に帰ろうとした、そのとき。

友希那がアタシにキスをした。

夢を見ているんだと思った。友希那がそばにいるときに眠ってしまったから、都合のいい夢を見ているんだと思った。

熱く柔らかい唇と友希那の匂いに反射的に目を開ければ、それは夢でもなんでもなくて。視界いっぱいの金色と目が合った瞬間、アタシの体温は急上昇した。友希那とキスしてる、長年恋を秘め続けたその人とのキスは、想像したよりもずっと甘くて、幸せで――

「……は」

友希那が飛び退くように唇を離す。普段のアタシなら絶対放っておかないのに、戸惑ったような、怯えたような彼女を置いて、アタシはキスの余韻にぼうっとしていた。

「違う、違うの」

けれど次の瞬間、震えた友希那の声がアタシの夢見心地を粉々に吹き飛ばした。

違うから、間違いだから、そういう意味じゃないから。否定を早口で捲し立てる彼女はどこか必死な顔をしていて、冗談でもなんでもないんだって言外に分からされてしまう。アタシの抱いたような気持ちは、友希那の中には欠片もないんだってことを。

友希那はアタシに恋愛感情は持ってないって、頭ではわかっていた。友希那に優しくされるたび、幼馴染としての特別をわずかに振り向けてくれる度、何度も何度も自分に言い聞かせてきた。それでも大好きな友希那の声で聞いてしまうと、胸が切り裂かれるみたいに痛い　痛くて、けれどこの恋を友希那に知られてしまったら、二度と取り返しがつかない別れが訪れるのもわかっていたから。アタシは幼馴染として友希那に笑いかけるほうを選んだ。

恐らくは魔が差して、ともすれば勘違いを引き起こす行為に走ってしまった自分に怯える友希那に、ちゃんと大丈夫って言ってあげたくて。少しでも気持ちを軽くしてあげたくて。焼きごてを当てられたように悲鳴を上げる恋心に蓋をして、思ってもいない嘘を並べた。

そうしたら友希那はほっとしたように頬を緩めてくれて。アタシの恋を否定したことで安心する友希那に、胸の奥はまたずきんと痛むけれど、アタシの嘘で安心してくれたことに少しだけ安堵もする。

「忘れて」

穏やかさが戻った声色で、最後に友希那はそう言った。

告白するまでなく、アタシは見事にフラれてしまった。

気だるい朝の中、アタシは昨夜友希那の唇が触れた部分に指を当てる。初めて好きな人と交わしたキスは、レモンよりもずっと酸っぱい失恋の味だった。

「わかってたのに……こんなに、ツラいんだなぁ……」

叶わないと知りながら手放せなかった恋は、こんなにも重くのしかかる。胸の奥がずきずきと重くて、たとえ友希那が留守だとしても起き上がれそうになかった。

食欲もないし、起きるのはもう少しだけ休んでから。

そう決めて目を閉じる。まだ涙は出なかった。

どうしてそんなことをしたのだろう。

唇が触れた部分に指を当てる。違う。もっと柔らかくて、もっと熱かった。

私の唇は、自分が思っていたよりもずっと克明に彼女を覚えていた。冷えた指先では、リサの唇の代わりになどならない。

昨晩のことだった。

次に出演するフェスのことで担当者と打ち合わせをしていたら、帰宅がずいぶん遅くなってしまった。リサより帰宅が遅くなる日など滅多にないけれども、そんな日でも彼女は晩御飯を作って待ってくれているのが常だった。その日も「遅くなってごめんなさい」そう謝ってから、コーヒーを啜るリサの向かいで夕飯を食べるつもりだった。

何やら様子がおかしいと気づいたのは、リサと同居しているアパー

トの扉に鍵を差し込んだ瞬間。いつもなら漏れる明かりとともに玄関へ駆け寄ってくるリサの足音が聞こえるのに、今日はドアの隙間から暗がりが覗くばかり。

「……リサ？」

小声で呼んでも、返る声はない。

無意識に足音を消して歩く。二人暮らしの小さなアパートの、さらに小さな部屋の片隅に彼女はいた。簡単に布団を引っ掛けたその寝顔は、覗き込んでもびくりとも反応しない。

「……お疲れ様」

起こさないように、ほとんど唇だけで呟いた。

私と違ってリサはバイトも続けていた。学業とバンドとバイトをこなすそのタフさに舌を巻くのはいつものことだけれど、そんな彼女でも、こうして疲れてしまう日があるのだ。

「……」

気がつけば、私は浅く呼吸する彼女の寝顔に引き寄せられていた。昔は見慣れたものだったけれど、私より早く起きてご飯を作り、私より遅く寝て家事を済ませる彼女の寝顔が、今となっては珍しかったのかもしれない。

柔らかい髪、長い睫毛、白い肌。

記憶にある幼い頃の面影を残しながら、けれど思ったよりずっとそれは綺麗なものだった。

メイクがなくても十分に整った顔立ちだけれども、練習と研究の成果であろう化粧品の彩りは、彼女をより華やかに魅せている。ヘアセットを解いた無防備な髪は、一房掬ってその感触を確かめてしまいたくなる模様をベッドに描いていた。

そんな絵に描いたような女性の美しさの中でも、一際私の目を引いたのは唇だった。言い訳をするなら、別に普段から興味津々で眺めているわけではない。なぜかその日、唐突に、私はリサの唇の虜になってしまった。

毎日リップクリームでの手入れを欠かさないそこは、新鮮な果実のように瑞々しい。ほんの少し、浅く開き、規則正しい寝息をかすかに立てる。その僅かな動きは、リサが生きて呼吸していることを確かに感じさせる。

……ふさいだら、どうなるのだろう？

「……っ」

自分に驚いて、後ずさりする。

その時なら、きっとまだ引き返せた。魔が差したような好奇心を起こした自分に驚き、その一瞬我に返ることができたのだから。

いけなかったのは、きっと。何故そんなことを考えたのかと、大真面目に理由を探し始めてしまったからだ。

触れてみたい。

どうしてそんなことを思ったのか、訳を探して彼女をじっと見つめた。どこか高鳴る胸の鼓動に知らないふりをして。

寝顔が綺麗だから。人肌恋しくなったから。幼馴染の彼女なら許してくれそうだから。一つずつ心当たりを考えて、どれも違うと首を振る。そうして気づけば、私の全部でリサのことを考えていた。

私の一番深いところまでリサでいっぱいになっても、深夜に影差した魔は私を捕まえたままだった。理由もなにもわからないまま、ただ

欲求だけが膨張していく。ふれたい。その色づいた桃色を、私の同じ部分で塞いでみたい。

「……っ」

くら、と視界が傾く。一瞬のブラックアウト。

柔らかい。あたたかい。

肌寒い十月の室温でも、窓の外に浮かぶ月の明るさでもなく。次の瞬間私が覚えたのは、唇に意識したその感触だった。

同時に奇妙な、凄まじい満足感が私の中に溢れる。ただこの一瞬が永遠に続くなら、酸素さえなくとも生きていける——そう、錯覚するほどに。

視界が戻ったのはそれよりも後で。……だから、リサと目が合っていたことにも気づかないままだった。

きっかけなんて、多分なかった。

気づけば、奪っていた。

その一方的な好奇心の押し付けを、他ならぬリサに気づかれたと知ったとき——私はちぎれた言葉を繰り返す、壊れたレコーダーと成り果てた。

「違う、違うの」

何を、どうして否定したのかもわからなかった。

十年以上の付き合いの中で一度も見たことがないほど、リサは呆然としたまま固まっていて、路傍の石が何を考えているか読み取るよりもずっとずっと難しかった。だから嫌われたのではないかと反射的に考え、誤解されることは避けたいと思ったのかもしれない。

「変なこと考えてたわけじゃなくて、その、そういう意味じゃなくて、だからその、ただの間違いだから、私」

見開かれた大きな瞳に、私は必死で言い訳を並べる。けれどそれも口をついて出てきたもので、何の実態も伴っていなかった。

変なこととは何なのか、想定された意味は何だったのか、何をどうすればそんな間違いが起きるのか。リサにもし指摘されたとしたら、私はその答えをひとつも持ち合わせていなかった。

それでも。

「だいじょーぶ、アタシ何とも思ってないから」

空っぽの、上辺だけの謝罪だと分かりながら、リサは私を許した。無かったことにしてくれると、そう言ったのだ。

私はそのことに安堵した——のと同時に、胸の中が一気に冷たくなった。吸った息が氷の塊となって滑り落ちたようだった。ただ、それをリサに悟られることだけはならないと直感で判断した私は、冷たくなった喉の奥をせき止めるように俯いた。

「忘れて」

願うように、祈るようにそう答えた。

きっとリサではなく、自分自身にそう言い聞かせた。

幼馴染とキスをした。

その夜見つけたのは、知ってはいけないパンドラの箱。

その後、息を殺すように玄関に潜み、リサが眠りについたらしきことを確かめた私は早朝に家を抜け出した。

好奇心は猫を殺すという。

私の浅はかな好奇心が叩き壊したのは、十年来の幼馴染との平和な日常——私そのものだった。

寝不足気味の日に、真昼の太陽がいやに眩しい。

行くあてもなく公園のベンチに腰を下ろして、まるで家に居場所がない中年男性みたいだ、と自分を嗤ってみる。実際、私の状況は十分も彼らと違わない。このままリサと顔を合わせられないままであれば家に戻れないのだから。

とはいえ、やってしまったことの理由も反省もままならないのでは、謝罪の一つも持って帰れない。

恥を忍んで、バンドメンバーに相談してみることにした。……私にはリサ以外、プライベートなことを相談できるほどの友人がほぼいないからだけれども。

スマホをタップして耳に当てると、かなり長めなコールの後に、生真面目な声で返事があった。

「もしもし、紗夜？　少し相談に乗ってもらいたいのだけど、今から時間あったりしないかしら」

電話口から、紗夜に似つかわしくない騒ぐような黄色い声が聞こえる。声の主まではわからないが日菜だろうか。彼女も彼女でどういう状況にあるのだろう？

「そうですね……構いませんよ。すぐに向かいます」

一瞬躊躇った後、彼女から了承の返事があり、切れた。何か取り込み中だったのなら悪いことをしたと、柄にもなく申し訳ない気持ちになる。いつもしているような音楽の相談でないばかりか、リサにキスをしてしまったなどというプライベートにも程がある——それも、百パーセント私に責がある内容を——それこそ柄にもなく相談しようとしているからなのだろう。

やったのは私なのだから、私が悪い。それは分かっていても、何が原因でこんなことをしでかしてしまったのか突き止めない限りは、リサのいる場所に帰れない。

「湊さん、お待たせしました」

顔を上げる。

なぜかそこにはリサ以外のバンドメンバーが大集結しており、何から話したものかとぼんやり考えていた私には驚くべきことで、申し訳なさなど全て吹っ飛んでしまった。

「燐子、あこ、あなたたちまでどうしたの？」

「友希那さんが電話してきた時、あこ達紗夜さんのクエスト手伝ってたんですよ！」

あこが興奮した声——一度電話口の向こうから聞こえていたのとそっくりな声をして身を乗り出すと、紗夜が慌てたように制止した。

「ちょっと宇田川さん！　だいたい湊さんは私に連絡してきたのに、あなたが一緒に行くと言って聞かなかったからこうなったんですよ」

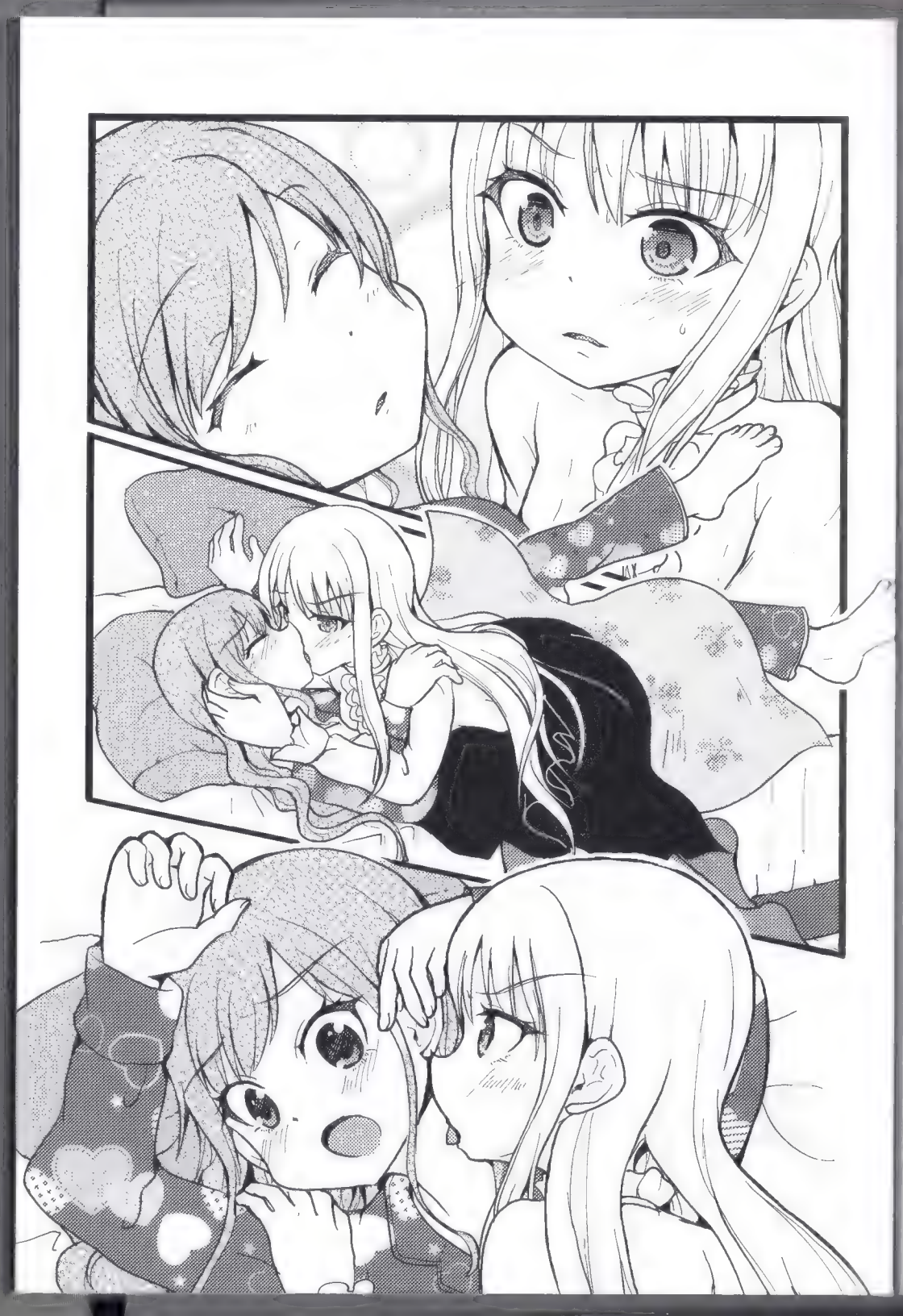
「NFO序盤では……一番難しいクエストだったので……お邪魔なら席を外しますが……」

「いいわよ、どうせ人の口に戸は立てられないわ」

二人にも座るよう促す。最初は紗夜だけに話すつもりだったけれど、私とリサが練習中にギクシャクしてしまえば、勘の良い燐子なら何かあったと気づくだろう。どうせ知られてしまうのならば、最初から事情を話しておいた方が何か良いアドバイスが得られるかもしれない。

「私ね、リサにキスをしたの」

「友希那さん……」
「湊さん……」
「リサ姉かわいそう」
事の顛末をあらかた話し終わったところで待っていたのは、信頼しあってきたはずのバンドメンバーからの呆れた視線とため息だった。最年少のメンバーに至っては辛辣な非難のおまけまで付いて。
「……反省してるわよ」
メンバーの沈黙がチクチク肌を刺して、纏まらない気持ちをそのまま口に出した。
「どうしてそんなことを、湊さんらしくもない」
「分からないから相談に乗って欲しいのよ。あの夜はただ……したいと思って、そうしたら止まらなくなって……」
「友希那さん……キスに興味があった……とか……？」
「でも、以前から興味があったわけではないわ。昨日突然……そう思って……」
「わかりました友希那さん！　ちょっとそこどいて下さい」
あこが何か思いついたように立ち上がると、ベンチから私たちを追い払いその場に横になる。そうして目を閉じると……。
「さあ友希那さん！　これで昨日のリサ姉と同じです！　友希那さんとリサ姉のためならあこ、いくらちゅーされてもいいですよ！」
「あこちゃん……っ！」
「だいじょーぶだよりんりん」
「待ちなさい」
何故か涙目の燐子に、燦々と陽が照る公園のベンチに横たわるあこ。
正直言ってシュールとかそういう次元で片付けられるものではなく、ここでキスなどしたら今度は通行人に通報されかねない。
「友希那さん、キスに興味あるんですよね？　あこでいっぱい試していいですよ！　したらリサ姉にもうしないって言えると思いますし」
「嫌よ、したくないわよ」
後ずさりする私に、紗夜が首を傾げる。
「キス自体に興味があるのなら、今井さんにするのも宇田川さんにするのも同じではないでしょうか。どうしてキスをしたくなったのか考える良い機会だと思います。できれば今井さんのときと同じようにしてください」
紗夜に促され、しぶしぶ寝ているあこと視線を合わせる。近くで見るあこは目鼻立ちもはっきりしていて、なるほどリサとタイプは違うけれど可愛らしい顔をしている。
その上で、リサほどではないがよく知っているあこになら。私は、キスを――
「……ごめんなさい、できないわ」
たっぷりの沈黙の後、私はそう言っていた。あの夜に私を捕らえた欲望は、鼻先ほども顔を出さなかった。
あこのルックスは良い方なのだろうと思う。なのに、リサの時のように胸が高鳴ったり、吸い込まれるように寝顔を凝視したり、唇に触れたいと願ったり――不思議と、そんな気持ちは欠片も湧いてこなかったのだ。
「あこちゃん……！」
「ね、大丈夫だって言ったでしょ。友希那さん、ゼッタイあこにはキスしないと思ったんだ」
あこは燐子の手をぎゅっと握った後、私に向き直る。
「リサ姉にキスした理由、わかりましたか？」
「……いえ、まだ……むしろ余計、わからなくなって……」
昨日の晩は、あれほど唇同士の触れ合いを求めていたのに。やはりあれは魔が差したというやつだったのだろうか。
あこはそんな私にいたずらっぽく歯を見せて笑って、一言。
「じゃあ次は紗夜さんで！」
「えっ！？　も、もういいわよ。紗夜だって嫌でしょう」
「……仕方ありませんね。湊さんにも今井さんにも色々借りがありますから」
「紗夜まで……」
「では、私にキスをしてください。許可ではありません。依頼です。私はキスをされたいと思っています、だから安心してください」
紗夜はさすがに寝転ばず、その場で目を閉じる。仕方ないと言った割には何も恐れている風でなく、まるで眠っているリサのような自然体。これなら、昨日のように――
「……」
唇を近づけようとして、そのかなり手前で静止する身体。
したいと、思えない。むしろ――
「……紗夜、どうしてかわからないけど、したくないの。貴女のことは信頼しているし、嫌な気持ちなんて持っていない。なのに、できないの」
「そうだと思いました」
私の答えを知っていたかのような紗夜が目を開ける。揺らがない瞳は私とは違う。
そうでなければ、私が目菜に叱られてしまいます、と、何故かここにいない人の名前を出して微笑んだ彼女と、それを聞いてくすりと笑う燐子とあこに、私は直感で自分との断絶を理解した。
きっと紗夜もあこも燐子も私が欲しがっている答えを知っていて、それを直接教えてくれる気はないのだ、と。
けれど、私のために敢えてそうしているのだとも分かっていた。
「今晩、今井さんの部屋にもう一度行ってみてください。そこでキスしたいと思えなければ、魔が差したということで謝って下さい。けれどもしも、今井さんとキスしたいという気持ちになったのなら」
紗夜はそこで一度言葉を切った。あこが頷いた。その意味を、きっとまだ私は知らない。
「これからのお二人のために、今井さんにそれを直接伝えてみてください」



結局その日、私が帰宅したのは日付が変わる頃だった。
メンバーと別れた後、適当な場所で時間を潰しつつ、瞼を閉じればよぎる彼女の寝顔に想いを馳せて。
すぐに家に戻ってもよかったはずなのにそうしなかったのは、まだ自分の中に、リサへの後ろめたい思いがあるからだろう。
寝ていればいい、昨晩のように。そう願って開けるドア。
部屋は静かだった。迷わず足を向けた寝室で、やはりリサは眠ってしまっていた。
「……可愛い」
メイクも何も落とした後だったけれど、一日ぶりに見た彼女の寝顔はやっぱり綺麗で吸い込まれそうになる。
「ごめんなさい」
魔が差したのだと、そう言って昨日のことを謝りに来たはずなのに。
この身体に湧き上がる、昨晩と同じ、いやもっと激しい衝動。謝罪なんてとてもできそうにない。
魔が差したのではなかった。魔がこの衝動をもたらすとしたら、私自身が魔なのだった。
「……っ！」
捨て鉢のような心地だった。突き動かされるがままにその唇を吸う。
「むぐっ！？　ん、んっ！」
乱暴に奪った瞬間、意識が戻ったらしいリサがくぐもった悲鳴を上げたが逃がさない。頬に手を添え頭を固定して、さら強く唇を押し付ける。
衝動に身を任せる。もうどうにでもなれ、どうせ遂げられぬ謝罪ならば。
「ん、ぐっ、んん……」
リサが声を上げようともがけばもがくほど、離したくない欲望は強まっていく。歌唱のために鍛えた肺活量で彼女の言葉を奪う。酸素不足で目の前がくらくらして、海の底に沈むように胸が苦しい。やめてしまえば楽になれるはずなのに、呼吸を殺して接吻を続ける。今はリサの言葉さえ、何も聞きたくない。
「……ぷはっ」
それでも限界は訪れて、二人の唇が離れる。酸素を取り込もうと浅く早く息をするリサに言葉を発する余裕はなく、私にも再度口付けをする力は残っていなかった。
「ゆ……きな……」
それでも素の体力差だろうか、呼吸だけで精一杯な私より先に、切れ切れながらもリサが呟く。
「どうして……キスしたの……？」
「わからない……わからないわよ」
ぎゅっと奥歯を噛み締めた。弱々しい問いに、満足に答えることすらできない。
「リサとキスがしたいの」
だから代わりにそう答えた。昼間、誰かが言っていたように。
「他の人とじゃなくて……リサとキスがしたいの」
真っ暗な部屋で俯いていたから、リサの表情はわからない。
「そっか」
けれど、小さくリサはそう言った。

「……いいよ、友希那……アタシに、キスしても」
キスしてもいいと、そう言った。
「いいの？」
「うん」
問い返してもリサは頷くだけで、その真意も心も預かり知ることはできない。
それでも私は止まれなかった。月の光を浴びた狼人間のように、言葉はこの心を獣へと変えた。
だってリサがいいって言ったから、私は悪いことなんかしていない。自分に言い訳を並べ塞ぐ、私を許したその唇を。
「んっ……っ」
細い声が上がったのも束の間、彼女は抵抗する気を無くしたかのように、自分の同じ部分でなぞる。その度に背筋に痺れにも似た歓喜が走った。
（気持ちいい、リサとのキス……）
リサの言葉で罪悪感が小さくなってしまったせいだろうか。更なる欲望が私を蝕む。キスが気持ちいい、もっと別の場所にもキスしたい。
「……リサ」
首元が大きく開いたワンピースを少しずらし、鎖骨をなぞる。
呼んだ名前は確認ではなかった。宣告だった。
「……」
それでもリサは黙ったまま、健気にもこちらを見つめ返した。
そのいじらしい視線に、何故だか鳩尾のあたりがきりりと痛む。その癖いけないと叫ぶ最後の良心を、こうまでしても何も言わないのだから大丈夫と、真っ黒な衝動が塗り潰していく。
「っ」
触れた瞬間、びくりとその身体が強張った。
口ではああ言っていたものの、やはり好き勝手に接吻をぶつけられるのは不快なものなのだろう。そう思い当たるや否や何故か胸の奥が苦しくなり、誤魔化すように何度も口付けた。
一緒に住んでいても、彼女の肌に触れる機会なんてそんなに訪れない。柔らかくさらさらで、こんな状況にも関わらず不思議と安心する匂いがする。その感触は言い表そうにも樹脂にも布にも似ておらず、リサの肌としか形容しようがない。
やわらかい、あたたかい。唇から伝わる感触と異様な状況に、徐々に思考が溶けていく。
もっと、もっと味わいたい。
「ひゃっ！」
唇の隙間から舌を覗かせ、肩をぺろりと舐めた。びっくりしたようなリサの反応でさえ、今の私にはスパイスになる。
お風呂上がりなのか、思っていたような塩気はなく、乾いた肌が湿った舌に吸い付くような、不思議な感触が残る。味などないはずなのに、癖になりそうだった。
「ちゅ……っ、っちゅ」
何度、その肌に口付けて。
何度、舌を這わせただろう。
何時間そうしていたのかもわからない。きっとずっと長い時間だった。私には一瞬の欲望の発露であっても、受け止めるリサにとっては

果てしなく終わらない夜に違いない。
首筋に、肩に、鎖骨に、そして、唇に。何度欲望をぶつけても、焦燥感は募るばかり。物言わぬリサに触れながら考える。夜が明けるまでこうしていたら、私はこの欲を知る前の湊友希那に戻れるのだろうかと。
触れる、触れる、リサとのキス。それでも胸の奥はこんなに苦しい。気持ちいいのに、止められないのに、止める気もない癖に、心ばかりが身勝手に締め付けられる。
ねえ、どうして——
「友希那」
耳元で、よく知った声が私を呼んだ。気づかない振りをして、私はその唇を——
「好きだよ、友希那」
「え……？」
奪おうとしたリサの唇が塞がれることは、ついになかった。
やめるつもりなんてなかった。一度いいと言われたのだから、他に何と言われても独りよがりな欲望を遂げる気でいた。
なのにたった一言で、リサは私を石にした。
身体だけではない、身を焦がすような接吻への欲も、押し潰されそうな胸の痛みも全てが静止して、ただ目の前にリサだけがいた。
「アタシ、友希那のこと好きなんだよ」
リサは観念したかのように目を閉じた。死にゆくひとが見せるような諦観がそこにあって、目の端から涙がこぼれていった。
「だからさ……」
一雫の涙が、メドゥーサを殺す。
その次の瞬間。目に映ったのは、驚きに大きく見開かれたリサの瞳だった。
「んうっ、ちゅっ……ん」
言いかけたリサの言葉を、私の喉の奥に搦めとる。
重ねた唇の隙間から舌を伸ばし、リサの口内に差し入れた。一瞬の逡巡の後、リサはおずおずと口を開き、私を迎え入れる。
「く……ちゅるっ、んくっ、う」
繋がった部分から唾液を啜る。私の唾液を塗りつけるようにリサの中を蹂躙し、隅々まで舐め尽くす。唇同士だけのときよりもずっとずっと強い快感が駆け巡り、私の身体までもがびくびくと震えた。
「ゆ、ゆふぃなぁ……」
涙混じりの覚束ない声が私を呼ぶ。名前の奥に隠したリサの望みを、残念ながら私に察することはできない。どこまでも私は身勝手だった。奥で縮こまっている彼女の舌をつついて、もっと触れたいとメッセージを送る。
……もしも嫌なら、噛みちぎってくれるのも構わない。そうすればリサは自由になれる。
「ん……」
それでも彼女の中で、熱いかたまりが蠢いて。ゆっくり私を絡め取る。
「ふ……っ！？」
途端に、脳を突き上げるような快楽が骨の髄まで響く。
熱い。気持ちいい。——嬉しい。

リサが、遠慮がちながら舌を絡ませてくれることが。私を受け入れた彼女の口内が、頬肉が触れるように私を圧迫してくれることが。彼女の意思で、そうしてくれることが。

あれほど私を苛んでいた胸の苦しみは、今や満ち足りた多幸感に姿を変え、焦燥にも似たキスへの欲望は、火が付いたように熱く燃え盛る別の感情と成り果てていた。

ああ、そうだ——

私はキスをしてみたかったんじゃない。

私は、キスを交わしたかった。他の誰でもなく、リサとキスを交わしたかった。

「っ、は……」

唇を離せば、間に銀色の糸が引く。

とろけたリサの表情に、ぞくりと心がさざめく。この表情も、彼女のキスの味も、私だけが知っていればいい。誰も知らないまま、リサの秘密を閉じ込めておきたい。

そうだ、これが——

「ねえ、リサ」

「ん……？」

「これが、恋なの？」

「どうしたの、突然」

優しく尋ねるリサに、返す言葉はやはり不恰好で単純だ。

「リサとキスがしたいの」

言葉にすればたったそれだけの、ちっぽけで傲慢な望み。あの時からずっと消えない熱。

その理由がずっと、わからなかった。

「他の誰ともキスをしたくならないし、リサに私以外の人とキスをしてほしくない。でも、リサとならずっとキスをしていたいと思うし、貴女があんなことを口にするから、もっと欲しいと思ってしまった」

キスは恋人同士がするものだと、一般常識として理解していながら。その欲求が湧き上がった時に、一番に恋に思い至らなかったのは。

きっと、認めたくなかったから。誰かを好きになることが、こんなにも暴力的で耐え難い衝動なのだと。

「私を好きだと言ってくれたけど、リサも同じような気持ちなの？」

リサは困ったように頬を掻いて、ふっと視線を下に逸らせる。都合の悪いときに言い訳をするみたいな仕草で、彼女は。

「……したいよ、友希那とキス。たぶん友希那が思っている以上に」

さっきまでの行為を慈しむように、想いを閉じ込めるように、リサは自身の唇をそっと指で隠した。

「我慢するの、大変だったんだよ。ずっと好きだった人がいっぱいキスしてくれるんだもん。でも友希那はきっと、キスに興味があるだけだから……そう思ってずっと、我慢してた。アタシの気持ち、友希那に押し付けちゃダメだからさ」

さっきまでリサに触れていた唇を、ぐっと噛んだ。痛かった。リサの言葉が、こんなにも痛かった。

紗夜やあこや燐子に言われても、何とも思わなかったのに。たった一人リサには、キスに興味があるだけだと言われたくなかった。

ああ、私は大馬鹿だ。天秤の糸はとっくに切れていた。ずっと私の中にあった、ありふれた答えに気づいてしまった。

「我慢しなくていいと言ったら？」

猫のようなリサの瞳が、まん丸く形を変える。

「……友希那は、それでいいの？　友希那を好きなアタシに、下心ばっかりのアタシにキスされて、それでいいの？」

「……構わないわ」

薄い布団の下、リサの拳に力が入る。上体を起こしてまっすぐ私を見つめたかと思えば、恥じらうように視線を下げる。

「……友希那、目閉じて」

目を閉じれば、もうリサの存在は視認できない。次にリサの存在を知るのは、リサが自分への戒めを解いた時。

暗闇の中、来訪者を待つ宇宙に星のひとつになったとしたら、こんな気持ちだろうか。目の前にリサがいるのに、間違いなくその時の私はひとりぼっちだった。

キスなんてあんなに済ませたというのに、変に心臓がうるさかった。

リサはどんなキスをするのだろうか。そもそもリサはキスをするつもりなのだろうか。私はずっと置いてきぼりなのだろうか。

「……いい？」

震えるリサの声に、こくこくと頷いた。

だって、だって私は——

「……」

リサとするキスにしか、興味がなかったから。

微かに触れるだけの、優しいキスだった。音も無いような、臆病なキスだった。リサらしい、奥ゆかしいキスだった。

目を開ける。

泣きそうなリサがきゅっと唇を引き結んで震えていた。

「大丈夫」

何故か私まで、泣きそうだった。

「好きな人がしてくれるキスが、嫌なわけないわ」

「友希那」

「もっと、してくれる？」

キスをねだるなんて、なんて私らしくない行為だろう。私にもっとも似合わない、恋などという色を着て。

リサのキスは臆病すぎて、本当は少し物足りない。私がしたように、もっと乱暴で遠慮無しでも構わないくらいだ。なのに、そんな物足りないキスが、リサらしい心遣いに溢れたあのキスが、今はどうしようもなく恋しい。

目を閉じる。今度は怖くなかった。リサが絶対に迎えにきてくれると知っていたから。

鼻先をリサの匂いがかすめて、熱いくらいの温度に触れる。今度は少し長いキス。

胸が熱くていっぱいで、破裂してしまいそう。

「ん……」

離れる唇が名残惜しくて、代わりにどちらともなく抱き合った。

「友希那……すき……」

「……私も、好きよ」

リサの匂いがする。私を包む彼女は陽だまりのように優しく暖かく、私が隠していた言葉を簡単に引きずり出してしまった。

「幸せすぎて……しんじゃいそう……」

一方でそう漏らした彼女の表情を見遣れば、それはそれは安心したように頬を緩ませていて、全部を委ねてもいいとばかりに私の肩に頭を預けてきた。

恥ずかしくて、とても言えそうにないけど。

ずっと、ずっとこうしていたい。他でもないリサと、ずっと。

「大袈裟ね」

二人に向けて、湊友希那はそう言った。一人は私に寄りかかって涙をこぼす幼馴染に。もう一人は、そんな幼馴染をいつまでも抱きしめて離さない自分自身に。

真空でもがいていた最中に、急に酸素が吹き込まれでもしたように心は軽く、今なら星の彼方へも飛んでいける。きっと、リサとなら。

「……もう、我慢、しなくていいの？」

「何を今更」

弱々しく袖を引く手に自分の手のひらを重ねる。もう片方の手で栗色の髪を掻き分け、潤んだ瞳でキスを待つリサを引き寄せた。

「んっ……ちゅ。ふ、っ」

我慢しなくていいの、とそう聞いた、リサの舌が私を割って侵入してくる。

どうか、我慢なんてしないで。私の中にリサがいてくれる。そう思うだけで身体中から湧き上がる今の歓びは、リサしか与えられないものなのだから。流行歌の歌詞に倣うなら「愛しさ」と表現するものなのだろう。

でも、そんな風な安い言葉にはしたくない。

歌にすれば、きっと納得のいく形でこの心をリサに届けられる。けれど残念なことに、私は今伝えたいのだ。胸の奥でせめぎあっている多幸感やもどかしさを、彼女を手放したくないと願う自分を、今、リサに。

だから代わりにキスをした。リサに寄り添うように舌を這わせ、彼女の中へ。

キス。一般常識として、恋人の象徴である行為。

それを、この私が、一度は音楽以外に何も要らないと言ったこの私がするのだから。ねえ、リサは分かってくれる？　破裂しそうな想いを抱えて、私はこんなにリサとキスがしたいのだと。

「くちゅっ……ちゅ……っ」

「ん、んんっ……っ」

もっと深く繋がりたくて、リサを自分の中に取り込みたくて、舌を奥深くまで分け入らせる。啜る彼女の唾液は何よりも甘く、柔らかな部分を舌先でくすぐる度、ここに辿り着けるのは世界で自分だけなのだという奇妙な優越感に支配される。

そして何よりも、リサのキスは天にも昇れるような心地良さだった。先程より積極的なキス。触れるか触れないかの力で口蓋を撫でたかと思えば、舌の付け根を執拗にねぶってくる。私が快楽に沈み切りそうになれば、甘えるように舌同士を絡ませて休憩を入れてくれる。

その動きの一つ一つがリサだった。目を閉じて呼吸を止めても感じる。優しくて気遣い屋の、私の自慢のリサだった。

私は、リサとキスをした。

「んっ……！」

限界に達して訪れる、長い長いキスの終わり。あるいは、次の瞬間

までのインターバル。

「はぁっ……ふっ……」

……ああ、そうだ。

息の落ち着かないリサの耳元で、私は今日ここに戻ってきた理由を思い出す。あるいは、自分の衝動に名前が付いたせいもあるのだろう。

「……リサ」

「友希那？」

「……昨日、ごめんなさい」

謝ろうと思っていたのだ。最初はそのために、自分の行為に理由を探していた。

「昨日？　……あ！　気にしなくていいよ。ちゃんと友希那の気持ち、伝わったし」

「それじゃ、私が収まらないのよ。寝込みを襲った上に、リサの気持ちも考えないままだったから……」

あの日だって、今日と何が違うわけではない。

好きだったから、キスをした。

でもそれを上手く言葉にできなかったのは私の責だ。

けれどリサは私のことを責めることはなく、代わりにこう言った。

「んー。じゃあ、アタシのしたことも許してくれる？」

「リサが？　何かあったかしら」

何かされた記憶などないのだけど。……ひょっとして、私が寝ている間に唇を奪われでもしていたのだろうか？

「えっと……実は今日はずっと寝たふりだったんだよねー。昨日はホントに寝てたんだけどさ。だって友希那にキスされてからずっとそのことばっかり考えちゃって寝付けなかったというか、あはは……」

リサは、優しい人だ。

それが、明後日の方向に向かって早口で言い訳を重ねる彼女に、まず抱いた感想だった。

「そんなの、別に悪いことじゃないでしょう」

「でもさ、友希那との約束、破っちゃったから」

「約束？」

……忘れて、って。

「あ……」

「なんとも思ってないなんて嘘だよ。アタシ友希那のこと好きだったからさ、友希那とのキス、忘れられなかったんだ……」

「……リサ」

その言葉に、胸がぎゅっと熱くなる。

リサは優しい人だ。

優しくて、健気で、いじらしくて、どうしようもない。

「……やっぱり、昨日のことは忘れて欲しい」

だから私もそんなことを囁く。

「へ？」

「あのキスは私がまだ、リサを好きだって気づく前だったでしょう？……だから、あれを忘れてもらえないと、リサとの初めてのキスが、気持ちの籠らないものになってしまうから……その」

しどろもどろながらそう告げる。いかにもファーストキスへの憧れがありそうなのはリサだけれども、私も案外ロマンチストなのかもしれない。

「……友希那っ！」

がばっと音を立ててリサが飛びついてきた。受け止める、間一髪。

声ではっきりわかるほどぐずぐずに泣いていたから、背中に手を回して撫でてあげる。

「無理っ……そんな……友希那にそんなこと言われたら、忘れるとか、余計無理だよっ……！」

黙ってリサをあやしながら、心の中だけで返事をする。そうねリサ。きっと私も、忘れるなんてできない。忘れられなかったから、あなたへの気持ちに気付いたのだもの。

「友希那とのキスなら、全部覚えてたいよ……！　優しいのも、初めてのも、昨日のだって、全部。好きだもん、友希那のこと」

「……」

たくさんのスキと一緒に、まだ涙を流すリサに我慢できなくなって。おでこにひとつだけキスを贈る。

「リサはずるいわ」

リサの声で想いを告げられる度、私は自分の中にある新しい気持ちを見つけてしまう。

思えばそれは昔から。友情も音楽も、恋も愛も、不器用で鈍感な私が自分自身を発見するとき、きっかけはいつもリサだった。そうして自分に気づくたび、心に棲み付いたリサの大きさに気づく。

昨日のキスも、今日のキスも、忘れられるわけがない。

今の私は、好きを知ってしまったから。

幼馴染とキスをした？　――否、

リサとキスをした。

結んで、ひらいて

にゅー

ある日突然、運命の赤い糸というやつが見えるようになった。

あれは確かアタシが小さい頃、昼前から両親に連れられて近所の公園に遊びに行っていたときのことだ。小さなアタシの目線は低くて、普段は両親と手を繋ぐと手を少し上げなきゃダメだった。でもお隣の一家も一緒に公園に行くときはそうじゃない。目線も背丈もほとんど一緒の、大切な幼馴染と手を繋いで歩くから。あの日も両家誘い合わせて遊んだから、だらんと垂らしたアタシの手の先には友希那の小さな手がしっかりと握られていた。

二人揃って公園と歩道の境界を跨げば、そこは心底楽しい場所。今では十秒で横断できる狭さが、当時のアタシには——アタシ達には、果てしない運動場に他ならなかったのだ。すべり台を順番に滑り落ちた後、そのままの勢いで天を衝くジャングルジムに登って、下から手を振る友希那に手を振り返す。友希那もおっかなびっくり登ってきて、飽きずに二人、ジャングルジムを這いずり回る。たまに両親達に促されて、小さな水筒から麦茶を補給。鬼ごっこや追いかけっこに類似したくだらない遊びを次から次へと思いついて、追う側と追われる側を何度も繰り返す。友希那と二人だとどれだけ駆け回って遊んだって全然満足できなくて、先にお日様が力尽きた。気づけば空は夕闇に染まり始めていた。

公園にちらほらといた人影は太陽が傾ぐにつれて減って行って、やがてアタシ達以外の子供は影はなくなった。それなのに、すっかり待ちくたびれた様子の両親達に頓着することもなく、幼いアタシと友希那は砂場の砂をかき乱すことに躍起になっていた。目的は、お城の建築。ここに自分たちの住む家を建てよう。どうせずっと二人一緒なんだから、もう二人で暮らしちゃおうとか、そんな感じの動機で。どちらが言い出したかは記憶にない。心底くだらない発想で笑っちゃうけど、幼いアタシ達は心底本気、大真面目だ。だって、今では一歩で渡り切れる狭い砂場が、一軒家を建てるに足る広大な敷地に見えたのだから。友希那と二人暮らせたなら、とっても幸せで素敵な毎日が待っているに違いない。そう思っていたから、アタシとしては別に家は狭くても良かった。友希那と住むのが願いだったから。けれど、家から持ってきたジョウロとスコップを構えた友希那はそうじゃなくて。

「リサにふじゆうさせたくないから、広いおうちにしよう。そうね、どうせならお城みたいに」

まるでドラマを見て覚えたかのような難しい語彙を駆使して、友希那は友希那なりにアタシのことを気遣ってみせる。そうなればアタシに異論があるはずもなくて、アタシ達は二人で大事業に着手することにした。当然だけれど、公園の管理人さんに土地を貰う許可や確認なんてとっていない。幼い二人は結構賢くて、作業を分担した。お城の建築に必要な材——つまりは砂を掘って調達するのがアタシの仕事。土地を水で固めて平たくするのが、友希那の役目。材の調達と地固めが終わり次第、二人で建築に取り掛かる手はずだった。

黙々とそれぞれの仕事をこなしていた時、ふと友希那の方を見て、アタシは異物を発見した。徐々に濃くなる茜色の世界の中、それに紛れるかのようにか細く煌めく一本の赤い糸。目の錯覚かとも思ったけれど、それは確かに存在していて、友希那を始点に何処かへ向かってぴんと伸びているのだ。よく見てみれば、出発点は友希那の左手の小指だ。

「そのあかい糸、なあに？」

借りたスコップで砂を掘り起こす作業を中断して、こう尋ねた。だって、その日ずっと一緒に駆け回っていた友希那が、いつの間にか手に赤い糸を結びつけていたのだ。しかもその糸は、視線で辿ればずうっとどこかに伸びている。すべり台の下を潜って、待ちくたびれてはいるけど未だアタシ達を遊ばせてくれている両親の前を通る。ジャングルジムに絡みついて、地面を這って、公園の出口へ。そして外に出た糸の行き先は見えない。どこまでも伸びる糸を手に巻きつけているのだから、誰だって気になるだろう。

アタシが訊ねた時、友希那はジョウロを使って砂場の一角をふやかすことに夢中だった。きらきらと輝く一条の水流を見る目がとても真剣だったのが目に焼き付いている。幼い友希那は問いかけに応じて手を止めて、上等の蜜のような黄金色を訝しげに細めた。きょろきょろと自分の身体を眺め回した後、泥だらけの手であちこちをまさぐるものだから、綺麗な白色のワンピースには指の軌跡を残すかのような筋が刻まれる。友希那が立ち上がって一回転すると、裾がふわりと浮いて、やがて重力に従って落ちる。それを追うように糸も一周するけれど、なぜだか糸は絡むことがない。

「そんなもの、どこにあるの？」

「どこって、ゆきなの左手にむすんであるじゃん」

「んん……？」

沈みゆく夕日に手を透かして、角度を変えて凝視しても、友希那には見えないらしい。アタシには見えて友希那には見えない。子供心にはこのことは全く理解できなくて。きっと友希那がいじわるを言ってアタシをからかっているんだ、なんて思考に囚われてしまう。ついにアタシはふつふつと湧き上がる身勝手な怒りに身を任せて、友希那を糾弾し始めた。

「なんでそんないじわる言うの！」

「いじわるなんかじゃない。見えないものは見えないよ」

友希那も昔から頑固なところがあったから、二人は譲歩なんてせずに、言い合いを始めてしまう。友希那には本当に見えていなかっただろうし、アタシには本当に見えていたのだから、仕方ないのだけれど。しまいにはその言い合いは喧嘩にまで発展した。

ぎゃあぎゃあ言い合っているうちに喧嘩を悟った両親達が飛んできて、その場は御開きとなった。行きは手をぶら下げているだけで誰かの手を掴めたのに、帰りはそうじゃない。目線の高さにあるゴツゴツした手を握る。帰り始めた時こそじりじりと燻る怒りを処理しきれなくてだんまりを決め込んでいたけれど、両親と手をつないで帰路を辿るにつれ、友希那と喧嘩してしまった罪悪感の方が勝ち始めた。一歩踏むごとに荷重を増す重荷に耐えかねて、家の前まで着いた途端に視界はぐにゃぐにゃに歪む。遂にはアタシが大泣き

しながら謝るものだから、友希那もつられて泣き始めて、今度は謝罪のし合い。謝罪が二往復した頃にまた両親達の仲介が入って、アタシ達は無事仲直りした。にじむ視界の中、夕方と夜の境目が空にくっきりと刻まれていたのをなぜかはっきりと覚えている。

思えばあれは、アタシと友希那が起こした最初で最後の喧嘩だったかもしれない。ほら、アタシ達はすれ違いばかりが多くて、衝突することすらできなかったから。

結局、糸が見えたのはあの日の間だけだった。あの糸に『運命の赤い糸』という名前が付いているのを知ったのは喧嘩の日から随分と後だ。確か、小学二年生くらいの時の国語の授業とかで知ったと思う。生まれた時から付いているそれは、文字通り運命で結ばれることが決まった二人を繋ぐ。繋がれた二人は、どんな困難や成り行きを経たとしても必ず一緒になる。あの日見た糸がそれなのだとしたら、アタシと友希那が結ばれていなかったことだけは確かで。友希那に対する想いを自覚し始めて、気持ちが重みを増すにつれ、その事実はアタシを苛んだ。

中学生の頃には、友希那の方へ向いた感情のベクトルが友情とか幼馴染だとかそんな枠を逸脱していることをはっきり自覚していた。そんな折に、友希那のお父さんの件。憧れのフェスでこき下ろされて夢敗れてしまった友希那のお父さんは、失意にくれるわけでもなく、ただ淡々と音楽に関連するものを遠ざけた。大人びてきて、立ち居振る舞いに落ち着きを見せてきていた友希那は、その一件以降冷徹なまでに感情を落として、いつしか人との繋がりを振り落とすかのように音楽に没頭していった。傷だらけになりながら、真っ直ぐに突き進んで行く。日に日に態度は硬化していって、友希那が垂れ流す鮮血を拭ってあげることさえできないまま、時間は巻き戻ってはくれない。

アタシ達の関係自体に何があったわけではない。それなのに開いていくアタシ達の距離。これも赤い糸で繋がれていないからなのかな、なんて考えていた。絶対に離れたくはないという意志は確かにあるのだけれど、友希那の近くにいると邪魔になってしまうし、何より傷ついていく友希那を直視するのに耐えきれなかった。そんな状態で、糸も繋がっていないアタシの恋慕なんて実るはずもなく。

だからいつしか、アタシは幼馴染という立ち位置にしがみつき始めた。

幸せな夢を見ている。

リサが選んだ黒色のシックな遮光カーテン。その隙間から差し込む朝の柔らかな日差しは、私のおでこのあたりに熱を溜める。ちりちりと肌を焼くけれど、熱いわけではなくて、慈しむような暖かさが私の意識を優しく揺さぶる。そんな心地よい異物感に私は目を覚ました。目を開けてみればあまり見慣れない淡い色合いの天井。右の半身にのしかかる体重に気づいて視線を下ろせば、視界が右半分茶色で埋め尽くされていた。言うまでもなく、リサの髪。一人で使うにはやや持て余すけれど、二人で寝るには少し狭いシングルベッド。そこで体温が一つ密着して、私の肩にはリサの横顔が乗っかる。大きな瞳は閉じられていて、まるで猫のような口角のやや上がった口は浅く開いている。ころころと変わって飽きることのない表情は、いまは安らかな寝顔。

首を上げていつも通りの部屋を見渡すと、ちっともリサの好みじゃないのに、寝室の調度は私好みのシックな装いで統一されていた。見慣れないものばかりなのに、なぜだか何もかもに安心感を覚えて、些細な一つ一つが幸せで溢れている。

ふ、と肩にのしかかる体温がもぞもぞと動き始めた。

「ん……あ。おはよ、ゆきなぁ」

私が起きた雰囲気を察知して、リサも目をこすりながら上体を起こす。まだ眠気がぬぐい切れていないのか、いつにも増してふにゃっとした声色。直後、体温が離れてほんの少しだけ寂しく思った。

「ええ。おはよう」

そんな寂しさは、挨拶を交わせば霧散した。リサが身体を起こすに伴って布団がはだける。ひやりと朝の気温がお腹を撫ぜる。それもそのはずで、私とリサには衣服の一つも引っかかってはいなかった。ぶる、と身を震わせているとふと目があって、吸い寄せられるように距離が近づく。リサが視界いっぱいに広がって、口づけを一つ。感触はすぐに離れていくけれど、自然と微笑が溢れた。

「えへへ」

リサも噛みしめるように目を細める。やっぱこれがないとね、なんて呟くのが聞こえた。

身体を完全に起こしたリサは、露わにした上半身を隠すことなく伸びをする。すらりと伸びる細くしなやかな腕が天井に向けられ、そこから滑り落ちるように肩、胸、お腹と優美な曲線が朝日に浮かび上がる。それはとても綺麗なのだけれど、彫刻のような芸術美ではなく、躍動を感じさせる生命の美だった。そんな肢体に目を奪われていると、友希那のえっち、だなんてからかわれる。伸びをしたままの勢いでリサはベッドから立ち上がって、床に転がる下着を回収。珈琲淹れるね、一度寝しちゃダメだよ、なんて言いながら寝室から出て行った。

どこまでも幸せで、これが現実ならば、と願わずにいられない夢。

そんな、幸せな夢を見た。

「――最低な朝だわ」

目を開ければベッドは広くて、現実に目が醒める。薄めの布団はたった一つの体温を保持してはくれず、肌寒さに意識はさらに覚醒した。目を開ければ窓からの日光が目を刺して、煩わしい。何もか

もが夢とは違っていて、落差が私の精神に堪える。

たまに夢に見る、リサと一緒に暮らす情景。作詞が煮詰まった時に食べるチョコのように沁みて、徹夜明けに飲むカフェラテのように背徳を孕む。それは私の本心がどこまでもリサを求めていることの証左で、幼馴染としての献身を捧げてくれるリサへの冒涜でもあった。

気分は最悪だったけれど、目覚めたものは仕方がないから、身体を起こす。布団がめくれて、寝間着にちゃんと身を包んでいることを確認。なぜだかにわかに安堵した。見慣れた部屋はいつものままで、見やすい位置にかけた壁掛け時計が指し示すのは午前七時。登校の準備をするには少し遅い時間で、慌ててベッドから立ち上がる。リサはきっと今日も私が家から出てくるのを待っているのだから、暗黙のうちに決まった待ち合わせ時刻に遅れるわけにはいかない。

いつからだろう、リサと朝一緒に登校するのが当たり前になったのは。いつからだろう、リサが待っていないと寂しさと少しの心配を抱えるようになったのは。Roselia を結成してからというもの、音楽に没頭すればするほどリサの存在は私の内部で巨大になっていく。元々私とどう存在の根幹に食い込むほど、リサがいる毎日は当たり前の風景だったというのに、一時疎遠になりかけていた時期より毎日がカラフルなのはリサのきっとおかげ。嬉しいのだけれど、リサの願いと私の欲望はどうにもすれ違っているように思えてならない

姿見で自分の顔を見れば、いまにも吐きそうな最低の顔をしている。髪もぼさぼさだ。寝癖を直そうとリサからプレゼントされた櫛を髪に通せば、意外なほどあっさりと髪は解れる。反対に心は雁字搦めで、リサのことでいっぱい。今日は作詞が捗らないだろうな、と他人事のように思いながら、身支度を整えるために私はクローゼットに手をかけた。

結局いつもより少し遅れて家を出れば、隣の家の前で既にリサは待っていた。学校の後にバンド練習が控えているから、背中にはベースを背負っている。玄関の塀に身体を預けたリサは、私が来たのを察すると、身体をこちらに向けてぱぁっと笑顔を咲かせる。

「おはよ」

まだたっぷり5m は距離があるというのに、待ちきれないとばかりに声を投げてくる。

「おはよう」

近づきながら挨拶を返す。距離が3m を切った時、リサの目が訝しげに細められるのを私は見逃さなかった。私の左手のあたりを凝視している。

「……ねえ友希那、その糸――」

「糸？　何のこと？」

訊ね返すと、はっとしたような顔が刹那浮かんで、そしてすぐに笑顔で覆い隠された。

「――――ううん、なんでもない。変なこと言っちゃってゴメンね」

「え？　ええ。ならいいのだけれど」

歯切れの悪い受け答えをしながら、リサは身体を反転。私はその

隣に並んで、通学路を進み始めた

「ところで、今朝はちょっひり遅かったね？」

「そうね、ごめんなさい。ちょっとした悪夢を見て、寝覚めが悪かったの」

「あらら、どんな夢？」

会話の流れからして当然の疑問。何も考えずに正直に答えてしまった自分を恨むけれど、もう遅い。取り繕って嘘を吐くのも不自然だから、努めて抽象的に話すことにした。

「そうね。絶対に叶わない――いえ、叶えてはいけない、とても甘美で素敵な夢　そんな夢を見たの」

「へえ。よくわかんないけど、幸せな夢だったんじゃないの？」

「ええ。だからこそ、最低な目覚めだった」

リサの頭上に疑問符がいくつか浮かぶのを幻視したけれど、それでいいのだ。私のリサに対する感情の色を、悟られるわけにはいかないから。

逃げるようなその気持ちは歩幅に現れて、我知らずリサより一歩先を歩く形になっていた。

「珍しいね。友希那が夢に見るほど望んでいるなら、それに向けて突き進んで行っちゃいそうなのに」

他でもないリサにこんなことを言われてしまうと、理不尽な怒りすら湧いてきた。そうできれば、どんなにいいか。しかしリサは事あるごとに幼馴染であることを持ち出してくるし、それはある種私への無自覚な牽制となっている。

力を抜けば溢れてしまいそうな感情の混沌、それを必死に胸の奥底にしまいこんで、なんとか言葉を絞り出す

「いいえ。至高の音楽を作り上げるために、そんな暇はないわ」

「うん、そっか。そうだね」

足音が一人分止んで、つまりはリサが立ち止まる。それに、なぜだか力の抜けたリサの声色。ふと声に混ざった感情がなんなのか気になって後ろを振り向いたけれど、その頃にはもういつもの笑顔が浮かべられていた。

「リサ？」

「話してくれてありがと。――ねえ、友希那。その夢も、アタシは応援してていい？」

「それはリサの勝手だけれど。なぜ？」

叶えちゃだめなんて、寂しいじゃん。そう呟いた後、リサは前を向いて歩くのを再開した。慌てて私も後を追う。今度は一歩リサが先を行く。

「それにね、アタシは友希那の幼馴染だからなんなのだ、とは訊けなかった。

リサの横顔に、幼馴染だからなんなのだ、とは訊けなかった。

具体的に何が、と訊かれても困るけれど、今日の演奏は何かがすれ違うような感触を得ていた。バンドを支える今井さんの低音がほんの少しエモーショナルに寄りすぎていて、湊さんの歌もちょっとざらついて聴こえる、そんな感覚。湊さんも今井さんも自分の音にばかり集中しすぎている感じもある。けれど調子が悪いわけではなくて、むしろ全体のまとまりとしては普段よりいいくらいだった。感触と音との相違が、あえて言うなら、不気味だ。

その違和感が一気に表面化したのはバンド練習の後だった。

「あこ、先ほど指摘した点、特に注意して頂戴。直近に特に大きなライブの予定はないけれど、そんなときだからこそ基礎力の向上に撤するわよ。皆、気を抜かないように。紗夜、何かある？」

練習の最後に定例の、湊さんの総括。コメントを求められて、一瞬演奏中に感じた違和感を話すかどうか逡巡した。しかし演奏自体はよかったし、自分の中で違和感を言語化できているわけでもなかったから、見送る。

「……いえ、今日はまとまりも良くて特に言うことはありませんでした。強いて言うなら、調子の良し悪しは演奏のムラに繋がりますから、できるだけ一定の力を発揮できるよう気をつけるべきだわ。私からは以上です」

「ありがとう、紗夜。その通りだわ。では、今日はここまで」

「お疲れ様です」

「おっつかれ～！」

「おつかれさまです！」

「お疲れ、さまでした」

ぐっと緩和する場の雰囲気。いくらバンド内の雰囲気が明るくなったとはいえ、練習とそうでない時の切り替えだけは曖昧にしてはいない。ある種の緊張感は常に保ち続けていて、緩和はその証拠だ。口々に練習からの解放感を口にした後、各々帰り支度を始める。それなりに付き合いが長くなってきて、いつの間にか暗黙のうちに片付けにも分担と手順が生まれていた。まずは自分の帰り支度をすませてから、スタジオの現状復帰を手分けして行うという流れ。私もまず自分のギター周りを片し始める。

「リサ、それ取って」

「あいよ～」

今井さんと湊さんの間ではこそあど言葉が多い。統計をとったわけではないが、明らかに多いのだ。『それ』でだいたい通じ合うのが二人の会話で、長い年月の積み上げた重みを日常の端々で感じる。私なんかは、生まれたときから一緒な妹の感覚的な言語の理解に今だに苦しんでいるから、少し二人が羨ましい。日常の擬音に満ちた言葉を理解できたなら、もっと通じ合えるだろうか。そんな風に呑気な――しかし切実でもある――羨望を脳内で転がしていると、二人の方からけたたましい音が聞こえた。きゃあ、なんて短い悲鳴。それに重なるようにがしゃん、どしん、そんな音が響く。

「っ……」

音と声につられて二人の方をみれば、なにに躓つまずいたのか、今井さんが湊さんを押し倒すような格好で床に倒れ伏している。どんな倒れ方をしたらこうなるのか。知らない人がみれば二人は床で

交わっているように見えるかもしれない。その横にはマイクスタンドが横たわっているが、幸い二人に直撃してはいないようだ。

「大丈夫ですか？」

声をかけるが返事はなかった。あまりに密着しているものだから表情は伺えないけれど、二人は時が止まったかのように動き出さない。

「リサ姉、友希那さん、大丈夫？」

「どこか痛むんですか……？」

宇田川さんと白金さんも異変に気づく。それでも反応はない。一瞬の静寂の後、いきなり今井さんが弾かれたように上半身を起こした。

「えっ……」

いや違う。実際に弾かれたのだ。拒絶するように宙をさまよう湊さんの両手。それらが今井さんの身体を強く押したのだ。しかし何故。退いて欲しいならばそう言えばいいのだから、そこまで強く拒絶するような謂れはあるのか、と私は訝しく思う。

仰向けに横たわる湊さんに跨るような姿勢の今井さん。その横顔には驚愕と羞恥のような色が等分配されていて、耳も目も真っ赤。

「……ごめんね、友希那。アタシ……。そんなに、嫌だった？」

「あ、違――」

湊さんが何か言いかけるけれど、聞かずに今井さんはぱっと立ち上がる。そしてそのままベースと荷物を引っ掴むとスタジオから出て行ってしまった。ドアを開けるときに見た横顔、その眦には光る雫。こぼれ落ちたそれが照明を反射してきらめく。

「リサ、待って！！」

引き止める声は虚空に散って、やがてドアの閉まる音だけが響く。あまりのことに誰も声を発することができなくて、やがて床に座り込んだ湊さんの嗚咽が空間を支配した。

「落ち着きましたか？」

反省会。その呼称がここまで似つかわしい日は二度と訪れて欲しくはない。他の客がそれなりにいるファミレスの一角、まるでお通夜のような雰囲気。泣きはらした湊さんの目元は赤く、長い睫毛は未だ湿っているように見えた。いつもならぎゅうぎゅうに詰めて五人で座るはずの四人席に、今日は余裕がある。湊さんの向かいに私が座って、白金さん、宇田川さんがそれぞれその隣。とりあえずドリンクバーを人数分注文したけれど、流石にポテトを頼む気にはなれなかった。宇田川さんも、いつもならドリンクバーの飲み物を数種類混ぜ合わせて不味い特製ドリンクを作ることに躍起になるというのに(意図が全く理解出来ない)、今日はシンプルにアイス珈琲。数滴垂らされたコーヒーフレッシュは未だ混ざりきっていなくて、無秩序な模様をグラスの中に起こす。

「ありがとう、紗夜。それに二人も。みっともないところを見せてしまったわね」

「いえ、私たちは、別に……」

「そうよ。それより、今井さんが」

「うん。リサ姉、泣いてた」

事実を再確認して、湊さんは目を伏せる。懺悔する咎人か、或いは禁忌に触れた信仰者か。そんな痛々しさを切なる何かを含んだ表情だった。

「私……酷いことをしてしまったわ」

「そもそも、なんであんなことになったんですか？」

宇田川さんのストレートな問いかけ。こういうとき、宇田川さんの素直さは非常にありがたい。天真爛漫だから、何にも臆さず本音で喋ることができる。一番聞き辛かったところをあっさりと聞いてくれて、心の中で感謝を述べておいた。

問いかけに対して湊さんはしばらく無言で、こちらもドリンクバーで注いできたマグカップの中のホットココアを眺めている。

重苦しい沈黙。しかし今井さんとの間にどんな情動があったのか、外から見ているだけだった私たちにわかるはずもないのだ。だから、湊さんの言葉を待つ他ない。

「……例えばだけれど」

アイス珈琲のグラスにたっぷりと結露が張り付いた頃、漸く沈黙が破れた。

「幼馴染としてずっと傍にいてくれる人に、恋慕を抱くのは、冒涜だと思わない？」

はっ、と息を飲む気配。飲んだのは私か、白金さんか、宇田川さんか、或いは。

「友希那さん、それって――」

「あこちゃん」

宇田川さんの逸る質問を、白金さんが制する。

「あくまでもののたとえよ。そう、例えば……」

音楽の邪魔になるような感情を、幼馴染にぶつけたら、それは。そう呟いて、湊さんはとっくに温くなっているであろうココアをぐいっと煽る。マグカップを置いて口元を拭った後、ここではないどこかをじっと見つめる。

「そう。私はリサを邪な目で見てる。リサは私の音楽に幼馴染として寄り添ってくれているのに。あのとき、リサが私に倒れかかってきたとき、私、一瞬全部忘れたの。あなたたちのことも、Roseliaのことも、全部。あのままキスなんか出来たら、この上なかったでしょうね。リサもリサで、なんだかまんざらでもなさそうな顔をして赤くなるんだもの。でも、リサに　　幼馴染に、そんな感情を向けるのは間違ってる。だから、気づいたらリサを突き飛ばしていたわ。あのまま抱き合っていたら、何もかも揺らいでしまうから。これが、ことの顛末」

途中からは、息継ぎなのか嗚咽なのか、区別はつかなかった。

「私、どうしたらいいの。リサに、なんて謝ればいいの」

臓物を吐き出すかのような、苦渋に満ちた想い。その一端を出したきり、湊さんは顔を手で覆って黙り込んでしまう。再びの静寂。もうアイス珈琲の中は混ざりきってしまって、すっかり一色に染まっている。

自分の感情を吐きたいだけ吐いて、必要なことはすべて話したと言わんばかりな湊さんの態度に、私は少しカチンときてしまった。

「湊さんが今井さんにどういう感情を持とうが、そんなの私には関係ありません」

何を言い出すんだ、という白金さんの表情。それは至極もっともな反応で、そしてそれに気づく冷静な自分も頭の片隅に確かに存在した。しかし、それでも言わねばならないことがある。

「私にはどうしても、音楽を理由にして今井さんへの感情から逃げているようにしか聞こえないわ。だいたい、幼馴染だからなんだっていうの。湊さん、今のあなたはただフられるのが怖くて一歩を踏み出せない、ただの女の子よ」

それに、幼馴染だからと言って諦められたら、姉妹でそういう感情を持つことはどうなるのだ。口に出せない身勝手な怒りは、そっと呑み下す。

「それに、知ったような口を利いてしまうけれど――今井さんが寄り添っているのは、あなたの全てであって、あなたの音楽だけではないはずよ。短い付き合いだけれど、そのくらいはわかる」

「そ、そうですよ！　あこもそう思う！」

白金さんもしきりに頷く。二人の間に幼馴染以上の何かがあることなんて、端から見ていれば正直自明だ。こういうことに疎い私でさえなんとなく察しているのに、当人らがそれで思い悩んでいるとは、夢にも思わなかった。

そこまで聞いた湊さんは、手を机の上におく。俯いたその顔は、目を見開いて少し震えているようだった。再び黄金色が滲む。一筋だけこぼれた涙は、しかしすぐに途切れた。キッと眦がつり上がる。

「紗夜、あこ、燐子。教えて頂戴。私、リサになんて伝えればいいの」

私たちの言葉は、きっと湊さんの何かを衝き動かせようだった。しかし、やっと持ち直した湊さんには悪いけれど、湊さんの問いかけに誰も正解なんて持っていない。ただ、実際には方法なんて一つしかなくて、きっとそれは――

「――ありのまま、全部吐き出せばいいじゃないですか」

白金さんが言いたいことを言ってくれた。隣に座る湊さんの顔をまっすぐ見据えて、その瞳には意志の炎が揺らめく。

「友希那さんが、今感じてること、思うこと。全部……全部、ぶつけちゃえばいいと思うんです」

というより、そうしなきゃ、ダメ。そう締め括って、白金さんは顔を伏せた。

「す、すみません……勝手なこと、言ってしまって」

「いえ、私も白金さんに全面的に同意します！」

「あこもそう思いますっ。前におねーちゃんが言ってたんですけど、好きすぎて困ってるなら、好きだっていうのを一度叫んでみたらスッキリするって！ちょっと違うかもしれないけど、そういうことだと思います」

満場一致。それに、湊さんも本当はどうすべきかとっくにわかっているだろう。きっと、踏ん切りがつかないだけ。だから、背中を押すのは、私の役目。

「湊さん。私は、あなたが今井さんとどうなろうが、最高の音楽を目指す意志に揺らぎはないと信じています。だから、どうせなら幸せな方を目指してみてもいいんじゃないかしら」

これで、言うべきことは全て言った。白金さんも、宇田川さんも同様らしく、一度の静寂が訪れる。

今度の静寂は重くはあっても苦しくはない。だって、それは湊さんの覚悟が決まるまでの待ち時間。信じて言葉を投げたのだから、もう私たちが苦しむところはなくて、あるのは湊さんが前を向くのに要する決意の苦しみ。明けない夜は無いように、やがてその時はくる。

「――――皆、ありがとう。私、いくわ」

睫毛に乗っていた雫をぬぐって、未だ煌めく涙の道筋を指で辿って、湊さんは立ち上がった。

「湊さん、ご武運を」

「頑張って、ください……！」

「きっとうまくいくと思います！」

口々に激励を飛ばす。それらを聞いているのかいないのか、湊さんは早足でファミレスから出て行った。その背中はピンと伸びていて、スタジオで見せたような弱さはもう残っていない。

「ふぅ。行きましたか」

どっと疲れた。雰囲気は緩和して、急激に空腹が押し寄せてくる。無意識に握りしめていた拳は中にじっとりと手汗を書いていて、ライブなどよりよっぽど緊張していたことを今更のように自覚する。

「友希那さんとリサ姉、大丈夫かなぁ。うまくいくかなあ」

「きっと、大丈夫だよ。そうですよね、氷川さん？」

「そんなのわからないわよ。でも、きっとあの二人なら悪い方向にはいかないでしょう。私たちは、信じて待つだけ」

そう。私たちにできることは終えた。目を瞑って、微かな不安と、気が早い満足感を舌の上で転がす。二秒それを味わった後、嚥下した。

「そう、ですね」

「……紗夜さん、いつもカッコイイけど、今日は最強にカッコイイって感じです……！」

しみじみと感嘆したような声色。宇田川さんのストレートが今度は私に飛んできて、直撃。頬がかあっと加熱するのを感じた。

「もう、何よ、それ。思ったことをありのまま言ったまでです」

「あこも思ったこと言っただけです！　それにしても、あこ、なんだかお腹減っちゃったあ」

「わ、私も。とっても、疲れました」

「奇遇ね、私もだわ。何か頼みましょう」

呼び出しチャイムを鳴らす。メニューを見るまでもなく、注文するものは決まっていた。今ならどれだけ量があっても完食できる気がする。どうやら後の二人もそんな感じだったようで、呼び出した店員さんに声を揃えて注文するのは――

「「「スーパーやけ食いセット、お願いします」」」

この後、半分平らげた頃に異変を覚え始めて、残り二口になった頃にはは切れそうな満腹感に後悔を詰め込むのだった。

思えば今日は、朝からどうにも調子がおかしかった。その原因なんてわかりきっていて。いつもより少し遅く家から出てきた友希那は、左手に異物を括り付けていた。

「……ねえ友希那、その糸――」

原因は十数年ぶりに友希那の左手から伸びる赤い糸を見つけてしまったこと。なんで、このタイミングで。なんで、幼馴染に甘んじるのに慣れた頃合いで。誰が、なんのためにアタシにこれを見せるのか知らないけれど、そいつは多分とっても意地悪で、性格が悪いに違いない。

家の隣の玄関から出てきた友希那は、当然のように左手から赤い糸を垂らしていて、しかもそれに頓着しない。

「糸？　何のこと？」

ほら、やっぱり友希那には見えてない。だらんと重力に従う友希那の左腕。その先から力なく垂れる糸を目で追うと、地面に落ちたあと、道に沿ってだらだらと続いた後、律儀に曲がり角できちんと曲がっていてその先は見えない。思わず自分の左手を見遣るけれど、そこに糸はついていなかった。諦念とともにため息を噛み殺して、笑顔を作る。

「――――ううん、なんでもない。変なこと言っちゃってゴメンね」

友希那はきっと、いや確実に運命の誰かと結ばれてしまう。いや、すでに結ばれている。ならば、アタシのなすべきことは応援で、支援で、献身で。せめて今ある立場を失わないようもがくことだった。

そこからは、本当に調子の狂った日だった。友希那が絶対叶えちゃいけない夢、なんて妙に胸に刺さる棘のような話をし始めるし、それに対して『幼馴染だから』なんて変なコメントをつけてしまったし。身支度からして、化粧ノリは悪いし髪のまとまりは悪い。授業中居眠りしているときに限って先生に当てられるし、ちゃんと済ませた課題を家の机に置き忘れてきた。昼は購買のパンがことごとく売り切れていてほとんど昼ごはん抜きみたいな有様。午後の英単語の小テストではヤマが外れた。それなのに放課後のバンド練習では指は回るし、いつもより演奏に感情が乗る。今日ほど感情を悟られたくない日もないというのに、音はアタシの感情を反映して、赤裸々なほどだ。よりにもよって耳がいいメンバーばかりだから、いつ何を悟られても仕方がない。そんなだから自分の音ばかりに耳が行ってしまって、けれど不思議とミスはしないし皆とのズレもない。本当に不思議で、不気味なくらいだった。

しかしアタシの調子の悪さは練習が終わった後最高潮を迎えた。

「――では、今日はここまで」

「お疲れ様です」

「おっつかれ～！」

「おつかれさまです！」

「お疲れ、さまでした」

今日は妙に気を張っていたから、普段より精神的な疲労が大きかった。そのせいで、普段より練習終わりの解放感が大きい。

まずはベース周りを片付けて、次は自分の荷物。広げていたスコアや飲み物をしまい終えた頃、友希那から声がかかる。

「リサ、それ取って」

「あいよ〜」

それ、の指す具体的なところは指定されていないけれど、きっと床にまとめて置いてあるマイクのケースのことだろう。流石に付き合いが長いので、こういった類の指示語はなぜだかだいたい正確に伝わる。しゃがみこんでカバンを締めた後、そのままついでにケースを拾う。立ち上がったそのままの勢いで、友希那の方に足取り軽く一歩踏み出した。

そしたら、次の瞬間視界が暗転した。

「っ……」

息を飲んだのはどちらか。気づけばアタシと友希那の距離はほとんど0。アタシはシールドか何かに躓つまずいて友希那を押し倒す形で転けたのだ、と脳の片隅にいる冷静な自分が判断する。

アタシの垂らした横髪は友希那の頬に触れて、目と目が合って離せない。友希那の股にはアタシの左膝が割り込んでいて、身体は隙間がないほど密着。かつてないほど友希那の体温を全身で感じて、アタシの脳と顔面はコンマ一秒で煮えたぎった。煮えたアタシには互いに怪我がないかを確認する思考が存在してなくて、ただただ至近距離で友希那の瞳の淡い満月に吸い込まれて行く。

頭上から他の皆が心配の声をかけてくるけれど、アタシの意識はそれを気に留めない。ちょうど隣の部屋から聞こえる雑音や話し声のようにそれらはくぐもって聞こえる。そんなものより友希那の息遣いや心臓の音の方が大きく聞こえた。それほどまでにアタシは友希那と二人、止まった世界にいたのだ。

友希那の浅い呼吸がアタシの鼻先にかかる。それはとても熱くて、ともすればアタシの秘めた願望に火を灯したかもしれない。アタシの吐く息は加熱しているだろうか。こんなに近いなら、そう、例えば口を差し出して唇同士が触れ合ったとしても、事故で済ませられるのではないだろうか。それが許されそうなほど、友希那の頬も上気している。ここがスタジオでなくベッドだったら、なんて思考も最早存在していなくて、アタシは目を瞑って、唇をそろりと差し出す。しかし望みが実現する前に、何かの衝撃に押し出されて、アタシは上体を起こさざるを得なくなった。

「えっ……」

離れる体温と、見下ろす友希那の歪んだ表情。そして突き出される友希那の両手。詰まりはアタシは突き飛ばされていて、意味するところは明確な拒絶。一気に我に返って、自分自身の浅ましさと、醜さと、そして拒まれてしまった事実に視界が滲む。

「……ごめんね、友希那。アタシ……。そんなに、嫌だった？」

「あ、違――」

考えてみれば当然だ。未だ友希那の左手に淡く輝く赤い糸は、アタシには繋がっていないのだから。さっきまでの欲にまみれたアタシがひどくバカらしくて、無様で。涙も止まらないし、何もかもから逃げたくて脚は自然と友希那から離れる方へ。立ち上がった勢いのままアタシは荷物とベースを引っつかんで、ドアノブに手をかけた。

「リサ、待って！！」

友希那が引き止める声が、ドアが閉まる寸前に聴こえた気がした。脱兎が如く。翔ぶが如く。部屋を立ち去った瞬間のイメージはそ

んな感じで、しかしスタジオを出た途端アタシの脚は止まる。

「うっ……ひぐっ、アタシ、最低だ……うう、何やってんだろ……」

思わずその場に蹲る。スタジオの入り口の前で、しゃがみこんで号泣してる女子高生が一人。どう見てもヤバい人だけれど、それはアタシのことだった。とりあえず移動しなきゃ。そう思ってなんとか立ち上がる。滲んだ視界じゃ何にぶつかるか分からないから、涙を拭うけれど、拭うそばから溢れ出るそれは止め処ない。視界に水分が過多で、とてもじゃないけれど前さえ見えやしない。けれど退かないと迷惑になるし、もしかしたらバンドメンバーが追いかけてくる可能性もあった。行かなきゃという気持ちと、行く先が見えない不安と恐怖。そんな風に途方に暮れる中で懸命に前を睨んでいると、アタシは視界に異物を発見した。赤い、一本の筋。

「赤い、糸」

友希那から伸びた赤い糸。ほんのりと光を放つそれは、滲んだ視界で控えめに存在感を示す。地面に落ちるそれは、スタジオから出てきてちょうど家の方向に伸びている。どうせこんな顔で電車に乗るわけにもいかないから、いっそこの糸をたどって、友希那の運命の相手を拝んでやろう。そうすれば、完全に諦めがつくから。

歩いてたどり着ける距離なら良いな。そう思いながら、アタシは滲んだ視界に浮かび上がる糸を道標に歩き始める。

太陽は端っこを地平線に残すだけで、見上げる先、滲んだ空はすっかり茜色だ。

糸を辿るのは、友希那との毎日を追想するのと同義だった。だってこの糸は嫌らしくアタシと友希那の思い出の地ばかり通るのだ。初めてお揃いのキーホルダーを買ったお店。練習の帰りに二人で寄ったカフェ。みんなで買い食いしたクレープ屋さん。どうしても、と頼み込んで一緒に行った映画館。ちなみに、当時話題になっていた恋愛映画を観た。

この糸を繋いだ誰かさんはどこまで意地悪なんだろう。友希那を諦めるためにこれを辿っているというのに、行けば行くほど思い出ばかりが溢れてきて、ますます友希那が恋しくなっていくのだ。

いつの間にかスタジオの最寄り駅なんかとっくに通り過ぎて、どんどん家の方へと移動して行く。もしやと思えば、やっぱりアタシたちの通う羽丘女子学園の前を通り過ぎて、ついにアタシの家の最寄り駅すら通過。結局スタジオからの帰路を電車なしで歩かされた結果だ。ローファーで来たことを少し後悔するくらいの道のり。それも最短距離を行けるわけではなかったから、かれこれ一時間以上は歩いている。それなのに歩くほどに友希那への思いは溢れて来て、涙も止まりやしない。

ついに夕日の赤がピークを迎える。滲んだ視界で茜色と糸との判別がつかなくなって来た頃、アタシは小さな頃友希那と一緒に駆け回った公園へと導かれていた。

「結局、ここなのかぁ」

もう夕方も終わり時だから、今日も元気に遊んでいたはずの子供達の姿は無い。誰もいない公園の入り口で、アタシはどうしようもなく立ち尽くす。

歩いた疲労と泣き続けた疲労、それらが合わさってもう歩けそうになかった。糸はまだまだ先へ続く。あの日と同じように、すべり台の下を潜って、無人のベンチの前を過ぎる。ジャングルジムに絡みついて、地面を這って、そして反対側の公園の出口へずっと糸は続いていて、そして行き先はわからない。あんまりな結果にいっそ呆れさえ出てきて、涙は漸く止まる。

よたよたと力なく一番近くのベンチに座った。背負ったベースがごつりと音を立てて背もたれとぶつかったから、慌てて立ち上がる。ごめんね、と呟きながら丁重にベンチに立てかけてあげて、再びベンチに座った。

涙を拭って、ぼんやりと空を眺める。もう夕焼けは遠く空の端に残るだけで、ほとんど夜。夕方と夜の境界がはっきりとグラデーションとして見えて、形容しがたいほど綺麗。

友希那と喧嘩したあの日も、帰りはこんな空模様だったっけ。空は今日もあの日も綺麗で、醜くなってしまったのはアタシだけ。その事実の重みに耐えかねて視線を下ろせば、丁度砂場が目の前にあって、幼い日の二人を幻視する。小さなアタシと小さな友希那は黙々と砂と向き合っていた。今なら二歩で渡り切れるこの面積に、本気で城を建てて二人で住もうとしていた。笑ってしまうような発想だけれど、その願いは真剣で、清純で、綺麗だった。いつまでも二人一緒だから、家を建ててしまおう。どうせなら、広くて大きいのがいい。

友希那と一緒がいいという願い自体は変わっていないのに、どこから間違えたのかな。そんな風に思ってしまって、せっかく止まった涙は再び溢れ出す。遂には幼い日の幻視すら滲んで感情が一気に溢れた。

「ゆきなぁ、アタシ、友希那と一緒がいいっ……」

ついに言葉にしてしまった想い。口からこぼれた想いは誰の鼓膜を揺らすこともなく、虚空に霧散する――――はずだった。

「リサ。その言葉が本心なのね？」

声が聞こえたのはベンチの後方。つまりはアタシが入って来た入り口の方。そっちを見やれば、空を染めゆく夜を背景にして、友希那が立っていた。

「友希那、なんで……」

泣き腫らした、そんな表現が相応しいほどにひどい顔のリサは、しかしまだ泣き続けていた。

「あなたの家に連絡したら、帰ってないっていうから。ここかと思って」

なんでわかったの。掠れた声は聞き取りづらかったけれど、確かに鼓膜に届いた。

「私達の帰る場所といったら、家か、ここかでしょう？」

私達の城は、ここにあるのだから。

正直、自信はなかった。ここが外れたら、もうアテなんてなかった。けれど、リサはここにいる。覚えててくれたんだ、なんて呟いて、リサは少しだけはにかんだ。

「隣、いいかしら」

「う、うん」

二人並んで、ベンチに座る。努めて肩が触れ合わないような距離を意識した。近すぎると、リサの顔がよく見えないから。

目と目元を真っ赤にしたリサは、横目で私を見遣る。

「リサ、まずは謝らせて欲しい。酷いことをして、ごめんなさい」

「えっ、あっ、いやいや！　友希那はなんにも悪くないよ。アタシがドジっちゃっただけだからさ」

あはは、と笑って自嘲気味におどけてみせるリサだけれど、私が言いたいのはそういうことではなくて。でも、何から話せばいいだろう。

そうだ。まずは、気持ちの確認。そして宣誓。今まで隠してきた気持ちを解き放つならば、きっと今。

「違うの。聞いて。私、リサを――リサのことが、好きなの」

「……へ？」

リサは私の顔を真正面から見据えて、口と目をまん丸に見開く。

「好きって、その……えーと、性的に？」

「そう、性的に。だから私、スタジオでリサが倒れこんで来た時、実は嬉しかった。その、き、キスしてしまいたいくらいだったの」

さすがに羞恥が隠しきれなくて、頬にかっと血液が集まるのを感じた。

「でも、リサは幼馴染としてずっと傍に居てくれたじゃない。そんなリサを邪な目で見てしまって、ごめんなさい。これがまず私の言いたいこと」

あたりはほとんど真っ暗で、月もまだ高くはない。光源といえば近所の民家の明かりと、公園の中央にぽつんとたつ大きな照明だけ。座っているベンチは端のほうだから、そんなに明るくはない。しかしそれでもはっきりと認識できる程度には、リサの頬と耳は真っ赤に染まっている。それこそ、腫らした目と目元の朱に負けないくらいには。

「えっとさ。ちょっと待ってね、理解が追いつかない。じゃあなんで、あの時アタシを突き飛ばしたの？　嫌じゃなかったの？」

「寧ろ逆よ。あの時、望んだ全てが手に入りそうだったから。リサに対する冒涜が、叶いそうだったから、拒絶してしまったの」

あまりの驚きにか、混乱故にか、いつの間にかリサは泣き止んで

いる。

「私は、リサが好き。幼馴染だからとかそんなのもう気にしないことにしたの。私は、リサが好き」

自分の本心を告白する。隠し続けたそれを解放した時、ある種の快感すら芽生えそうになる。成程、これだから人は禁断の恋に燃えるわけだ、なんて思った。

「リサといろんなことがしたい。だから、私と付き合ってきれないかしら。――良ければ、返事が欲しい」

自分の気持ちは打ち明けた。あとは、リサの返事を待つのみだ。心臓は加速して、自分の心拍が妙に大きく聞こえる。握りしめた手にはじっとりと汗が溜まる。

リサが口を再び開くまでに五分を要した。目の前の砂場、もはや残滓しかない茜色、そして私の左手。それらを順番に見ながら、たっぷり五分。随分と長いシンキングタイムを経て、リサはポツポツと言葉を紡ぎ始めた。

「アタシもね、実は、キスしちゃおうかな、なんて思ったんだ。つまり、アタシも友希那が、その……すき。大好きなの」

感情が湧き出て体が跳ねる。逸る歓喜に心が沸き立つのを感じた。

「っ、じゃあ――」

「でもゴメン。アタシは友希那とは付き合えない。」

冷水をかけられたが如く消沈する心。感情の落差に、軽く眩暈を覚えた。対してリサは、驚くほど穏やかな表情をしていて、どこか諦めたような顔だった。

「ゴメン。両想いだってわかってとっても嬉しい。踊り出しちゃいたいくらい。でも、ダメなんだ」

「……どうして？」

リサは私の左手を取って、両手で包み込んだ。

「小さな頃、ここで喧嘩したの覚えてる？」

「お城を作ろうとした日よね。覚えているわ」

そう、城を建築するためにもがいたあの日、私たちは喧嘩をしたのだ。それ以前もそれ以降も、リサとの喧嘩の記憶なんてない。

「じゃあ、喧嘩の理由、覚えてる？　アタシが、友希那の手に糸がついてるっていったのが始まりだったんだけど」

そうだ。砂場を二人で掘り進めていた時、急にリサが私に糸がついている、などと言い始めたのが諍いの発端だった。

「今なら、わかってくれるかな。私、いまもその糸見えてるんだよ。ここから、あっちの公園の出口まで、伸びる真っ赤な糸がさ」

私の左手小指を指し示すリサ。けれど、そんな糸はやはり見えない。

それを察したのか、リサはにわかに表情を暗くした。

「うん、やっぱ見えてないよね」

「でも、信じるわ。リサには見えて、私には見えないもの。そんなもの、きっとありふれているから」

わずかに目を見開くリサは、愛おしそうに私の手を一撫でした。

「……ありがとう。でね、この糸なんだとおもう？」

「赤いのよね？　それで、左手の小指から伸びる――それって」

思い当たる節が一つだけあった。この上なく有名な、その糸は。

「運命の赤い糸。友希那から伸びてるものは、多分それ。でも、その糸のつながる先はアタシじゃないんだ。言ってること、わかるよね？」

「詰まりは、私はリサの運命の相手ではない」

「そういうこと。だから、アタシは友希那とは付き合えない」

結ばれないのが決まってるのに、夢、見たくないじゃん。そう呟いて、リサはうつむいてしまった。目には今日何度目かわからない感情がたまり始めていて、いまにも決壊しそう。

「アタシ、友希那と一緒にいたい。友希那と添い遂げたい。でも、運命が許してくれないの。だったら、幼馴染として、そばにいたらいいんじゃないかって……きっと、たくさん傷つけたよね。ごめん。ほんと、ゴメンね……っ」

最後にはやや嗚咽が混じる。これが、リサの諦めの正体。

成程、運命が決めた幸せが私には待っているのだから、リサの立ち入る隙はない。そう言いたいのだろう。

でも私は、どうしても納得いかないことがあった。

「その運命、決めたのは誰？」

「し、知らないよ……」

「そんなどこの誰とも知らないなにかが決めた運命なんて、願い下げよ。私は、リサを選ぶわ」

自分の左手の小指。その先の虚空をつかんでみると、確かに糸のような何かがある気がしてきた。指先に感触がある。不条理に対する怒りが飽和して、私は立ち上がった。

捕らえたリサの諦念を逃さないようにしっかりと掴んで、ぐっと力を込める。

「結ばれる運命？　クソ喰らえ、だわ！！」

感情とともに吐き出す気合い。勢いよく右手を振り切れば、ぶつん、と何かが千切れるような音が確かに聞こえた。

「あ、ああっ！　なにしてんの！！」

背後のリサも立ち上がって、私の左手を掴む。

「よかった。その反応なら、ちゃんと千切れたみたいね。さあ、これで私を縛るものはない」

「そんな、アタシのために、友希那の幸せが……」

左手を見詰めながら、ぶわぁ、と泣き始めるリサ。なんで、なんで、なんて言いながら必死で虚空に手を伸ばす。千切れてしまった糸を引き戻そうとしているのか、どうなのか。

しかし、そんな糸はもう要らない。最初から必要ないのだ。私の運命は、私のもの。さあ、この期に及んでまだ文句があるらしいリサに、今トドメを刺そう。

「まだわからないの？」

リサの湿った顎をつかんで、私の目を見させる。至近で見つめ合ったら、かわいそうなくらい充血したリサの目に、私の姿が反射している。リサの涙の源泉は驚愕に見開かれて、奔流は一瞬止む。

「よく聞いて。私の幸せは、私が決める。そしてそれは、貴女と添い遂げることよ」

運命に刃向かう覚悟をして頂戴。そう締め括って、リサを離す。一世一代の愛の告白は、図らずも運命への宣戦布告と化した。

つい力が入りすぎたのか、頬をさするリサ。さするうちにぽろぽろと雫がそこを伝って、やがてそれは一条の筋に。そして気づけば

リサは号泣し始めていた。

「う、ううっ、う、アタシ、ゆきなをしあわせにする、う、うっ、ううううわああん」

しまいには声をあげて泣き始めてしまう。そして泣きながら幸福を宣言する。なんだかかっこがつかないけれど、それは紛れもなく想いが通じ合った瞬間だった。

「もう、何回泣くのよ」

手を浅く広げれば、飛び込んでくる体温。のしかかる体重。やはり、私の幸せはここだと再確認。わんわんと声をあげて泣くリサとその温もりに、少しだけもらい泣きをする。夕焼けはすっかり月明かりに駆逐され掛かっていて殆ど夜。月が綺麗ですね、なんて気の利いたセリフは出てこなかった。だから黙って、腕の中の幸せを逃すまいとより強く腕に力を込める。

そんな宵闇の中で、愛しい人の背中の向こう、赤い糸のようなものが虚空に散らばっていく。滲み始めた視界の中で、そんな光景を見た気がした。

それ以降、一度もあの糸が見えたことはない。

結局あの糸の正体の本当のところはわからなかった。けれど、アタシと友希那を雁字搦めにしていたのはきっとアタシ達自身。そして、縛り付けるものをほどきたかったら、糸を切らねばならないのは当たり前で。もしかしたらそれは『幼馴染』という名前の呪縛だったのかもしれないな、なんて最近は考えている。

「おっはよー！」

今日も暗黙のうちに待ち合わせて、友希那と一緒に登校する。玄関を出れば、友希那は既に家の前で待機していた。声に振り向いた友希那は、アタシの姿を確認するなり、朝日にきらきらと輝く髪をなびかせてこちらに歩いてくる。

「おはよう。今朝は少し遅かったわね？」

たっぷり5mは距離があるのに、少し大声で返事してくれる友希那。普段歩くより少し早足なのも相まって、些細な一つ一つが愛おしい。

「いやー、ごめんごめん。なんか、いい夢見ちゃってさ」

「どんな夢？」

「うーん、友希那、週末泊まりにこない？」

会話を断ち切るような、我ながら急な誘い。けれど友希那は迷うそぶりも無く。

「確か日曜日は練習もないはずよね。土曜日の夜からお邪魔しようかしら」

「よっしゃ！じゃあ、きっと正夢になるから、夢の内容はその時までお預けね」

「あらそう。楽しみにしているわ」
アタシは身体の向きを変えて、友希那と二人、並んで学校への道を歩き始める。
「そういえば、夢で思い出したんだけど。いつか話してた叶えちゃいけない夢の話、あれなんだったの？」
隣を歩く友希那は心底楽しそうに微笑して、こう答えた。
「リサと一緒ならそのうち叶うわ。その時まで楽しみにしてて」

アリエッタ、恋をして

大村　千里

窓の外を、青が流れていく。波のさざめきと、雲は少しの晴れ空と。夏の残滓がきらきらと波間に消えていく。住み慣れた街を離れていく。風にくすぐられるのは懐かしい記憶。

中学生の頃、秋に入る少し前。親に頼み込んで旅程も組んで、朝夕決まった時間に連絡するって条件付きで、認めてもらった、一人旅。

「――案外、覚えているものね」

青の景色を切り取っていた長い髪のシルエットが、そう呟いて振り向いた。誰より見知ったあなたは、記憶とは違う柔らかい眼差しで。あの頃は強張った表情で、ただ窓の外を見ていた。

「友希那も思った？」

「ええ。はっきりとではないけれど」

電車の揺れ、流れていく景色、居並ぶビルの背丈、海の現れるタイミング、隣の体温。行く先だっておんなじで、旅程だっておんなじで。淡く高鳴る心臓も、あのときとそっくりで。ただ、あの日のアタシはもっと幼くて、甘かった。

重なった色に目を瞑る。今は重なった手を握る。違うところもある。あの日は隣に座るだけで、友希那はただ黙ったままで、アタシは、景色に言葉を交えたりして、何だか空回りしていて。

抱えていたのは期待と不安で、抱いていたのは焦りと恋で。

握った手がぎゅっと握り返された。想い出から目を覚ますと、微笑んだ友希那と目が合った。

胸の中にじんわりと温かさが満ちていく。今は並んで座る距離も近付いて、時折交わす言葉は柔らかくて、自然と手を握り合っていて。それだけのことが、こんなに、嬉しい。

「友希那」

もう一度握り返す。友希那はなぁにと優しく返す。

期待も不安も焦りも流せたアタシだけど、残った一つは抱いたまま。

「……んー……なんでもない」

それでも、寄り添って笑っていられる今が、とても大切に思えて。恋を呑み込んで。とくとくと鳴る心臓を、あなたのと寄り添えて。電車は走っていく。想い出へ向けて。

＊＊＊

「えっ、旅行!?」

いつもの練習の帰り道。通っている大学に程近い、隣の部屋同士を借り合ったマンションに向けて歩く途中。友希那が告げた言葉はあんまりに突然すぎて、アタシは目を丸くして聞き返した。

「ええ。今度の連休なら、ちょうどお互い時間が作れるでしょう？」

紗夜もあこも元々用事があるし、燐子には事前に相談しているわ」

「えっ、……アタシ、相談された覚えないんだけど」

「スケジュールなら訊いたでしょう」

友希那はこっちに目を合わせないまま、まるで練習とかライブの予

定の確認みたいに淡々と返す。

「あ、空けといてって……てっきり練習か作曲かと思ってた」

「同じようなものよ。作曲、作詞のヒントを得たかったの」

「それで旅行……？」

納得なんていくはずもなくて、思わず唸ってしまう。旅行に行くほど作曲に行き詰まってる様子もないし、アタシも友希那もこの間互いの書いた詞を読み合ったばっかり。それに、相談もせずに決めてしまうなんて、……そもそも旅行するかを相談する前に、悩んでいることを打ち明けてくれると思うから。

友希那は眉を下げて、溜息と一緒に小さな声を零した。

「黙っていたのはごめんなさい。色々と準備が必要だったから。嫌なら、別に」

「い、嫌じゃないけど！　けどアタシだって色々準備あるし、それに旅行のプラン立てるなら、アタシに相談してくれたって……」

「それは、大丈夫よ」

そう言った友希那は一度、微かに息を呑んで、小さく唇を結んで。それから足を止めて、アタシを真っ直ぐに見た。

「プランなら……リサがもう、立てているから」

＊＊＊

ホテルのチェックインまではまだ時間があって、とりあえずお昼にしようと入ったのは、看板があの頃そっくりそのままな駅前の喫茶店。あのときもこうして入ったっけ。けど改装でもしたのか、中に入っても懐かしいって感じはあんまりなくて、やっぱりちゃんと時間が流れてるんだなぁって、嬉しいような、少しだけ切ないような。

「と、はい」

「ありがとう。……別に、砂糖くらい自分で入れるのに」

苦笑した友希那に首を振って、自分のカップに砂糖を少し。

「受け取ったついで。それに、お砂糖の数だってぱっちりでしょ？」

「……まぁ、そうね」

友希那が、口含んで頷くと同時に、胸の中に仄かに嬉しさが広がる。

怖がられてた頃の誤解も今ではすっかり晴れて、ほんとうの友希那を知る人は多くなった。けど、コーヒーに入れる砂糖の数とか、クッキーの味の好みとか、そういう一つ一つをちゃんとわかっているのは、きっと今でもアタシだけ、なんて。それがくすぐったいような、誇らしいような、そんな自分に少し呆れてしまうような。

「この後はどうする？　前来たときは結局チェックインまで喫茶店にいて、他見たりはしなかったよね」

「私は別にそれでいいけれど……リサにどこか行きたい場所があるなら、回っても構わないわ」

「そう？」

「ええ。曲作りのアイディアになるかもしれないし」

曲作り。友希那が告げた旅の目的。それがどこまで本当のことかアタシには判断が付かない。少なくともあのときは違っていた。そもそも誘ったのだってアタシからだったし。

別に行きたいところも決めてなかったけど、そう言われるとどこか回っておかないともったいないって気分になる。おすすめスポットを

検索しながら、アタシは何でもないように尋ねてみた。

「……そういえば、曲作りってそんなに困ってたっけ？　この間新しいのできたって言ってた気がするんだけど」

「そうだったかしら？」

「そうでしょ。っていうか、友希那が忘れるわけないでしょ」

とぼけたように首を傾げた友希那に口を尖らせて拗ねてみせれば、友希那はくすっと笑ってどうかしらねと零した。彼女の口から伸びる白いストローを、アイスコーヒーが昇っていく。甘くて苦くて、黒い。

「……でも、作曲のヒントを得たいというのは本当よ」

「今の友希那、信用できない」

「心外ね……」

大げさに溜息なんか吐いたりして、友希那はまだ言うつもりはないみたい。作曲のヒント。わざわざ旅行してまで、それも、あのとき訪れた場所に。

「……そのヒントは、どこで見つかるの？」

頼んでいたサラダとパスタが到着して、ドレッシングを被ったレタスにフォークをさくりと刺す。それを口に運ぶ前に尋ねる。友希那はパスタをくるくるとフォークに巻き付けるようにして、巻いて、巻いて、巻くだけ巻いて。それから、緩慢にそれを解いた。

「きっと、どこでもないわ」

フォークは先を迷っている。銀の切っ先にミートソースを、それが絡んだ赤いパスタを触れさせて、離してを繰り返している。やがて、一本きりを掴まえる。

「……想い出かしら」

呟くと友希那は、その赤い一本だけを口に運んだ。

＊＊＊

結局チェックインまでは喫茶店にいた。友希那はどこだっていいのになんて困った風に笑ったけど、移動続きで疲れてたし、パフェも気になってたし、話は緩やかで心地良くて、沈黙さえも愛おしくて。それにアタシだって、友希那の隣ならどこだってよかった。

「んーっ、やっと着いたね……」

記憶よりも少しだけ小さく感じる部屋。白を基調とした部屋は可愛くて明るくて、サイトで一目見て気に入ったのを覚えてる。本当は温泉付きの旅館を探してたんだけど、値段はもちろん、なんだか可愛い名前とオーシャンビューなんて安い文句に惹かれてここに決めて。同じホテルの同じ部屋を、友希那は取ってくれてたみたいだった。

窓越しの景色はあの頃と少し違ってるみたいで、からからと窓を開けてみると、白いカーテンを柔らかな潮風が揺らす。思わず伸びをして振り返ると、細めた懐かしむみたいな目にぶつかる。

セミダブルのベッドの傍らへアタシのと一緒にキャリーを並べて、友希那はぽすんとベッドに座った。

「懐かしいわね。ちゃんと見ていなかったはずなのに、覚えてるわ」

「……この景色？」

「ええ」

友希那の隣に腰掛ける。午後の日差しが部屋の外に靡いてるから、部屋の電気は点けないまま。まだ夏の色が残った青が、遠く向こうで

波を打っている。

「リサが何と言ったのかも覚えているわ。海を見に行こうと誘ってくれたわね」

「はは、そーだったね……断られちゃったけど」

細かくは覚えてないけど。想像よりもこぢんまりしたホテルに少し拍子抜けして、部屋に上がってその小さな落胆がひっくり返って。窓の外の景色に心が浮き立って、一緒に行こうって誘って。友希那は、やっぱり頷いてくれなくて。

「……リサ」

「ん」

手が握られてドキリと心臓が跳ねる。きっと上擦るだろう声を隠すために、海を見たままそれだけ返す。友希那の瞳がこっちを向く。合わせると、窓から入る優しい光がきらきらと瞳に踊っていた。

「海にでも、どうかしら？」

「……うん」

とくとくと心臓が鳴ってる。頷いて手を引かれる。あの日のアタシたちとは違う想い出を刻んでいく。

部屋を出際にふと振り返ると、憧れるように海を見つめるあの日のアタシが、見えた気がした。

＋＋＋

海、見たかったな。

ちくりと胸は痛む。けどそんな様子を見せるのは何だか怖くて、窓にへたりと貼り付きそうになる視線を頑張って剥がして、友希那に元気な笑顔を見せる。

「ごめん、移動で疲れちゃってたよね。それならもうお風呂にでも入る？　アタシ待ってるから、友希那先入っても――」

「……ごめんなさい」

言い切る前に、友希那はぽつりとそう呟いて、俯いて。電気は点けないままの部屋は薄暗くて、海風のせいか、何だか少し肌寒い。

「旅行、誘ってくれて、嬉しいけど。……確認したい、譜があるの」

「あ……ううん、いいよ全然！　ごめんね、アタシまた……」

ぎゅう、とお腹の辺りが縮こまるような感覚。喉が絞られるような、からからに乾くような。固まったままのアタシの隣で友希那が突然立ち上がって、びくりと肩が跳ねる。はちん、と軽い音と一緒に部屋が明るくなる。

「先に入っていて。私は曲を見てるから」

「ん、……うん」

鞄から取り出される楽譜。びっしりと引かれた線、細かい書き込み。友希那のお父さんの曲とか、FUTURE WORLD FES. に出場した経験を持つバンドの曲とか、このジャンルの最前線の曲とか、友希那は前にも増して、たくさん、たくさん学ぶようになった。お父さんのこともあって、自宅よりもアタシの前でとか、学校とかで。

楽譜を追って曲を聴いて、細かく書き込んでは時折苦しそうに表情を歪める。そんな友希那を見る度に、アタシの心はざわざわと騒ぐ。

「……何か、アタシに手伝えそうなことあったらさ。遠慮なく言って」

「……ありがとう。……けど、大丈夫よ」

そうやって、苦しそうに答える声も。

アタシの心配や気遣いが、友希那の邪魔になってるんじゃないかって時々感じる。友希那が泣いたあの日から、笑わなくなったあの日から、アタシは友希那がまた笑えるようにって願ってきたけど。

「……先、入っちゃうね」

「……」

楽譜に俯く友希那に声を掛ける。返事はないままバスルームに移る。この小さな旅行が、友希那の気を紛らわせられればって、たまには歌うことも忘れてって、そう思ってたつもりだったけど。熱いシャワーに色んな理由が流されていく。淡い色がいくつも溶けていって、胸の奥に隠した熱い熱い小さな本音が、ずきずきと胸を苛んだ。友希那のためなんて嘯いて、こんな気持ちが混じってるから、きっと邪魔にしかなれないんだ。胸が詰まる。熱い水が目の端から頬へ伝っていく。

告げられない恋心を、熱を、小さく吐き出す。何だか酸っぱい味がして、アタシはゆっくり目を閉じた。

＊＊＊

夏が去ったビーチは、静かに波を寄せては返す。白い砂の上に腰を下ろして、隣り合ってそれを見つめる。ただ静かな時間が流れていく。辺りは段々橙色に、水平線の向こうは群青に染まっていて、背に受けた陽が沈めばきっと真っ暗になるんだろう。今夜はお月様、昇るのかな。そう思って調べてみたら、満月まではまだ少し早かった。

アタシも随分欲張りだ。こうして過ごせてる今だって、あの日のアタシにしてみれば夢みたいな一時。それなのに、今日が満月じゃないのが、ほんの少しだけ残念に思える。もしもこの白い海岸に、白くて真ん丸な月が昇ったら、そんな景色を友希那と見れたら。

「また来ればいいじゃない。花火大会とか、月とか。来年でもその先でも、いつでもいいのよ」

「……友希那がそんなこと言うの、ずるくない？」

花火大会も終わってて、海に入れる時期も過ぎてて。タイミングの悪さを知る度にまた来よって取り繕ったアタシに、あの日は一度も頷いてくれなかったのに。ダメダメな涙腺はあっという間に潤んじゃうから見られたくなくて顔を逸らすのに、ぎゅっと手が握られる。

「リサにずるい、なんて言われたくないわ。不器用な私が何度突き放しても、何度も何度も支えてくれて、隣にいてくれて。普通にしていたら半分も返せないもの。とことん、ずるくいかせてもらうわよ」

「そーいうのも！　もー……」

握られた手と言葉の温かさが、じんわりと胸に沁みていく。ただ無邪気に傍にいた毎日も、寄り添うことしかできなかった日々も、友希那と向き合うと決めた日も、隣り合うだけじゃない、アタシにできることを探したときも。友希那の傍にいたかったのはずっとアタシの方で、だから今までを友希那と過ごせたことも、繋がれた手の熱さも、この幸せな時間も、きっと夢だってくらいの奇跡なのに。

「リサ」

手が引かれる。つられて頬を拭う間もなくそっちを見る、と。

「……あ」

少し欠けた不格好な月が、海の端っこに浮かんでいた。砂浜の遠く

向こうの、触れそうなほど近く。昼の銀と夜の金がぼんやり重なった、淡くて不思議な色。

「満月も良いかもしれないけれど。こういうのも、悪くないでしょう」

振り返った友希那の手が伸びて、頬から一つ、雫をさらっていった。

「うん。……すっごく、綺麗」

握った手から体温が伝わる。友希那と月を目に焼き付ける。もしもの満月よりもきっと、こうしていられる今がずっと。

少しだけ欠けた月はまるで猫の目みたいで、そう言ったら満月よりもこっちが好きになったわなんて冗談混じりに返されて。夕食の時間が近いからってホテルに戻る間も、角を曲がって建物に隠れてしまうまで、月を追っていた。

坂を上りながら空を見上げる。雲の少ない晴れ空は紫に染まっていて、一つ、二つ、星を探していく。あの日はお風呂から出た後も、真剣に楽譜を見続ける友希那に声を掛けるわけにもいかなくて、何だか居たたまれなくなって。一人でその辺を散歩して、海辺に行ける気分じゃなかったから、宿泊施設ばっかりで何もない道をぼうっと歩いて。やがて肌寒くなった頃、同じように空を見上げた、星が見えたかどうかは、覚えてない。

「今夜は晴れそうね」

「うん」

きっと星空は綺麗だろう。灯りが少ないから、たくさんの星が掻き消されずにさざめいて。夜は冷えて、寒いねって言い合いながら満天の星を眺めて。手の平から伝わる鼓動で、心もぽかぽかと幸せで。

「……満月もだけど、星も！　いつか、見に来なくちゃね」

「……ええ。そうね」

描いたもしもの光景から、友希那へと視線を移す。これからがある。今日じゃなくても、またいつか。

夕飯は記憶よりずっと美味しかった。あの時は楽しい食卓なんてとても言えなかったし、一応のリピーターってことでサービスしてくれたのもあるのかな。オレンジのライトに照らされた共用のダイニングには、幸せそうな他の宿泊客の人たちの会話も流れている。耳に残った波音が心を穏やかにして、窓の向こうは月が淡く照らしていて。波間に月明かりを揺らす海は、幻想的。

鼻の奥に柑橘系の爽やかな香りが広がる。ミックスソースの掛かったマリネは味も舌触りも絶品で、レシピが訊きたくなるくらい。スプーンを湯気で曇らせるじっくりと焼かれた熱々のドリアも、シンプルなイタリアンドレッシングだけがかかった温野菜も、どれもほっぺが落ちるくらい。

「写真は撮らないの？」

からかうように尋ねられて、笑いながら首を振る。何とか映えってやつをアタシもギャルの端くれとしてばっちり始めたりなんてして、これが結構ハマってる。アプリで簡単にそれっぽく見せられるお手軽さに、やってみると案外奥が深いってことか。どう撮ると美味しそうに見えるかとか、どんな背景に合わせるかとか、結構こり出しては普段からちょっとしたものでも撮るようになり始めたから、食事の度にからかわれるようになって、それをひまりと愚痴り合ったり。

「いーの。もちろん、さっきの海もばっちり撮ったし、明日も大事なとこはちゃんとアルバムに入れて、想い出にするけどさ」

チーズケーキにフォークを入れる。しっとりと柔らかい手応え。口に入れると溶けるような甘さに控え目な香りが広がって、オレンジでも混ざっているのか、少しの爽やかさがそれをさらってく。美味しい。

「……何て言うか、思ってたよりも覚えてるし。また来れるでしょ？」

カップを手に取って、一口。カモミールのすっきりした味がふわりと温かく広がる。瞼を落として、ほっと息を吐く。

「だから。今日は、ばっちり目で見てたいなって」

「今は？」

言いながらも目を閉じてるアタシに、友希那のくすぐるような問いかけ。

「今は、ハーブティーの余韻をお楽しみ中♪」

ちゅう、の声に合わせてぱしゃりと響く電子音。

「――なら、余韻を楽しむリサをアルバムに入れておきましょう」

「……ゆーきーなー？」

やられた。目を開けると友希那がそれは楽しそうに笑っているから、膨れているのも続かなくて、あっという間に頬は緩む。友希那が写真撮るなんて珍しい。目を閉じてたとこだからちょっと恥ずかしいけど、好きな人に撮ってもらえるのは、やっぱり嬉しい。

友希那は幸せそうに微笑んだまま、ふ、と窓の外へ目を向ける。何でもないように唇が開いて、囁くように。

「ねえ、リサ」

「なに？」

「月。綺麗ね」

鼓動が跳ねた。

頬は緩んだまま、友希那は吸い込まれるように夜の空を見つめる。アタシは友希那の横顔に吸い込まれたまま、何も返せずに固まる。店内の音が遠ざかる。聞こえないか心配になるくらいの拍動だけが、耳元でどくどくとうるさく鳴っている。永遠のような刹那。

す、と友希那の視線がアタシへと映る。月の光とオレンジのライトが映り込んで溶け合った瞳は、不思議な色をしている。何かを尋ねるような、訴えるような、紡ぐような。友希那の唇がまた、囁くように。

「……明日は色々回るから、今日は早く寝るわよ」

「……あ、……うん。オッケー」

開いた唇から流れた音はいつも通りで、からからの喉で、どうにかそれきりを返す。唸る動悸に、瞬く度に蘇る、赤い頬、横顔。

友希那はカップで口元を隠して、目を逸らしてる。その頬が少し赤い気がして、も一度とくんと跳ねた胸に、アタシは小さな溜息を吐いて、同じように、カップで口元を隠した。

＋＋＋

「あ、……あのさ」

緊張を呑み込んで声を掛ける。断られたらどうしようって怯えながら。何枚も広げた楽譜から顔を上げて、友希那は目を合わせてくれた。それに勇気付けられて、アタシは言葉を続ける。

「明日、色々回るつもりで、朝もそんなに遅くなくてさ。その……、今日は早めに寝た方が、いいかも……なんだけど」

「……」

友希那は楽譜に目を落として、しばらく黙っていた。断られたら諦めようって思ってた。ここまでついてきてくれただけでも十分、だからいいんだって。けどやがて、友希那は楽譜を片付け始めた。

シャワーの音を聴きながら、明日の行く先を確認する。一つきりのベッドに腰掛けていると、何だかドキドキする。値段と、昔から互いの部屋で泊まり合ってたってことから、取ったのはセミダブルの部屋。けどこうして、知らない土地の知らない部屋のベッドだと実感すると、どうしてか。

「……明日は、どこに行くの？」

湯上がりの友希那は何だか艶っぽくて、余計に心臓が跳ねる。

「――あ、えっとね。最初はバスでバラ園に行くつもり。そろそろ秋バラが見頃だって園のブログに書いてたから、十分見応えあると思う。そしたら電車に乗り換えて、海沿いのカフェでお昼かな」

ドライヤーで髪を乾かす友希那を見ながら、さっき確認したばかりの日程を告げていく。思ったよりもそれぞれの場所が離れてて、移動に時間を取られてしまうから、ついでで回れるところも幾つか交えて。

「で、そこでまた電車を降りたら……」

「……降りたら？」

「明日のお楽しみ☆」

「……」

かち、とドライヤーの切られる音。そのままぱちんとライトが消される。残った淡い橙はベッド横の間接照明で、ぼうっと友希那を照らし出している。

ごそごそと、空けていた隣に友希那が潜り込んでくる。間接照明が絞られて、部屋が暗くなる。

しばらくの沈黙。鼓動は早いまま、目は閉じれないまま。

「……また、ライブ演るって？」

寝息は聞こえないから、きっとまだ寝ていない。目も段々慣れてきて、月明かりがカーテンをぼんやりと浮かび上がらせる。顔を少し傾けると、見慣れたシルエットが布団を被っている。

「アタシ、見に行くね。今日見てたのってライブでやる曲？」

「……部活があるでしょう」

小さな溜息と一緒に、返事。

「あぁ、ダンス部？　今は発表会も近くないから、一日くらい休んでもだいじょーぶ。場所はいつものとこ？」

「……違う場所よ」

少しの間の後、影がもぞもぞと動く。付け足される。

「前のライブを見てた人に、うちでもライブをしてほしいって呼ばれたの。遠いし、無理にくる必要は無いわ」

「……えっ、呼ばれたって、ライブハウスの人に？　それって結構すごくない!?」

お父さんのことがあってから、友希那はライブハウスや練習スタジオに通うようになった。幼い頃から感じていた友希那の才能は本物で、初ライブからファンを勝ち取って。それから知名度も人気もどんどん伸びていって、アタシはそれを複雑な気持ちで見守っていた。このままライブを続けて、友希那はどうするつもりだろう。目指すところはもちろん知っている。けど、フェスに出るためには最低でも三人以上、アタシたちのジャンルでやるなら、もっと人数が必要で。

「リサ」

ぼんやりと予感は浮かんでいた。あの日友希那が歯を食いしばって、涙を拭って誓った日から。だってそこが目標なら、自然と当たる壁だろうから。いつかはそこに、辿り着いただろうから。

アタシはきっと、無意識にそれを怖がっていた。

「……バンドメンバーを、探すことにしたわ。フェスに出るための」

「……」

「わざわざ他のライブハウスに行くのも、誰か良い人材を探すためよ。見かけたら、声を掛けてみようと思う」

「……んー　そっか。……バンド、組むんだ」

口の中が乾いていく。上手い返しが思い付かなくて、アタシはそれだけを呟く。友希那が、バンドを組む。いつかは来るって知ってたはずだった。きっと目を背けてた。逃げ出すように辞めたベースが、あの日々が頭を過ぎって、アタシは目を瞑った。拙くても、時間を掛けながらも友希那のお父さんの曲を覚えて、皆でセッションをした日々。

「リサは」

ごそごそと音がして目を開けると、友希那の影がこちらを向いた。微かな月明かりを瞳が反射して、暗闇の中で目が合った。

「……リサは」

友希那はもう一度続けようとして、言葉を迷わせる。アタシも何か言おうと口が開いて、理性と記憶が歯止めする。指先が弦に触れる感覚が微かに蘇る。

友希那はごそ、と視線を天井に逸らした。

「……ネイルと部活で、忙しいでしょう。ライブに無理に来る必要は無いわ」

じわじわと焦りに似た感覚が渦巻き始める。きっとこのままじゃダメだって思っても、アタシにはどうしようもない。本当に？　覚えたいくつものスコアが眼裏に浮かぶ。本当に、どうしようもないの？　指先の記憶が、何度も引いたフレーズがざわざわと心を責め立てる。バンドを組んだ友希那の隣には、誰が立っているだろう。ベースを弾いているのは、誰だろう。

「アタシは、……」

唾を呑み込む。何か言おうとした時、友希那が寝返りを打った。

「……今日は、早く寝るんでしょう」

柔らかい拒絶。小さな声にベースの音が掻き消されて、部屋にはまた沈黙が戻った。

「……うん」

アタシはそれ以上何も言えないまま。指先の感覚は残ったままで、友希那の隣に立つ見えない影を闇に浮かべたまま、いつ寝たのかも、覚えていない。

＊＊＊

ふ、と目覚ましより先に瞼が開く。まだ朝陽が昇る前なのか、部屋は薄暗くて、窓の外が少しだけ明るい。

懐かしい夢を見た。あの頃から何度か見た夢。友希那の隣に、アタシじゃない誰かが立っている夢。アタシよりもずっとベースが上手くて、ずっと友希那にお似合いで。友希那がバンドを組むことにしたと

告げた日に初めて見て、それからは友希那がライブをする度、気になる人材が見つかったと話を聴く度に。翌朝には決まって、涙の伝った頬を拭って、自己嫌悪して。

頬に触れてみる。と、そこは乾いていて、指先を濡らす雫もない。今までと違って、アタシは夢の中の影を冷静に見つめられていた。あれはアタシの生み出した幻想だ。友希那の手を取ったならと、そう願っていたアタシ自身の影。

中学に上がったアタシは、ネイルをしたいなんて建前でベースを辞めた。いつの日にか、リサの実力じゃフェスに出られない、と友希那に拒絶されてしまう前に。夢に出てきた影は、友希那の覚悟に向き合えなかったアタシが夢見たアタシ。

「……」

体を起こす。カーテンの外は少しずつ明るくなっていく。あの日よりも近い体温が身じろぎする。指先には弦に触れる感覚。あの時よりずっとしっかりして、馴染んでいる。

「……アタシ、ベース弾いてるよ。友希那の隣で、弾いてる」

あの日に見た朝焼けも、こんなに眩しかっただろうか。頬を伝う涙とか、見てしまった夢に衝撃を受けたことしか覚えていない。カーテンの向こうで昇った日差しに告げると、隣で友希那が小さく息を吐く。

「だから、大丈夫」

あの日も友希那より早く目が覚めた。アタシは少しだけ泣いていた。その背を押したくて、届かない囁きを零す。大丈夫、アタシはちゃんと、友希那の隣に立ててるよ。夢じゃない今日が、待ってるよ。

「……リサ？」

小さな声が掛かる。隣で身が起こされる。少しの沈黙の後、アタシの手が握られる。カーテンの隙間からちょうど光が差して、それが眩しくって、目を閉じる。拍子に零れた涙を、友希那の指がすくった。

「あの日も、泣いてたわね」

「……起きてたの？」

目を開けて尋ねる。友希那はどうかしらね、と小さく微笑んで、朝陽を見つめた。細めた目には、誰が映っているだろう。

「……ねぇ、友希那」

声は少しだけ掠れた。胸は静かにいっぱいで。

「なぁに、リサ」

優しい言葉に、言葉を零す。また雫が瞼を離れて頬を伝っていく。きっと朝陽に照らされて、きらきらと。

「……幸せ、だね」

＋＋＋

淡い青に染まった、くるりと巻いた蕾。膨らみかけのそれは開花のときを息を潜めて待っているようで、きっとあと数日もすれば、綻んだ優しい芳香と共に気高い姿を見せるだろう。隣には同じ品種の薔薇がすでに堂々と花をつけているけれど、私の瞳は、その蕾にじっと惹き込まれていた。

葉に紛れて密やかに頭を垂れる、しっとりと厚い花弁。花弁はそこまで大きくないから、咲いたそのときにも他の薔薇ほど迫力はないのかもしれない。けれど俯いた蕾のその姿に、痛いくらいの熱を感じた。

ふつふつと胸に過ぎり、喉を灼き、視界を霞ませるほどの。

そっと膝を折り、薔薇と目の高さを合わせる。貴方の咲く日に立ち会えないのは残念だけれど、きっと綺麗に咲いてと。心の中で語りかけ、立ち上がって振り向く。

「気に入った？」

「……そうね」

気に入ったというよりは、気が合ったというべきかもしれない。答えるだけで、リサは嬉しそうに目を細めると、よかった、と小さく零した。それにずきりと胸が痛む。彼女にかけてしまっている心配と負担。思い出すのは今朝の記憶。泣いていた彼女の姿。

「向こうの方とかに、他にも青い薔薇あるみたい。さっき園の人から聞いたんだけど、……見てみる？」

「別に、青にこだわらなくてもいいわ」

それは求めて縋るためのものではなく、根ざして葉をつけ、咲き誇るためのものだから。不器用に返してしまってから後悔するけれど、彼女は気にしていないように頷いて、優しく笑った。

「ん、おっけ。ゆっくり行こっか」

高い晴れ空の下、バラ園には芳香と芳香が緩やかに満ち、どこか時間が止まったような長閑さが流れている。色とりどりに咲く花々は似通っているようでどれも違っているけれど、ふとしたときにそれらは漠然とした背景に変わって、脳裏には譜面が浮かぶばかりになる。

連休という貴重な練習時間をこうして音楽以外のことへ浪費するのは無性に胸裏を騒がせる。息の抜き方、歌詞の解釈やメロディーの追い方、演奏との重ね方。次のライブでやる曲は今の自分に歌えるかというかという難易度の曲で、こうしている今さえ本当は、楽譜を調べ、曲を聞き込み、喉を震わせたいと思っている。思ってしまっている。

リサ以外の誘いだったら応えるはずもない。それ以外であるとするなら家族旅行くらいだけれど。けど、例えリサの誘いであれ、どうして私は頷いたのか。あの日、泣きそうな顔で旅行に誘ってきたリサに了承の返事をしてしまったことが、その私を甘えだと告げている狂おしいほどの焦燥が、どこか信じられず、苦しく、怖かった。行くと答えた自分も、それを悔やむ自分も。それは、無邪気で幼かった私と、惨めで歯を食いしばった私の、鏡写しの恐れ。幼馴染の温度に抱き留められてしまうことが怖く、それを拒絶してしまうのが、怖い。

「……これ、綺麗だね」

リサの声に指先を辿る。花の縁取りが赤く、中心に向かって橙に染まっている。リサが示した一輪は、彼女にそっくりな気がした。近付いてみると匂いは甘く穏やかで、控え目に花弁を重ねている。

「……色んな薔薇があるのね」

「だね。なんか、こういうのが薔薇、ってぼんやりイメージ持ってたけど、それってほんの一部だったんだ」

さっきの私のようにしゃがみ込んで、薔薇と目線を合わせるリサ。その横顔を眺めていると、今朝の泣き顔が再び重なる。それにつられて、海への誘いを断ったときの、旅行に誘ってきたときの表情が思い浮かぶ。どうして泣くほど苦しむのだろう。悲しんで、寂しがるのだろう。それなのにどうして、貴方は何もないフリで、取り繕って笑うのだろう。

なんとなく。なんとなく、気付いている。思い上がりかもしれない、

恥知らずな勘違いかもしれない。けれど幼馴染としてもう十何年も一緒に過ごして、いくら鈍感な私でも、リサの気持ちくらいはわかるつもりで。

「友希那」

名前を呼んで、顔を上げて。彼女は静かに、微笑んで。

「……来てくれて、ありがとう」

返せる言葉は持っていない。焦燥はまだ急き立てて、長閑な時間はもどかしくて、彼女の傍の温もりに甘えてしまえば青い花弁は開かないだろうと、冷静な熱が告げている。

いつか、彼女に秘めた想いを伝えられたとして、私はそれに応えられない。そうとわかっていても離れられない、拒絶しきれない私自身の弱さが、情けなく、苦しかった。いつまでも優しく寄り添ってくれるあなたの温もりが、愛おしく、痛かった。

＊＊＊

「友希那？」

「……いえ」

赤に縁取られた橙。蕾に混じって咲いた一輪に何故か気を取られてぼうっと眺めていたけれど、リサに呼ばれて振り返る。

「今日は、あんまり咲いてないみたいだね」

「そういうときもあるでしょう」

園内はあのときと違って緑が目立つ。その分咲いている一輪一輪が目に留まりやすく、あのときより落ち着いて観賞できている気がする。理由はそれだけではないとしても。

「あ。友希那」

「……ええ」

見覚えのある淡い青。期待はしていなかった。けれど、いくつもの蕾の中に一輪だけ、確かに淡く咲き誇った花。

「……咲いたのね」

あのときの蕾は、私が去った数日後には綺麗な花を咲かせて、やがて萎れたのだろう。それでも自然と頬は綻んで、開いた花を心の中であのときの蕾に重ねて。目を閉じて、あの日の蕾へそっと語りかける。

「……綺麗ね」

ぽつり、と今度はリサに向けて零す。リサはうん、と囁いて、私の隣に膝を折った。二人の視線を受けて堂々と胸を張る花弁には、一粒の朝露が残っている。

「進んでいるのね。私たち」

「ん。そうだね。進んでる」

あの日からいくつも日は流れて、青薔薇は静かに咲き誇っている。もがき、苦しみ、Roseliaと出会い。ぶつかって、迷って、悔やんで、立ち止まって、振り返ってはまた前を向いて。あの日私が覚悟していたよりもずっと、色々なことがあったけど、私は確かに前に進んだ。父のこと、バンドのこと、歌のこと、音楽のこと。今も抱え続けて、前を向いている。

「また来るわ」

そして、これからのこと。まだ終わりではない。この先にも道は続き、何度でも、何度でも。より青い花弁を、より美しく咲かせていく。

去り際に振り返ったときも、青薔薇は凛と晴れ空を見据えていた。

園内を一通り回った後は、調香のワークショップを受けることにしていた。前に来た時はあるということだけ聞いて断ったけれど、あの日のリサが残念そうにしていたから。相も変わらず大げさなリサは想像の通りに目を潤ませて、私は滲む罪悪感を呑み混じりの溜息で吐き出して。だって、と溢す彼女に、芽生えた悪戯心で一言を付け足して。

「折角だし、お互いをイメージした香りを贈り合ってみない？」

からかい半分のその言葉を後悔するのは、実際に調香が始まってしまってからになる。調香といっても私たちはどの品種がどの香りかなんて知らないし、どう香りを混ぜれば良いのかもわからない。だからお店の人に作りたい香りのイメージを伝えてアドバイスを貰うしかなく、至極当然の帰結として、互いに抱いたイメージを互いに暴露するという羞恥に晒されることとなった。何より悪いのは花言葉で、一体誰が考えた制度なのか話のそこかしこに花言葉が出てきて、気にしないように努めてもお店の人がわざわざ教えてくれたり。

おかげで、ワークショップを終えて庭園に戻っても、しばらくの間気まずい沈黙が流れていた。頭の中には彼女が選んだ花言葉たちがいくつも巡っていて、その一つ一つが胸の内をくすぐってくる。ある程度予想のついていたもの、聴いた後でも意外に感じるもの、真意を問い質したくなるもの、そして言葉を換えた理由を勘繰ってしまうもの。

「……友希那。アタシ、すっごい恥ずかしかったんだけど」

「……仕方ないじゃない。相手に聴かれるというのを忘れていたのよ。わかっていたらこんなこと、言い出さなかったわ」

随分経ってから恨めしげに呟いたリサに、目を逸らしながら言葉を返す。リサはも！、友希那ってば、と力なく頬を膨らませて、それから赤い頬のまま、ショップで貰った袋から小瓶を取り出した。

「……はい。これ、友希那」

「あ、……りがとう」

少量のオイルが込められた、小さな硝子瓶。手に取ると一つ一つを決めていったときのリサの表情が思い出されて、思わず顔を逸らせる。きっと今の私は見せられない顔をしている。小さな声で頬を染めて、僅かに潤んだ目で、それでもはっきりと選んでいったリサ。頬の熱が一度上がったところで、くいと袖を引かれた。

「……あ、の、友希那。アタシのも」

「え、ええ。今渡すわ」

一拍息を吸って振り返る。頬の熱は引かないままだけど、リサも薔薇のように赤い頬をしていて、何だかおかしくなって。真っ赤な頬を見合わせて、くすくすと甘い笑いが零れて。

「……はい。私から見た、リサよ」

開き直って、真っ直ぐに目を見て手渡す。リサはほんの一瞬唇を引き結んで、ぎゅっと目を閉じて。それから一つ息を吸って、少しだけ潤んだ目を、嬉しそうに、嬉しそうに細めた。

「……ありがと、友希那」

「……」

心が温かくて、少し目を閉じる。じんわりと目元が熱くなり、堪えきれないから、小さく熱い吐息に換える。何度もリサに甘えてきたけど、何度も支えてもらって、必要無いお礼を言わせてしまったけど。まだまだ足りていないけど。これからもずっと向き合って、寄り添っ

て、手を取って、伝えていかないといけないけど、それでも。私が心から幸せなときに、心から幸せそうにあなたが笑うのが。

「……ね、友希那」

優しい、吐息のような囁き。目を開けると、リサは手の中の小瓶に目を落として、その瞳は見えない。

「友希那さ、……途中で、ベースのやつ変えたでしょ？」

「……リサもでしょう」

同じタイミングで、メインに据える香りを変えた私たち。変える前の花言葉が友愛で、友達に送るのにぴったりと聴いて。代わりに選んだものはそれぞれ別だけれど、どちらの花言葉も、お互いに聴いているわけで。

「……あの、……さ」

リサが唾を呑み込んで、小さく息を吐く。甘い吐息。通じ合った心。きっと言いたいことも、お互いの答えもわかっていて。リサは顔を上げて、私を真っ直ぐに見た。少し緊張しているけど、……あの日よりもずっと強く、希望に満ちた表情で。重なった影はいつかのリサで、二人が同時に、一つ息を吸って。

「友希――」

「リサ」

口を開こうとしたリサをそっと止めると、リサは驚いたように目を丸くする。その瞳があんまりに真ん丸だったから、私は思わずくすくすと笑いながら、小さく首を振ってみせた。

「まだ、回るところがあるでしょう」

想い出はまだ終わらない。重なる姿は今じゃない。リサはぱちくりと瞬きをすると、それから照れたように、嬉しそうに、目を細めた。

＋＋＋

「……にゃーんちゃん……」

おずおずと伸ばされた手が、猫の背に触れる。手はしばらく様子を窺うようにしているけど、猫はぶすっとした顔でそれを眺めるだけで、逃げたり、引っ掻いたりはしない。やがて、怖々と手が動き始めて、猫が小さく目を細める。

猫が気持ちよさそうに撫でられ始めると、友希那は詰めていた息をふ、と吐き出して。それから小さく、頬を緩めた。ただそれだけでじんと胸が熱くなってしまうから、アタシは猫と友希那を驚かしてしまわないよう、そっと目を閉じる。涙になって落ちちゃわないように。そうしたらにゃあ、と泣き声が聞こえて、目を開けると、一匹の猫が、甘えるように尻尾を絡めてきていて。

「……」

昔から友希那のために猫をあやしてきたから、仲良くなるのは得意。ちょっとだけ雫になっちゃった目元をそのままに、手を伸ばして優しく撫でて。そうしたら何匹も集ってきて、湿っぽくなってた胸の中が、くすりと笑みに塗り替えられて。

友希那の方を見ると、こっちもやっぱり猫に群がられていて、戸惑いながらも幸せそうで。少し、猫が羨ましくなっちゃったり。

今日のプランの最後の場所、明日のお楽しみと誤魔化したこの場所は、猫の歴史を辿れてグッズも展示されていて、極めつけに色んな種

類の猫とふれあえる部屋がある、なんて、まるで友希那のためにあるみたいな施設。回る場所を決めていたときに、ここには絶対に行かなきゃって心に決めて。取ったホテルからは遠くなっちゃったけど、友希那がこれだけ喜んでくれたら、やっぱり来たかいはあったと思う。

柔らかい表情を浮かべる友希那を見ると、そんなよかったって気持ちと一緒に、ちくちくと心を刺す感覚。少しずるをしてる気分。アタシだけじゃ笑顔にできないからって、猫を使ってなんて。それは罪悪感の裏側に嫉妬を貼り付けた、目を逸らしたくなるような黒い感情。

「……」

にゃー、と呼ばれて目を向ける。銀灰色の毛並みに、ゴールドに光る目。どこか幼いようでいて凛とした表情が友希那にそっくりで、くすぐってみると、素直に口を細めて喉を鳴らしちゃって。

「……かわいいやつめ」

アタシも猫は好き。好きだけど、友希那ってば好きすぎなんだもん。昔からずっとそうで、比べたって仕方ないってそんなのわかってるんだけど、猫にも友希那のお父さんにも歌にも、アタシは勝てなくて。誰よりずっと傍にいるつもりだけど、友希那の一番になれないままで。

今回だって、アタシは笑顔にさせられなかった。お父さんと歌のことで苦しんでいる友希那を笑顔にしたのは、やっぱり猫で。そんなことで落ち込んでいるアタシがちっぽけですごく嫌になって、胸の中で綺麗なフリした恋なんて自分勝手な感情が、醜くて、苦しくて。また笑ってほしいって、ただそれだけのはずなのに。そういうつもりじゃないのに。けど。やっぱり、羨ましいって。そう思ってしまう。

「……」

アタシは怖がりで臆病だ。友希那の大好きを誰より知っているから、アタシが『一番』の中に並べないのが、悔しくて、寂しい。友希那が、リサの作ったクッキーが『一番』美味しい、と言ってくれたときに、嬉しくて泣いてしまうくらいに。

一番を探してるつもりじゃないけど、友希那が大切だから支えたくて、傍にいたくて、この旅行もその一つだけど。……もやもやの黒いのを自覚すると、そういう全部もただの言い訳に思えてしまう。胸の真ん中の小さな気持ちが、ぐさぐさと心を刺してくる。

「……」

にゃー、と小さい声で泣かれる。アタシは何も返せないまま、ふるふると首を振って、ただ手探りで撫でる。ごめん、泣いてるの、見ないフリして。友希那に、気付かれたくないんだ。

猫はにゃーにゃーと鳴いている。友希那は後ろで静かなまま、きっと猫を撫でている。アタシは嗚咽を噛み殺して、気付かれないように、静かに、静かに泣いている。

＋＋＋

ホテルに向かう電車の中、これまでずっと気を張っていたからか、リサは力尽きたように眠っていた。その瞼は少し腫れぼったくて、電車の揺れに、空耳のような小さな嗚咽が重なる。あのときどうして泣いていたのかは、わからなかった。小さな声でお礼を言ったときも、リサは泣いてるような顔で、喜んでもらえてよかった、と笑った。

楽譜に沈み込もうとしても、浮かぶ譜面の間に今日の彼女が浮かん

で、気付いたらそればかり考えている。バラ園で滲んだ恥知らずな憶測が、彼女の涙に輪郭も曖昧な縁取りを作る。どうして泣いていたのか。理由はわからなくても、その水源の感情は知っている気がする。口の中に、嫌な唾が滲む。決して取れない手を、伸ばされる予感。

駅を下りてホテルに向かうまでの間も、夕食の間も、部屋に戻って交互にお風呂に入る間も。リサは泣いていた素振り一つ見せず、寂しさを匂わせもせず、気丈に振る舞っていた。

髪を乾かして、落ち着いてから楽譜を手に取っても、音符は目の上を滑るだけで、頭には少しも入ってこない。かちゃ、とバスルームの戸が開く音と一緒に、溜息を吐いて楽譜を片付けた。

「あれ、……今日は、いいの？」

「早めに寝て、明日の朝に見直すわ。今日は、頭に入ってこない」

「そ、……か。ごめんね、連れ回しちゃって」

ぽつり、と謝られる。まとめた楽譜に目を落としたまま、私は少し固まる。それから、リサを見た。

「……謝らないで。私のために、プランを立ててくれたんでしょう。楽しかったから、いいのよ」

「……うん」

リサはますます俯いて、眉を下げる。信じられていないのかもしれない。私も、全てが本当だとは言えない。それでも確かに、感謝はしている。

リサは下を向いたまま、小さな声で尋ねた。

「友希那、さ。……来て、よかったと思う？」

感謝は、しているけれど。

「……私は、あなたの誘いに答えたでしょう。練習できないこともわかってた」

「……」

「後悔はしていないわ」

言おうか言うまいか、迷ってから、それから小さく、溜息を吐く。きっと言わずに誤魔化したとして、悪い方に受け取られるだけだから。

「……心の底から楽しめたら、リサにそんな顔、させずに済んだとは思うけど」

「う……うん。そうだよね」

声は泣いている。ほた、と雫が落ちる。リサは乱暴にそれを拭って、それから、自嘲するように口元を歪めた。

「……アタシさ、……友希那のためにって、色々考えたつもりだったんだ。行くとことか、どうやって楽しませようとか。友希那が喜ぶような場所に行って、少しでも笑ってくれたら、とか。言い訳みたいに、自分に言い聞かせてた」

リサは俯いて、罪を告白するように、震える声を紡ぐ。

「……けどさ、っ……ほんとはそんなんじゃ、……なかったみたい」

ぎゅっと、唇を結んで。つうと頬を新しい涙が伝っていく。しばらく堪えてから、リサはふう、と息を吐いて。それから俯いていた顔を持ち上げて、涙に濡れた目で、リサは真っ直ぐに私を見た。

「ごめん、友希那。全部、全部さ、アタシの自分勝手だったの。友希那と一緒に回りたかったのも、笑ってほしかったのも、……来てよかったって、言ってほしかったのも」

「……」

「言えてないね、言ってない、気持ちがあるんだ。もーすっごい自分勝手で、自分ですっごく嫌になるくらいの。きっと友希那が聴いたら、アタシを嫌いになるくらいの」

何を言われるか直感する。リサはまた流れ始めた涙を拭って、息を整えた。

「――友希那」

リサの唇が動く。どくりと心臓が音を立てる。何かを諦めたような、それでも緊張した面持ちのリサが、小さく息を吸って。

「アタシ――」

――リサ」

びく、とリサの肩が跳ねる。私はまとめた楽譜を拾い上げて、キャリーケースの方にしゃがみ込む。

「……ごめんなさい。明日の朝は、今日できなかった分を取り戻したいから。そろそろ、寝るわ」

掠れそうになる喉を誤魔化すために、淡々と紡ぐ。楽譜を握った手の平に、じとりと汗が滲む。喉の奥に苦い味が広がる。

手を取る勇気も、振り払う勇気もなくて。自分勝手なのは私の方だ。楽譜をしまい終わってもすぐには動き出せずに、私はただ、リサの返事を待っていた。

「……うん。そうだよね」

リサの表情は見れなかった。泣いてるかどうかわからないその声を聴いて、そのまま布団に潜り込んで。やがて電気が消えるまでも、暗くなって、前日よりも遅い時間にようやく意識が沈み込んでも。嗚咽も泣き声も、聞こえないままだった。

＊＊＊

とくとくと心臓が打っている。カチャ、とバスルームの戸を開けて部屋に戻ると、まるであの日みたいに、部屋の小さなデスクに友希那が掛けていて。ちくりと胸を刺す痛みと、とくりと早まる鼓動。

ぱちんとバスルームの電気を消してから、友希那に向かい合う。緊張する息を呑み込んで、アタシはなんでもないように、言葉を掛ける。

「えっと。……今日は、……えー、練習とか、しないの？」

「……少し違う気がするわ」

あの時の台詞をなぞろうとしてみたアタシに、友希那はあっさりとそう返して、くすりと笑う。つられてアタシもくすくす笑って、なんだか気恥ずかしくて、むず痒くて、詰まってた息も緩まって。

「ねぇ、リサ」

ぽすんとベッドに腰を下ろすと、友希那もデスクから隣に移ってきて、自然な距離で手が重なり合う。甘い熱が伝わる。

「ちゃんと伝えるわ」

柔らかく握り込まれる。振り向けば、あのときよりもずっと近くに友希那の微笑みがあって。甘い熱が胸に昇る。友希那は口を開いて、鼓動を吐き出すように、言葉一つ一つを丁寧に、噛み締めるように。

「リサと、旅行に来れてよかった。私のために考えてくれた旅程が、すごく嬉しかった。一緒に回ってる間も、手を繋いで、顔を見合わせて笑い合う間も、何でもない話をしたり、どこにも行かずにカフェで過ごした間も、一緒に見た海も、リサの写真を撮ったのも。この旅行

の間、ずっと、心の底から楽しかったわ」

何枚も目に焼き付けた想い出が浮かぶ。あの日とは違う、今の想い出。幸せな熱を伴った、鮮やかでいっぱいな一瞬たち。眩しくて泣いてしまいそうなくらいで、滲んだ視界はスクリーンみたく、想い出を綺麗に映して。

「あの日に誘ってくれて、それからもずっと寄り添い続けてくれて、私をここまで連れてきてくれて。本当に、ありがとう」

「……」

「私はリサの、そういう顔が見たかったの」

あの日の分まで。あの日から、今日の分まで。熱い熱い雫がいくつも落ちていって、おかしくって、やっぱり夢みたいに幸せで、アタシは頬を膨らませてみせる。

「結局アタシ、泣いてるんですけど」

「泣いている顔は見たくないけど、幸せな顔は見たいのよ。それに、リサが幸せで泣くのなんて、いつものことでしょう」

からかうような調子の友希那の頬にも、涙なんて伝っているから。

「れ、友希那」

肩を預ける。繋いだ手をぎゅっと握って。緊張に震える心臓に、少し息を吸い直して。あの日震えたアタシの声を、言葉を。なぞっていく。やり直していく。

「ごめん、友希那。全部ね、アタシの自分勝手だったの。友希那と一緒に回りたかったのも、笑ってほしかったのも、来てよかったって、言ってほしかったのも」

「……」

繋いだ手が握り返される。指が絡む。優しい沈黙が続きを促す。

「言えてない、言ってない、気持ちがあるんだ。も――……、ほんとね、すっごい自分勝手で、自分ですっごく嫌になるくらい。きっと友希那が聴いたら、アタシを嫌いになるって、くらいの」

そこまで言ってから、息を整える。心臓はこの期に及んでどくどくとうるさく鳴っていて、やっぱり竦んで、怯えて、言葉は喉につっかえそうで。それでもちゃんと伝えるために、唇を開ける。息を吸って、熱の籠もった喉に少しひんやりした空気を通す。とくとくと熱い心臓を少し冷ます。それで鼓動は早いままで、息は浅いままで。

あの日のアタシが重なる。自分勝手さに嫌になって、半分自棄みたいな気持ちで告げようとしたあのとき。きっと断られるとわかっていたのに、それでもあんなに怖かった。きっと受け入れられるとわかっているのに、それでも、こんなに怖いんだ。

「……友希那」

ごくりと唾を飲む音さえ、友希那に聞こえてるんじゃないかって思う。鼓動はうるさすぎて、自分の声すら掻き消してしまえそう。けど、怖くても、逃げ出したくても、伝えると決めた。あの日言えなかった言葉を。今日まで呑み込んでいた言葉を。アタシの中にぐるぐると渦巻く、小さい頃から抱えてきて、あの頃に胸の中で大きくなって、痛いほどにずきずきいって、あんなにドロドロとアタシを苦しめた想い。息を吸う度に甘く鳴って、息を吐く度に漏れ出そうになる、想いを。

しんと張った空気に、息をした。

「アタシ――」

「――リサ」

「……」

「……友希那」

「リサ、痛いわ」

ぎりぎりと手の甲をつねる。

ありえない。いや。ううん。ありえない、なんてもんじゃない。ここで遮るなんて絶対ダメ。絶対に、ダメ。もう凹んだ。立ち直れない。予想外すぎたのに、あの頃と全く同じに遮られて、秒針が動く度に胸が痛む。痛い。アタシもうちゃんと伝えられない。全部友希那のせい。

「待っ、違うのリサ、いたっ、ちょっと」

「ごめん、友希那。アタシ怒ってる」

「っ、ちょ、いたっ、爪、っ……リサ！」

ばっと手が離されて、友希那がアタシの隣から立ち上がる。膨れた顔で手の甲を押さえる彼女からふいと頬を逸らす。痛いって、痛いのはアタシの心なんですけど。友希那ははぁ、とこれ見よがしに溜息を吐いて見せたりして、反省してる様子もない。

「……リサ。聴いて、私からも言いたいことがあるのよ」

「聴かない」

「……リサ」

「アタシの言葉、聴いてくれなかった」

ずきずきと痛い。子供みたいだって思うけど。目元もお腹も熱くて、我慢できそうにない。

わかってる。きっと言わなくても伝わってるって。昨日と今日でお互い散々匂わせてたし、何を今更ってことなのかもしれない。けど、あのときに言えなかったことだから、ずっと秘めていたことだから、呑み込んで隠して取り繕って、伝えたいって叫ぶ声を無視してたことだから。

「聴かない。聴いてくれないなら、聴かない」

ホント。子供みたいだって思う。

「……違うの。……リサ、ごめんなさい」

アタシとしては、最近はそう簡単に泣かなくなってたつもりだったのに。それなのにこうも簡単に涙が出てきて。友希那はアタシの手を握って、苦しそうな声を出す。

「大事なことは、一緒に言いたかったから。その前に、伝えないといけないことがあったの」

「……」

「私、今まであなたに甘えすぎていたと思う。ずっと傍にいたから、言葉にしないまま伝わってる気になっていた。寄り添ってくれていたのは、リサだったのに。あなたがいないとダメなのは、私の方なのに」

アタシの手を包む友希那の両手に、優しく力が籠もる。友希那はいつもそう言う。アタシにもらってばかりだと、何も返せていないと。アタシがもらっているものも、アタシの自分勝手さも知らないのに。けどアタシがそう言うと、友希那はアタシこそわかっていないと言う。いつもお互いに譲らなくて、平行線で。

「そんな私を、変えたいと思った。あなたと並んで歩くために。リサが傍にいても、負い目を感じないように。伝えたいことは言葉にして、してあげたいことをする。……今回の旅行は、その一歩目よ」

「……一歩目で、踏みだしすぎ。旅行とか全っ然、一歩じゃない。並んでとか言ってまたアタシもらいすぎだし、そもそもアタシの方が

もらってるし、幸せすぎて死にそうだし」
尖った涙塗れの声で拗ねてみせると、友希那の手が頬に移って、また涙を拭っていく。
「私を旅行に連れ出したのは、リサでしょう」
「……」
「ねえ、リサ」
抱き寄せられる。額を当てられる。真剣な、苦しそうな声。
「遮ったりして本当にごめんなさい。今日だけじゃなくて、あの日も」
「……」
「ずっと、聴く勇気がなかったの。何となく予感はしていた。嫌ではなかった。けど、きっとあの日の私には応えられなかった。あなたがずっと寄り添ってくれて、私も同じ気持ちだと気付いてからも。いつもあなたにもらってばかりだったから、聴く資格は無いと思っていた」
告げようとした気持ちから目を逸らされた痛みが、その記憶がずきずきと蘇る。包んでくれる温かさが、弱さの告白が、それを淡い傷跡に変えていく。
「勇気を振り絞ったわ。資格だって、これから手に入れていく。こんなに弱くて、不器用で、泣かせてしまう私でごめんなさい。それでも、あなたの言葉を聴きたいの。約束する。もう二度と遮らない。一言も逃さないわ。今度は、最後まで聴くから」
そっと、友希那が離れる。アタシは瞬きをして、涙を落とす。
「だから、どうか、聴かせて」
息を吐く。落とした涙はすぐに溢れて、また頬を伝っていく。胸の中の気持ちみたいに、熱い熱い雫。

「言いたい、こと。あるの」
声はやっぱり、震えていた。
「友希那に、ずっと……言いたいのに、言えなくて。怖くて、……っ言ったら、嫌われるんじゃないかって、けど、……呑み込んだら、……くるしくて、……いた、くて」
ほら。友希那が遮るから。もうちゃんと言葉にできないのに、泣きながらで言葉にならないのに、友希那はそれでも優しく待っていて。嗚咽が収まってから。そっと息を整えて、涙を拭いて。友希那の目を、まっすぐに見つめて。
「……友希那」
「……ええ」
「アタシ。アタシね。友希那のこと、……友達でも、親友でも、幼馴染でも、バンドメンバーでも、家族でも、なくて。ずっと一緒にいて、今更何言うのって思うかもだけど」
震える息を整える。少し目を瞑って、また滲みかけた涙を堪える。ちゃんと見たい。焼き付けたい。この想い出を。優しく、泣きそうに幸せに微笑んでいる、友希那を。
「――アタシ。友希那のこと。……恋人にしたいって意味で。ずっと、……誰より一番近くで、一番長く。一生、うううん、できれば一生よりももっと、その先でもずっと、一緒にいたいって、そういう意味でね」
あぁ。拭いたのに。友希那もアタシも、頬の上を雫が流れていく。透明な雫はオレンジに照らされて、きっときらきらと綺麗なんだろう。それでもわかる。この滲んだ景色も、震えた声も、熱いくらいの幸せも。永遠に、忘れない。

「好きなんだ。友希那のこと。世界で一番」
視界は滲んでいっぱいでまたぼやけそうになるから、もう我慢もせずに流してしまって。世界で一番好きな人を、いっぱいに見つめて。友希那は綺麗に涙を流したまま、それは綺麗に、幸せに笑った。
「ありがとう、リサ。伝えられないくらい、……幸せよ」
「……」
ううん、友希那。伝わってるよ。すっごく、たくさんの幸せ。きっと、アタシと友希那の心の中に、同じだけの幸せが溢れてて
友希那は涙を拭わないまま、息を吸う。それが緊張で少し震えて、照れ隠しみたいにくすりと笑う。
「……リサ。私からも、伝えさせて」
「……うん」
「先に言うわ。大好きよ。きっとリサに負けないくらい、世界で一番、リサのことが好き」
「……待って。……準備、してなかった」
抑えられない。いきなりとかずるい。言葉で聴くと幸せすぎて、アタシの言葉に応えてくれたことが奇跡よりも夢のようで、息ができない。大好きな友希那が見えない。友希那はちゃんと待ってくれて、アタシは拭いても拭いても出てくる涙が悔しくて、嬉しくて。目元に優しく指が添えられる。また涙が攫われて、友希那の優しく濡れた頬が、柔らかに微笑んでいる。
「最初は、近すぎて気が付かなかったわ。いつでも隣にいて、ずっと寄り添っていてくれて。一緒に育って、一緒に笑って、どんな想い出にもリサがいて。幼馴染だから大事なんだと、家族みたいな存在だと、ずっとそう思ってた」
「……うん」
「けど、……違ったわ」
友希那は優しくアタシの手を取って、アタシは導かれるままに、立ち上がって。
「いつでも誰より傍にいて、隣り合っていたから。恋に気付く前に、愛に変わっていたのね。今までもらってばかりだったから、隣に寄り添ってくれるのが苦しかったけど、さっきも言った通り、これからも傍にいたいから、資格が無いなら手に入れるわ」
息が触れ合うほどの距離で向き合う。互いの鼓動が重なる。
「ねえ、リサ。私に描ける未来は、あなたと隣り合ってる日々だけよ。私が取りたいと思うのはあなたの手で、私が歩きたいのはあなたの隣。これからもきっと不器用で、言葉足らずで、傷付けるかもしれない。それでもね」
両の手を優しく包まれる。友希那が、誓うように、そっと告げる。
「永遠を懸けて寄り添うわ。だから、永遠に傍にいて」
アタシはただ、精一杯に、一つだけ。
「……はい」
そっと触れた唇も、きっと、永遠に。

＊＊＊

窓の外を、青が流れていく。波のさざめきと、雲は少しの晴れ空と。秋の足音が硝子の外を舞って、きらきらと光る波間が少し色褪せて。

想い出から今へ。住み慣れた街へ帰っていく。

行きとは反対の電車は寂しさを伴って、実際よりも秋の到来を強く感じさせる。天気予報では来週また暑くなるってことらしいから、多分まだ少し夏が続く。

「あ」

窓の外を眺めていて、ふと思い出して声を上げる。握った手の先から訝るような視線を向けてくるから、アタシは思い出したそれを尋ね掛けた。

「そういえば、今回の旅行の目的だった、曲作りのヒントはどうなったの？」

目を真ん丸くしてぱちくりと瞬き。そんな露骨でいいのと思ったけど、友希那はくすりと笑って、あぁそのこと、と呟く。今絶対忘れてたでしょ。

「それなら、ちゃんと想い出から見つけてきたわ」

「……ホントに？」

「当たり前でしょう。そのために向かったんだから」

昨日、アタシと一緒に並んで歩くため、みたいなこと言ってたと思うんですけど。あ、ダメ。思い出すと目が潤んでくる。

「……何の曲の、どんなヒントか聴いていい？」

「別にいいけれど……わからない？」

「……アタシこそ、ヒント欲しいんだけど」

曲作りのヒントを探すため、としか聴いていない。特に予定されてる新曲もないし、この間互いの作詞を見せ合ったばかりだし、だから今のところノーヒントで、わからないっていうか当てようがないっていうか。どうせ用意された建前だと思っていたけど、こうもはっきり見つかったって言われると、一応それなりのものがあったのかなって思えてしまうし、やっぱり気になってしまうもので。

「ヒント……そうね。私たちのことよ」

「あ」

けど友希那がそう言った途端、ぱちりとはまるピースがあった。

「……わかった？」

「わかった気がする、……けど」

「そういうことよ。曲の幅を増やすことにも繋がるでしょう」

「……アタシ、そんなのライブでまともに弾ける自信ないんだけど。ってか友希那、仮にそうだったとしてもさ。この旅行で見つかったヒントってやつで作った曲、歌うつもりなの……？」

「いけない？」

「いけないっていうか……」

歌詞担当がアタシになったら全力で職務放棄しよう。いや、別にアタシは小説とか漫画からでもヒントはもらってるし、わざわざ今回の旅行を歌詞にする必要もないんだけど。

「そんなに心配することはないわよ。これから、……いくつもヒントを見つけて、実体験を歌うのの何倍も恥ずかしくて甘いことだって、二人で重ねていくんだから」

「……あー、……そうかも」

「でしょう？」

友希那の言動もすでに、何倍も恥ずかしくて甘くなってるから。けど、幸せだからいいかなってそんな気持ちにもなる。

「友希那」

「なぁに、リサ」

海辺に拭いたそよ風が、想い出の恋を未来に運んでいく。

「……好きだよ」

恥ずかしくても、甘くても、幸せなこれからがあるなら、あなたと歩いていけるなら。それだけで全部がとても愛おしく思えて。とくとくと鳴る心臓を、あなたのと寄り添えて。

電車は走っていく、これからへ向けて

Voice

北野　もーりす

アタシには、最近夜に眠るとよく見る夢がある。

それは、友希那との幼い頃の記憶。アタシと友希那の家から近くにある大きい公園の小高い丘で、春の気持ち良いそよ風に柔らかく揺れている、たくさんのタンポポやシロツメクサで綺麗に染まった中を、アタシと友希那は、無邪気にはしゃぎながら追いかけっこなんかしたりして駆け回ってる夢。

そうして追いかけっこにちょっと疲れたら、丘のてっぺん辺りにふたりで腰掛けて。

一緒にタンポポの花冠を作り、お互いに作った花冠をプレゼントし合いっこするんだ。アタシが友希那のさらさらとした銀髪のてっぺんへ花冠をのせたら、友希那がまるでその返事をするかのような様子で、『何か大事なこと』をアタシの手を握りながら伝えてくれる。

だけど、何故か夢の中ではその友希那の言葉だけ音が抜け落ちていて。友希那がなんて言っているのか、アタシには未だにわかんない。

夢の中でのアタシは、友希那のその言葉に何故か泣き出しちゃって、友希那が慌てながらアタシの頭を撫でてくれる。どうしてアタシは泣き出しちゃったんだろう？

もちろん、友希那の告げた言葉がわからないアタシ自身には、なんで幼い頃の自分が泣きじゃくっているのかわかんない。

だから、幼い友希那になんとか声をかけようと『幼い頃のアタシ達を見ている、身体を持たない夢の世界のアタシ』は必死に声をあげようとして――いつもそこでアタシの夢は覚めてしまう。

そうして、目が覚めた後はなにもかもがぼやけちゃって。また眠って、こうしてまた夢に出てくるまで『夢』のこと自体、思い出せないことが続いてた。

――だけど、今日の夢は何かが違った。

アタシはいつものように友希那になんとかして声を掛けようとした。

だけどそれはやっぱり音の出ない、伝わらない声で。だからこの声が届くはずなんて無いのに、初めて幼い友希那がまるでアタシの存在に気付いたかのように、こっちへ振り向いた

「――――」

せっかく夢の中の友希那が初めてアタシに気付いてくれたのに、友希那の声はまた音が抜け落ちてしまっていて、なんて言っているのか聞き取れない。

だけど、今までの夢の中で見たことないくらい、幼い友希那は苦しそうな顔をしていた

何か、すっごい嫌な予感がする。

足元がまるで泥沼に踏み込んだようにぐにゃりと歪む感覚。おかしいな、アタシの足下はちゃんとしっかりしてるはずなのに　ここは別に泥沼なんかじゃ無くて、普通の草むらなはずなんだけどな。

さっきまで青く澄んで晴れていたはずの空は、重苦しい色をした曇天に変わっていて。レモン色のタンポポや、真っ白なシロツメクサも

どんどん枯れていってしまう。

あんなに鮮やかで、まぶしいくらい綺麗だった世界が、まるで墨汁を垂らして薄灰色に塗りつぶしたように暗く荒んだ色になっていく。

胸を締め付けるような、正体の分からない強烈な不安に息が苦しくなって。アタシは無我夢中で友希那に手を伸ばそうと――。

「……っ！　はぁ……はぁ……」

その瞬間、目が覚めた。

伸ばした手は、何も掴めず天井へと向けられてた。その腕を力なく下ろして、ベッドに寝そべったまま視線だけ窓の向こうを見ると、空は夢の中と同じく重苦しい色をしていて。さあさあと雨が降り、雨滴が窓ガラスを下へ下へと泳いでる。もう十月でこんな雨の日ならむしろ少し寒いぐらいなはずなのに、先ほどまで見ていた悪夢のせいか、アタシはぐっしょりと寝汗をかいていて。部屋の中で寝てたのに、まるで雨に濡れたみたいに下着がじっとりと肌に貼りついて気持ち悪い。

夢の中で感じた、あの嫌な予感はなんだったんだろう……。

そうぼんやりと考え出した途端、アタシは理由は分からないけどすっごく友希那のことが心配になって、枕の横にうつぶせで放り投げられたスマホを弾けるように引っ掴んで画面を付けた。そうしたら嫌な予感は当たってしまって。

『リサ　助けて』

そう、ホーム画面に表示された友希那からの未読メッセージの通知に、心臓が止まりそうになった。

「ゆきなっ!!」

アタシは飛び出すようにベッドから抜け出して、雨が降ってるのもお構いなしにパジャマ姿のまま窓を開けてベランダを裸足で渡り、反対側の友希那の家、部屋へと移った

確認もせずに友希那の部屋の窓を引いたら、鍵を掛けてなかったみたいでそのまますんなりと開いて。

友希那の部屋はベッドが窓際にあるから、窓を開ければすぐ目の前にベッドが飛び込んでくるのだけれど、まさにそこにパジャマ姿の友希那はまるで何かに耐えてるみたいに丸くなっていた。

「友希那！　どうしたの!?」

アタシはほぼ叫ぶように近い声を上げながら、掛け布団も掛けずに怯えるように丸くなっている友希那の両肩を掴んだ。友希那はとってもひどい顔をしていて。まるで絶望のどん底に落っこちちゃったような、そんな表情をしていた。

アタシの姿を見た途端に友希那は、すっかりいつもの凛々しさを失ってしまった瞳から、ぽろぽろと滴が零れていくように涙を溢れさせちゃって。今まで見たことが無いくらい弱々しく震えながら、たどたどしく揺れる指先でスマホの画面にメッセージを打ち込んでアタシの方へと差し出してきた。

『声が　出ないの』

その言葉に、アタシは目の前が真っ暗になって、思わず倒れ込みそうになる。

友希那の声が出ない？

なんで？

昨日まではいつも通りだったし、何も変なことなんてなかったよ？

どうして、友希那の声が出ないの……？

ぐるぐるとぐるぐると、なぜ、どうしてが頭の中を巡って、なんでこんなひどい事が……って堂々巡りな思考の沼に沈み込みそうになったけれど、掴んだ友希那の両肩から感じる体温が高すぎることに、ふとアタシは気付いた。

たぶん、友希那自身は声が出ないことがショックすぎて気付いてないみたいだけれど、その額に手を当ててみたら、明らかに病気と分かるほどの熱が出ていた。

「友希那、熱出てるじゃん!?　急いで病院行こう！」

まだ涙を零し続けながら固まっちゃってる友希那を、片腕を支えつつベッドから立ち上がらせてあげて、身支度整えたら玄関で合流しようと声を掛ける。

時刻は七時半過ぎ。今日は平日で学校があるけれど、こんな友希那のことを放っておいて学校に行くなんて、できるわけない。

アタシは急いで自分の部屋にとんぼ返りして、タンスから引っ掴むように私服を引っ張り出して猛ダッシュで着替えながら、スマホで八時から開いてる病院を急いで検索した。

幸いにも、電車でひと駅先の総合病院が診察を八時から受付してくれるみたい。

打ちひしがれた表情をしながらも、ちゃんと玄関先で待っていてくれた友希那の手を引いて、ふたりで病院へ急いだ。

どうして友希那の声が出なくなっちゃったのか、アタシには見当が付かない。

だから、今はとにかく少しでも早く病院に連れて行かなきゃ。

手遅れになったりしないことを祈りながら、自然とアタシ達は早足から駆け足気味になっていって。

傘が揺れ服が濡れてしまうのもお構いなしに、肌寒い雨に包まれた道を駅へと急いだ。

◆◇◆

「これは風邪ですね。声が出ないのは、風邪によって喉がひどく腫れてしまったからです」

病院でお医者さんから告げられた診断結果は、なんともあっけないものだった。

え、ただの風邪なの？

友希那、声でなくなっちゃったのに？

あんまりに拍子抜けな診断に、友希那は全然納得してない様子で。その表情には「ほんとは風邪なんかじゃないのでは？」「もっと深刻な病気なんじゃないか？」って、そうした疑いの色がありありと出てた。

声が出ない友希那の代わりに、アタシは率直にお医者さんに質問してみた。

「アタシ、風邪で声が出なくなるなんて聞いたことないんですけど、そんなことってあるんですか？」

お医者さんの診断に、素人考えで質問するなんてめっちゃ失礼だけど、友希那のこととなればなりふり構ってられなかったから、アタシはストレートに聞いた。

そうしたらお医者さんはアタシ達の心配を察してくれたようで、落ち着いた声色で答えてくれた。

「確かに風邪でここまで声が出なくなることは珍しいです。今の湊さんは急性声帯炎と呼ばれるもので、急激に声帯が腫れてしまった状態なんです」

友希那の目をしっかり見て、少しでも安心するようにと、優しい表情でお医者さんは言葉を続けてくれる。

「声を出すのに必要な声帯が腫れてしまっているから、声が出せないんです。だから、無理に声を出そうとせずに薬をしっかり飲んで安静にするのが大事ですよ。そうすれば、大体一週間から二週間ぐらいで元通りに治りますから」

その言葉にアタシは安心して、ほっ……とため息がこぼれた。元通り治る、その言葉が聞けて本当に良かった。

そう安心しながら友希那の方を見たけれど、相変わらず友希那は深刻そうな表情をしたままだった。

「友希那、良かったね。元通り治るって。本当心配したよー」

ちょっと盛り気味に明るく振る舞いながら友希那に声を掛けてみたけれど、俯き気味な友希那の表情は変わらなかった。

やっぱり、声が出ないのが本当にショックなんだね。きっと、友希那は声を失うなんて初めての体験だから、今はまだ色々飲み込めないんだろう。

「先生、ありがとうございます」

友希那の代わりに、アタシはお医者さんにお礼を告げた。ひとまずは、お薬を貰って、週間は喉を使わないように過ごせば大丈夫な訳だし、友希那もしばらくすれば立ち直るだろうから。

「薬を飲んでも、しばらくは声がうまく出ないけど焦らないでね。それと、絶対に薬を飲み終わって喉が治るまで、大きな声を出したり、歌ったりしちゃだめだからね」

先生はちょっと語気を強めにして、友希那にそう注意してくれた。問診時に、念のため友希那がバンドのボーカルで喉をよく使ってることを書いたから、それを気にしてくれたみたい。

だけど、友希那はその言葉にうなずきも何も返さないで、ずっとうなだれたままだった。

そんな友希那の代わりに、アタシはお医者さんに返事をする。

「分かりました！　アタシがしっかり見張っておきます」

そう力強く頷きながら言うと、お医者さんは微笑みながら、「ふふ、頼もしいわね」って返してくれた。

そうして診察を終えて、たくさんの椅子が並んだ待合ホールでふたり並んで腰掛けながら、会計と処方箋の順番が回ってくるまで待つ。

友希那は喋れないんだから仕方ないんだけど、落ち込んだ様子を隠そうともしないで、暗い雰囲気を思いっきり漂わせてるから、ふたりで過ごすのはよくあることなのに、なんだかギクシャクとした気持ちになっちゃう。

「いやー、朝に喋れなくなった友希那を見た時はほんと、生きた心地しなかったけど。無事治るって分かって良かったね、友希那」

少しでもこの空気を和ませたくて、友希那にそう話しかけた。

だけど、相変わらず友希那はこっちに顔すら向けてくれなくて、俯いたせいで銀髪にカーテンを掛けられたように隠されてしまったそ

の表情は、どんな顔をしているのかうまく見えない。

いやはや、こりゃ重症だなぁ―

「あの女医さんにも言われたけど、無理に歌おうとしたりしちゃだめだからね、友希那」

軽口気味に注意して見たけれど、反応ナシ。うーん……寂しいなぁ。

端から見たら、人芝居みたいな事になってるアタシを他所に、受付の人が友希那の名前を呼んだ。

「湊さーん。湊友希那さーん」

そう呼ばれた本人は、のっそりと重苦しい様子で腰を上げて受付の方へ歩いて行く。

「ちょっ、ちょっと置いてかないでよ友希那―」

少しくらいアタシを待ってくれてもいいのに。まるでアタシの存在なんて無視するかのような友希那の態度に、アタシはちょっとムッとしてしまう。

しかも友希那は受付の人が読み上げる会計額に、ぞんざいな仕草で財布からお金を出した。うー……受付の人も気まずそう……

「ご、ごめんなさい。この子、風邪のせいで声が出なくて……」

思わずアタシの方から友希那の失礼な態度にお詫びを入れてしまった。

友希那はそんなアタシに目もくれずに処方箋を受け取ると、アタシへ一瞥もせずに薬の窓口の方へスタスタと歩き出してしまった。

「……っ」

流石のアタシでも、友希那のあんまりな態度に、まるでチリチリと焦げるようなイライラが沸いてきてしまう。

いくらなんでも、そういう態度はダメでしょう。

確かに、友希那にとって声を出せなくなるのがどうしようもなく不安で、その不安をうまく消化できないから八つ当たり気味になっちゃうのも分かるよ。アタシだって、もし自分が似たような……そう、例えば指が酷く腫れちゃってベースを引けなくなっちゃうようなことになったら、お医者さんにさらりと一週間で治ると言われたとしても、冷静ではいられないだろうなって思う。

だけど、だからってそれが周りに八つ当たりしていい理由になんかならない。

先を行く友希那に小走りで追い付きながら、これは帰り道にちょっとお説教が必要だなぁ、なんて。アタシは心の中で思ったんだ。

◆◇◆

病院からの帰り道、心なしか朝よりもアタシと友希那の間には、まるでアタシ達の心の距離を表してるみたいに、ほんのちょっと広がりができてた。

相変わらず、友希那は俯いたままアタシの存在を意識する様子すらない。

ふと、スマホの画面で時刻を確認してみれば、もう学校は二限目が始まるぐらいの時間だった。

このまま友希那は学校を休んで、今日は一日安静にすることになるだろうし、アタシはアタシで友希那を送り届けたら、もう完全に遅刻だけれど学校に行かなきゃいけない。

だから、友希那に病院での態度を怒るには、この駅から自宅までの帰り道しかない。

ほんの少し、アタシの方から友希那へ距離を詰める。

そして、ひとつ深呼吸をしてからアタシは切り出した。

「ねぇ、友希那。さっきの病院での態度は、あんまりだと思うよ」

その言葉に、友希那の足が止まった。

「確かにさ、声が出なくなっちゃって不安なのも分かるけど……周りに八つ当たりするのはダメだよ」

俯いたままの友希那の肩は、小さく震えてた。きっと友希那だって分かってる。もうアタシ達は高校生なんだから、そんな怒りを八つ当たりするなんて最低なことぐらい、分かってるんだ。

だから、それを改めて注意されて友希那はたぶん、自分自身とかやり場のない怒りに震えているんだと思う。

だけど、アタシは友希那の幼馴染みで……親友だから。ダメなことをしたなら、叱ってあげるのも親友の役目だと思うから。

「そうやって下向いてそっぽ向いてたってダメだよ、友希那」

そう注意しても、友希那は俯いたままだった。相づちも何もない、まるで無視するようなその態度に、アタシもイライラがまるで沸騰し始めたお湯のようにぐつぐつとこみ上げてしまう。このイラつきに身を任せちゃダメだって、友希那は今弱ってるからこういう態度だって仕方ないんだって察することは出来てるのに。

でも、いくらアタシでも無視されても落ち着いていられるほど大人じゃなくて。怒りのままに友希那の腕を掴んで無理矢理身体をこっちへ向かせてしまった。

ちょっと友希那、無視ばっかしないでよ！」

やっとこっちを向いた友希那の表情は、ひどく……ひどく苦しみに歪んでいて。その表情に、アタシは言葉を詰まらせてしまった。

友希那は声が出ないのを忘れたかのように、アタシに潰れた喉のまま叫ぶように喋ろうとしたけれど――。

「リ……ら……な……わ……わ……っ……」

腫れてしまっていることで中途半端に塞がれた喉から漏れる声は、完全に言葉の形を失ってた。そんな聞き取れない友希那の声に、今朝の夢の中で見た幼い頃の友希那の、あの苦しそうな姿がフラッシュバックする。

分からんないよ、友希那がなんて言おうとしてるのか。

あまりにも苦しそうな表情で、だけどアタシに伝えようとする友希那の様子に胸の奥がぎゅうっと、痛いくらいに締め付けられる。

「こえ……出な……わ……は……の!!」

友希那は今朝と同じように、目からたくさんの涙を溢れさせながら、音の出ない声で必死アタシに伝えようとしてくる。無理して声にしようとする友希那の姿に、アタシはさっきまでの怒りが嘘のように今度は不安が襲ってきて。

「友希那！　無理しないで、喉が悪化しちゃうから……！」

友希那の肩を掴んでなだめようとしたけれど、アタシの手は振りほどかれてしまった。まるで何もかも諦めたかのような友希那の顔に、アタシの方まで息が詰まって声が出なくなってしまって。

友希那はあたしを振り切るように傘を道端へ投げ捨てて、ずぶ濡れになるのも構わずに駆け出してしまった。

「友希那！　待って!!」

アタシは咄嗟に友希那を追いかけようとしたけれど、友希那の投げ捨てた傘を避けて走り出そうと無茶をしたせいで、その拍子に足がもつれてそのまま思いっきり前のめりに転んでしまった。転んだ際に身体を守ろうと前へ伸ばした手のひらと、もつれた片方の足の膝が、雨で濡れたアスファルトに強く打ち付けられて、血が出てしまうくらい思いっきり擦り剥けてしまった。

手や膝からズキズキと痛みを感じるけれど、それに構わず顔を上げて立ち上がろうとしても、一緒に足首も軽くだけれどひねってしまったようで、立ち上がれはしてもよろけてしまって、すぐには追いかけられなかった。

転んだ拍子に傘が手元から離れてしまったアタシを、容赦なく雨が打ち付けてくる。雨に濡れるまま呆然と友希那が走り去った方を見つめていると、頬を何か熱い滴がしたたり落ちる感覚がした。

「っ……馬鹿。泣いたってしようが無いのに……」

そう自分に言い聞かせてみても、溢れだした涙はなかなか止まってくれなくて。歩道の柵に捕まりながら立ち上がってみたけれど、すぐには道ばたへ転がったアタシ達の傘を取る気になれなかった。

擦りむいた手に涙が染みこむのも構わずに目元を拭ってみるけど、涙は全然収まってくれやしない。

友希那だって辛いのは分かっているのに……。友希那を叱った事への後悔が一気にアタシの胸の内に広がって。アタシ、どうすれば良かったんだろう……。

アタシは涙で揺らぐ視界のまま、道端へ放られたふたつの傘を拾って、そのまま傘を差さずに雨に打たれながら、家まで帰ったんだ。

◆◇◆

いつもの学校の昼休み。いつもと違うのは友希那がいないこと。

……そして、友希那と喧嘩したこと。

「はぁ――……」

露骨なため息だって分かってるけど、今日ぐらいは許して欲しい。いくらアタシだって、あんなことがあったら大きなため息の一つだってしたくなる。

結局あの後に友希那の家を訪ねたけれど、友希那は顔を出してはくれなくて。

友希那のお母さんへ傘を返してから、そのまま帰宅してシャワーを浴びて、制服に着替えてこうして学校に来た。

制服に着替える最中、友希那の部屋の窓を見てみても明かりは付いていなかった。

きっと、そのまま寝込んでいるんだろう。熱が出てるんだし、薬を飲んだらそのまま眠くなっちゃうだろうし。

……そう、頭では分かっているんだけど。でもアタシはなんだか勝手に、友希那に拒絶されてるような気分になっちゃって。

そんな憂鬱な気分のまま登校して、二限の授業から参加してみたはいいけれど、殆ど授業の内容は頭に入らなかった気がする。

「ありやりゃー？　リサちーなんだか今日は暗いね。どーしたの？」

まるで外の雨空とは正反対な雰囲気の、アタシのクラスメイトであるヒナが声を掛けてきた。

「もしかして、友希那ちゃんと何かあった？」

相変わらず、ヒナは鋭いなぁ。これも天才だから……なのかな。それは関係ないか。

「ん！……まぁ、ちょっとねぇ」

アタシはヒナの質問に、そう誤魔化し気味に答えた。ヒナに話してもいいけど、でもこれはアタシと友希那の問題だから、なんというか説明するのは気が進まなかった。

だから、アタシはそれとなく、ヒナに質問を返してみた。

「ヒナはさ、紗夜とかなんていうか……どっちかが風邪とかひいた時に喧嘩したことってある？」

あんまりにも漠然としすぎてるアタシの質問に、ヒナはきょとんとした顔をしていた。や、やっぱりアバウト過ぎるよねーアタシの聞き方……。

「うーん……病気の時におねーちゃんと喧嘩したことあったかなぁ……リサちーみたいにガーンってなるような喧嘩はあんまし思い出せないや」

ヒナは手のひらをひらひらとさせながら、そう答えた。

「喧嘩じゃないけど、あたしが風邪引いた時はおねーちゃんがすっごい優しかったのはるんってきたなぁ……。あ！　でもね、あたしが冬に天体観測しに行った時にね、あんまり外に長くいすぎて翌日風邪になった時はおねーちゃんにすっごい怒られたなぁ」

ヒナは顎に人差し指を当てて上の方を見ながら、思い出を掘り起こすように紗夜との病気になった時の思い出を話してくれた。

まるでヒナを優しく看護する紗夜や、自分の身体に無頓着なヒナに怒る紗夜が脳裏に綺麗に浮かぶようで。思わずアタシは力が抜けたように微笑んじゃった。

「ふふっ、ヒナは紗夜に愛されてるなー」

「えっ、そうかな!?　おねーちゃんもあたしのこと好きかな!?」

「アタシはそう思うよー？」

相変わらず、紗夜ってばヒナには直接そういう愛情って言うのかな、想いは言葉にしては伝えてないんだね。素直じゃないなぁ、紗夜も。

紗夜のことで思い出したけど、そう言えば、今日はRoseliaの練習の日だった。友希那は喉が治るまで練習には参加出来ないし、アタシもアタシで、このままRoseliaの練習に参加して、はたしてうまく弾けるのかな……。

正直、今のこんな気持ちで練習に身が入るかというと、自信がなかった。

それに、朝は慌ただしかったから、ベースは家に置きっ放しだし、一度取りに行ってから練習スタジオへ行くとなると、練習時間自体あんまりとれないだろう。

でもなんとなく、アタシはこうしてヒナと話ながら、紗夜にはこの悩みを相談してみたいと思うようになって。

話題を変えて、ヒナと他愛のない話をしながら、アタシは放課後の練習で紗夜に相談してみようと決心した。

◆◇◆

放課後、スマホでRoseliaのみんなに練習に友希那が風邪で来ないことと、ベースを取りに一度帰宅するから練習には遅れるってことをメッセージで送って、アタシは急いで一度家へと帰った。自分の部屋からベースの入ったケースを持ち出す際に、友希那の部屋の方を見てみたけれど、相変わらず明かりは消えたままだった。

今このままベランダを超えて友希那と話したい気持ちもあるけれど、でもきっと太そうして話したって朝の時の喧嘩の繰り返しになっちゃう気がする。アタシ自身、まだ心の整理ができてないんだから、友希那だってそうだろうし……。

後ろ髪を引かれる想いのまま、アタシは家を出て、Roseliaのみんなが練習しているスタジオへと早足で急いだ。きっとみんなも、風邪を引いた友希那からじゃなくて、アタシの方から連絡があったことにちょっと動揺しているだろうから。はやく実際のことをみんなにアタシの口から直接伝えてあげたかった。

そうしてスタジオに着いてドアを開けると、丁度既に練習を始めていた紗夜やあこ、燐子が三人揃ってアタシの方を一斉に見てくる。アタシは遅れたことを謝りながら、友希那が風邪を引いてしまって、声が出なくなってしまったことをみんなに説明した。……友希那と喧嘩したことを除いて。

「そうですか……湊さん、風邪で声が出なく……」

アタシから友希那の容態を聞いた紗夜は、沈痛な面持ちを浮かべた。あこや燐子も、みんな心配そうな表情をしてる。こうして友希那がいない練習は、まるでアタシ達が、Roseliaがバラバラになりそうになった時の状況を思い出すようで。だからみんなもちょっと複雑な心境みたいだった。

「だ、大丈夫だよ！　お医者さんは、安静にしていれば1週間ぐらいで治るって言ってたしさ。友希那も、数日じっくり休んでいれば、登校したり練習に顔出せるようにくらいにはなるんじゃないかな」

アタシはそんなみんなの不安を取り払いたくて、大丈夫だよって、なるべく明るいテンションで喋った。最低だよね、友希那とあんなひどい喧嘩したのを隠して……。

でも、あこや燐子に無駄に心配は掛けたくなかったし、この件をRoseliaみんなで共有するのは、いくらアタシでも抵抗があった。大切な幼馴染みだから、あんまり友希那にとってマイナスなことをみんなと共有するのは嫌で……。

だけど、紗夜はアタシが何か隠してるってことに薄々気付いてる様子だった。あのアタシ達が『Roseliaの音』を見失ってバラバラになりそうになった時もそうだったけど、紗夜は本当になんていうか、Roseliaのみんなの小さな機敏にも気付くようになった。

だからこそ、アタシも以前にも増して悩み事があったら、紗夜のことを頼るようになったんだけど。

何か言いたそうにしている紗夜に、アタシはここでみんなにバレちゃわないようにと先手を打った。

「ねぇ、紗夜。練習が終わったら、ちょっとだけファミレスに付き合って欲しいんだ」

紗夜にそう耳打ちすると、色々と察してくれたみたいで。あこや燐子には聞こえない声量で返事をくれた。

「そう、分かりました」

なんだか、誰かにこの悩みを共有出来るってだけで、学校ではあんなに重苦しかった心がほんの少しだけ、軽くなれた。あの時も紗夜におんなじように注意されたけど、やっぱり1人で抱え込むと、ろくでもないことばかり考えてしまって空回りしてしまうからよくないね。

ベースを準備して、紗夜の隣に立つ。本当なら、アタシと紗夜の間にはいつも友希那がいるのに、今日はそこにぽっかりと穴が開いたように空間が出来ていて。そんな些細なことにもショックを受けてしまうアタシがいた。

ダメだ、しっかりしなきゃ。1週間ぐらいは、こうしていつもの場所に友希那はいないんだから……。

アタシが気を引き締めるのを察したように、丁度良いタイミングで紗夜がみんなに声を掛けてくれた。

「それじゃあ、今井さんも合流したのだし、冒頭からもう一度やりましょうか。それじゃぁ宇田川さん、お願い」

「はーい！　ワン、ツー、ワン、ツー、スリー、フォー！」

あこの合図と共に始まるリズムに意識を集中させる。友希那がいない間も、友希那の居場所であるRoseliaをアタシもしっかり支えなきゃ。

友希那のいないこの喪失感から目を背けるように、逃げるように、忘れるように。アタシはいつも以上に何も考えないように、ひたすら音に意識を集中させた。

◆◇◆

「それで、相談というのは何でしょうか」

生真面目な紗夜は、そんな面接でもないのに背筋をピンッと伸ばして、アタシに話しかけてきた。

ここはファミレスであって英検とかの面接会場ではないし、ましてや紗夜の手元にはドリンクバーで注いだコーラに加えて、店員さんが運んでくれた山盛りポテト。どう見たって紗夜の引き締まった姿勢や張り詰めた態度は周りの状況とすっごいミスマッチだった。

「そんなに構えないでよー。んーとね、友希那のことで……さ」

「先ほどの風邪を引いて声が出なくなってしまった話？　やっぱり、それ以外にも何かあったのね」

アタシの予測通り、紗夜はアタシがまだ話してないことがあるってことに気付いてた。アタシは目の前の自分のジュースをストローでかき混ぜて渦巻くジュースの水面を眺めながら、朝に友希那と喧嘩別れしてしまったことを話した。

「アタシもね、友希那がどうしようもなく不安だっていうの、分かってるんだ。きっと友希那にとって声を無くすって、それが例え一時的なことで治るって分かっていても、すっごい恐怖なんだって。でも、やっぱりあんな八つ当たりな態度を見過ごすなんてできなくて……」

ズルズルと、後悔をこぼしてしまう。

そう、分かってんだ。だって、友希那にとって歌は全てなんだから。

もちろん、あの頃とは違う。お父さんの復讐に燃えていた頃の、歌うことで復習することが全てになっちゃってた頃とは違う。

でも、今の友希那にとっては『Roseliaで歌うこと』がどれだけ大事なことなのか……きっと生きる意味ってぐらい、大事なんだと思う。

アタシの物差しじゃ測りきれないぐらいに。そう漠然と友希那と周りじゃ今回の出来事への温度感が全然違うことは分かってるからこそ、もどかしいんだ。

だって、友希那は今、その想いを喋れないんだから。どんなにアタシ達と友希那の間に気持ちの温度差があっても、友希那はそれを訴えることすらできないんだから。

「友希那に怒った時、声が出ないのに友希那は何かをアタシに叫んでて……もちろん、喉が潰れちゃってる友希那の声は全然言葉になってなくて聞き取れなかった。それがね、夢で見た景色に重なって、すっごい恐いんだ。何かこのままじゃ、大事なものが壊れちゃうんじゃないかなって……」

伝わらなくて分からないから、不安をよりかき立ててくる。たぶん、友希那はこう考えているんだろうって予想はできても、そんなのは所詮アタシの考え。やっぱり本当の答えは友希那から直接聞かないと分かんない。

「夢……？」

紗夜が小さく首を傾げた。そうだった、アタシしか分かんない夢の話をいきなりしたってそりゃちんぷんかんぷんだよね。

「ごめん、夢って言うのはね今朝見た悪夢のこと。ちっちゃい頃の友希那との思い出の夢なんだ」

「その夢が、何か今回の事と繋がるの？」

「うん……」

アタシは紗夜に、今朝見た悪夢の内容を詳しく話した。それは友希那がタンポポの花冠をプレゼントしてくれた思い出だと言うこと、夢の中での幼い友希那の言葉がいつも聞き取れないこと、今朝はいつもの夢と違って夢の中の友希那が何かを訴えてきたこと。

そして……そんな夢の『友希那の言葉が聞こえない』っていう内容が、すごい今の境遇と重なって不安になるって事を。

「そうですか……それにしても、タンポポの花冠……ね」

そう呟きながら、紗夜はなんだか意味深な目線をアタシに向けてきた。何か思い当たることでもあるのかな？

「ねぇ、紗夜。何か気付いたの？」

率直に聞いてみたけれど、紗夜は目線をアタシから逸らしてしまった。

「いえ、なんでもないわ」

なんだか怪しい。そう言えばヒナが言ってたっけ。紗夜は何かを誤魔化す時は、斜め下に目線を逸らす癖があるって。

「何か誤魔化してなーい？」

そう聞いてはみるけど、紗夜もなかなかに頑固で、答えてはくれなかった。

「なんでもないと言ったでしょう。それに……その夢の答えも、きっと湊さんから直接聞くべきよ」

うーん、そう言われると、ぐうの音も出ないなぁ……。アタシはちょっとばかり俯いてため息をつきながら、先ほどまでかき回していたジュースをストロー越しに飲んだ。勢いよく喉を撫でる、冷えたジュースの感覚が気持ちいい。

「ねぇ、今井さん」

紗夜は少し言いよどみながら、アタシに話しかけてきた。

「ん、なぁに？」

アタシはコップの方から紗夜の方へ顔を向けて続きを促す。

「怒って喧嘩になってしまうのは、それだけ相手のことが大切で、大きな存在だからだと思うの」

紗夜は目線をポテトの山へと移して、そのてっぺん当たりをジッと見つめてた。別にポテトは大事ではなくて、たぶん視線のやり場に迷ってなんとなくそこにたどり着いただけなんだろう。紗夜にとって大事なもの……それは間違いなくヒナのことだから。

「私も、日菜に怒ることはよくあるし、喧嘩することもあるわ。……昔はあの子を、憎みさえした。たった一人の大切な妹なのに」

両手で半分程まで減っているコーラの入ったグラスを包みながら、その縁を親指でなぞりつつ、紗夜は言葉を続けた。

「でもそれって、それだけ私にとって日菜の存在が大きかったからだと、そう思うんです。だから……何度喧嘩しても、あんなにすれ違っても、私たちは成長とともにだんだんと、少しずつだけれど、歩み寄りあっていくことが出来た」

とっても優しい表情をしながら、紗夜はヒナとのことを話してくれる。そっか、紗夜も今までたくさん……それこそアタシと友希那よりも、もっとたくさん喧嘩したりすれ違ってきたんだもんね。

「自分の音が分からなくなった私を、日菜が正面からぶつかってくれたあの雨の日から、自分で言うのも変ですけど、私と日菜の仲はだいぶ良くなったと思ってます。そんな今でも、くだらないことで日菜と喧嘩することはあって」

だから、と一言区切りを入れながら、紗夜は私の瞳を真っ直ぐ見つめてきた。

「大切だから、好きだから、時には譲れなくなって、些細なことでも喧嘩になってしまったりするのよ。本気で心配だから、強く叱ってしまうの。でもそれが大切に思ってるからだってことは、きっと相手にも程度はどうあれ伝わっていると思うわ」

ふっ……と柔らかく笑う紗夜に、アタシもすっごい励まされる。

そっか、そうだよね。友希那にだって、アタシが怒った理由や想い、きっと分かってくれてるよね。今までも、友希那はちょっとずつだけど、友希那なりにアタシにたくさんのお礼やお返しをしてくれたんだもん。アタシはきっと、不安だって言いながら友希那のこと信じてあげれてなかったんだ。

「ありがとう、紗夜！　なんだかすっごい気持ちが楽になったよ！」

「ふふっ、どういたしまして」

昔は紗夜によくヒナのこと相談されてたけど、こうしてアタシが励まされる側になるとジーンって感動しちゃう。

今アタシがすべきことは、うじうじ悩んでないで、友希那のことを支えてあげること。友希那を独りにしちゃダメなんだ。

なんだか心の調子が戻ってきたアタシは、いつものような軽口を紗夜にこぼした。

「それにしても、大切で好きっていうその好きって言葉、もっとヒナに直接言ってあげれば良いのに」

その言葉に紗夜は一気に耳まで赤くなっちゃう。かわいいやつめー。

「なっ、何を急に……！　それを言うのなら、今井さんだって湊さんにさっさと告白したらどうなんですか」

「うっ……それはほらーその、うん。なんていうか、心の準備が、ね？」
鋭い紗夜の返しに、アタシは思わずどもってしまった。アタシの様子にちょっと仕返しできたと満足したのか、紗夜はコーラを少し飲んでから言葉を続けた。
「毎度こうしてファミレスで惚気られる私にもなってください」
「それは紗夜だって同じじゃん。ヒナのことアタシにたくさん惚気てくるでしょー」
「そっそれはそれ、これはこれです！」
うーん、それはちょっと違うような……なんて、笑いながら
そこからは最近気になるバンドの話とか、自主練で参考になったサイトの話だとか、ヒナが好きそうな美味しいスイーツの店をどこに見つけたとか、友希那が気に入りそうな猫カフェがあの駅最寄りに見つけただとか、ほんといつも通りの何気無いお話をたくさんして、どちらからともなくそろそろ結構時間経ったからと会計を済ませてそのまま解散した。
あいにくタイミングが悪いことに、今日はバイトのシフトがこの後入っちゃっていて、友希那に会えるのは夜になってからになっちゃう。
「はやく友希那に会いたいなぁ……」
そう独り言を零しながら、アタシはバイト先へと歩いていった。

◆◇◆

アタシは自分の部屋で、ベッドに寝っ転がりながらスマホの画面とにらめっこしている。今は二十一時過ぎで、バイトを終えて帰ってきてから、もうお風呂も入ってきて、お夕飯も食べ終わった後。
本当は友希那と直接会って話をしたかったけれど、帰宅してすぐ友希那の家のインターホンを鳴らしたら、出てきたのは友希那のお母さんの方で、今は友希那は寝込んでると言われて、結局会えずじまいだった。
そんなわけで、友希那に直接会えないならばスマホのメッセージを使って、今日のことやこれからのことへのアタシなりの考えを送ろうと思ったのだけど、いざ送信しようとすると中々言葉が思いつかなくなっちゃって。アタシはぼふっと枕に顔を埋めてみたりしながら、ずーっと白いままのメッセージ入力欄を眺めてた。
元々アタシは直接お話しするのが好きだから、こう、自分の気持ちをひたすら文字で打つのはなんか苦手だった。
ベッドに寝っ転がったまま、視線だけ窓へ向けて友希那の部屋に明かりが灯ってないかを確認してみるけれど、相変わらずそこは暗いままだった。
友希那、まだ寝込んでるのかな。特に作曲する時なんかは、友希那はよく夜遅くまで起きていたから、そういうところでも身体が弱くなっちゃって、今回みたいにただの風邪が喉をダメにしちゃうほど悪化しちゃったのかもしれない。
思い返せば、ここ最近も深夜一時頃まで部屋の明かりが点いていたこともあったし、寝不足で風邪を引きやすくなっちゃってたのかな。それなら、もっと早く友希那に夜更かしのしすぎはダメだって釘を刺しておけば良かったなぁ、なんて。
後悔してもしょうがないのに、ついつい友希那にああしてあげれば、

こうしてあげたなら、って考えちゃう。
うぅ……自己嫌悪のループから抜け出せない……。
結局、ぐるぐると考えてしまうばかりで、なんもメッセージがまとまらないまま時間だけが過ぎていって。
あー、うー、って唸りながらゴロゴロしてみたり、スマホの画面をぼんやりと見ていたりしていたら、ふと気付くともう画面に表示された時計は二十二時半過ぎになってた。
あ、もうこんな時間……って、夜遅い時間なことを自覚した途端に、日中慌ただしかったことや非日常的なことが重なり過ぎたことも加わって、急に強烈な眠気が襲いかかってきて。
このままじゃメッセージ何も送れないまま寝落ちしてしまいそうで、とにかく何かメッセージを送らなきゃっていう一心で、アタシは『今日はごめんね』と文頭に打ち込み出したんだけど……。
……そのまま、どう言葉を続けようかと悩んでいる間に、いつのまにかアタシは眠りのずっと底へ真っ逆さまに落っこちちゃったんだ。

◆◇◆

あぁ、またこの夢……。
そう思わず言葉を零してしまったのは、今アタシの目の前に広がっている光景が昨晩も見たものだったから。
それは、幼いアタシと友希那がよく遊んでいた思い出の公園で、お互いにタンポポの花冠をプレゼントし合う光景。いつも見る夢では空は青く晴れているのに、昨日の友希那と喧嘩してしまった事がアタシの心に燻っているせいか、今日の夢では空は晴れてなんかいなくて、逆に重苦しいような冷たさを感じる暗い曇で覆い尽くされていた。
まるで神様のような視点からこの夢を見ているアタシ自身には、相変わらず夢の中にいる幼いアタシと友希那がどんな言葉を交わしているのか全然聞き取ることはできなくて。それはまるで、映画館で一番前の席に座りながら、登場人物の『声』だけが抜け落ちた暗い映画を見ているような感じで、寂しさと悲しさがごちゃ混ぜになったような感覚。
幼いアタシは、友希那にタンポポの花冠をその小さな頭へプレゼントしてもらえた途端、泣き出してしまって。それにビックリした友希那が、アタシの頭を撫でてくれる。そうしたら突然、友希那が『夢を見ているアタシ自身』に振り向いてきた。
また、だ。友希那が何か語りかけているには分かるけど、その言葉は、音は聞こえない。
ねぇ、友希那は何をアタシに伝えようとしているの。
アタシは、何を忘れているの……？
手を伸ばそうとするけれど、その手は友希那へとは届いてくれなくて。おかしいな、目の前に幼い友希那がいるのに、どんなに手を伸ばそうとしても、なぜか届かない。
だんだんとまるで首をしめられて意識を手放しちゃいそうになるような息苦しい感覚がして、視界が暗く黒く狭まっていく。溺れないように必死に水面に出ようとするように、この感覚に抗おうとして。
「……っ！！　はぁ……は……ぁ……」
そうして、目が覚めた。

一、日連続で最悪な目覚めだなぁ……ほんと。無意識に枕元のスマホを強く掴んでいたみたいで、スマホからの明かりが目に刺さってつらい。

そっか、アタシは友希那へのメッセージ打ってる途中に、いつの間にか寝落ちしちゃったんだ。部屋の明かりが消えてるのは、たぶん普段から寝落ちしちゃった時のために設定したタイマーが動いたからかな。

気怠い目に刺さる、まぶしいスマホの待ち受け画面を細目で見やれば、表示されている時刻はまだ五時を過ぎたばかりだった。中途半端に寝落ちした上に、悪夢を見てしまったせいでこんな時間に目が覚めちゃったみたい。

覚めきらない感覚のまま二度寝してしまおうかとも思ったけれど、待ち受け画面に表示されている通知に気付いた途端にアタシの心臓はどきりと大きく跳ねて、眠気なんて吹き飛んじゃった。

それは、友希那からの新着メッセージを告げる通知だった。急いで身体を起こして、スマホのロックを解除してメッセージを確認してみる。

そうすると、どうやらアタシは『今日はごめんね』のメッセージだけで送信をタップしてしまったみたいで、友希那からのメッセージはそれへの返信だった。

友希那からのメッセージは、とても短くて。

綴られていた言葉は『私もごめんなさい』と、それだけだった。

その言葉に何故だかわからないけれど、どうしようもなく目頭が熱くなっちゃって。アタシはスマホをぎゅうっと胸元に抱き締めて、そのままちっちゃく身体を丸めた。

友希那はいっつもこういうメッセージやメールは必要最低限のことしか書かないから、いつもアタシなりにその言葉の意味を色々考えてしまって。ましてや昨日今日と友希那と全然ちゃんと会話出来なかった分、余計にあれこれと友希那の方からの『ごめんなさい』ってメッセージ一言に込められたものを考えてしまう。

ふと、昨日の紗夜の言葉がフラッシュバックしてきた。昨日は友希那とは喧嘩別れみたいな感じになっちゃったけど、アタシが友希那のこと本当に心配してたこととか、友希那のこと大切だから強く叱ったこととか気付いていてくれていたのかなって思うと、すごく嬉しくなってしまって。

でもその反面、友希那にもっと寄り添った言葉をかけてあげたならとか、うじうじと後ろめたく考えてしまうアタシもいた。

そうやってもうなんだか自分でも頭の中がグチャグチャで。

結局、そのままアタシは二度寝することもできなくて、布団でぐるぐると考え込んでいたら、外は朝日で明るくなっていって、いつも起きる時間になっちゃっていた。

スッキリしない気分のまま学校へ行く支度をしながら、頭の中では友希那は今日もお休みなのかな、夕方に訪ねれば今度は会えるかな、もし熱が引いていたら学校へ来てくれたりするのかな、って友希那に会えるかどうかってことばかりを考えてしまう。

だから、お母さんへ行ってきますと声を掛けながら玄関を出たら、すぐ目の前にマスクをしてはいるけれどいつもの制服に身を包んだ友希那がいたことにすっごくびっくりして、思わずその場で固まってしまった。

「友希那……？」

アタシは呆気にとられちゃって、そう名前を口にするのが精一杯だった。友希那はアタシの言葉に、ほんの少しスマホを操作し出してそうしたら、アタシのポケットから少しスマホの振動を感じて、画面を確認してみたら友希那から『熱が引いたから、学校へは行くわ』とメッセージが届いてた。

「そっか……！　まだ喉は治って無くても、熱はひとまず収まったんだね！　良かったぁ……」

アタシが胸をなで下ろすと、友希那はいつも『リサは大げさね』って呆れる時とおんなじ表情をしていて。たとえ声が出なくても、友希那の仕草でなんとなくどんなこと考えてるか分かる自分自身に少し安心しちゃう。

まだ、大丈夫。アタシは友希那のこと全然わかんなくなっちゃったわけじゃない。たとえ声にして言葉を交わせなくても、友希那の考えてることはおおよそ分かる。

……あの夢の中みたいに、何もわかんなくなっちゃってるわけじゃない。

友希那とふたり、肩を並べて学校への道を歩いてく。友希那の声が出ない以上、なんだか声をかけるのも気が引けてしまって、ひたすら無言の時間がアタシ達の間を流れてく。

別に気まずいって程ではないけど、でもせっかく友希那とふたりっきりなのに、会話が全然ないのはすっごい違和感。

特に、アタシはこういうふたりっきりの時はあれこれ話題を友希那へと振る側だから、何というかウズウズしてしまう感じ。

友希那にもそれは伝わってるみたいで、心なしかなんだか視線がいつもより下を向いてる気がする。

アタシはなんとか空気の流れを変えたくて、なるべくイエスかノーで答えられるようにって意識しながら、友希那にある提案をしてみた。

「ねぇ、友希那。声が治るまでの間はRoseliaの練習を見守る側って感じで参加してくれないかな？」

アタシからの提案が予想外だったみたいで、いつもは凛々しい友希那の瞳がちょっと丸くなった。その様子にチャンスと思ったアタシは、友希那の返事より先に理由をまくし立てるように伝えた。

「やっぱりさ、友希那がそこにいるだけでもRoseliaみんなのモチベには良いと思うんだ。だから、もし友希那さえ良ければ、見守るだけでも練習に参加してくれたらなーって思ってさ」

今、声が出せなくなっちゃってる友希那に、バンド練を見学させるのは辛い思いをさせちゃう面もあるのは分かってる。

だけどアタシは、友希那が音楽から一時的にでも離れて独りっきりになってしまうよりは、この方が友希那をひとりぼっちにさせないで済むからいいと思ったんだ。

友希那はアタシからの提案に、はじめは少し戸惑った様子だったけれど、すぐにいつもの音楽に真剣な時のカッコイイ表情になって、強く頷いてくれた。

「……！　ありがと、友希那！　よーし、そうと決まったらアタシからみんなに連絡しておくね！」

良かった、もし断られちゃったらどうしようかと思ってたから……

れ以上友希那とアタシの間に溝が深まったらと思うと怖くて仕方なかったから、友希那がアタシの提案を受け入れてくれたことがすっごい嬉しい。

「そうだ、友希那。もし困ったことがあったら、スマホのメッセージとかでなんでも教えてね！　友希那のことはアタシが支えるから！」

上がったテンションのままそうまくし立てたら、友希那が申し訳なさそうな表情をしてきた。そうやって視線を斜め下に逸らすのは、何か後ろめたい時にする昔からの友希那の癖だったから、アタシにはすぐに分かるよ。

「そんな気にしないでよ、友希那。アタシ達幼馴染じゃん。このぐらいトーゼンだよ！」

そう言いながら、友希那の片手を握った。友希那は照れちゃって顔を赤くしてるけど、なんでだろう。友希那の瞳には、何故か今のアタシの言葉に何か引っかかってる様子も感じてしまう。

……ううん、今は声が出ない友希那を少しでも支えてあげるのが大事。まるで友希那のことで分からないことがあっても目を背けるように、アタシはそう自分に言い聞かせた。

◆◇◆

そうして、アタシと友希那の長いようであっという間な一週間が始まった。

アタシは言葉通り友希那を支えるために、休み時間や放課後は時間の許す限り友希那と一緒に過ごすようにした。

その為にバイトもなるべくシフトを少なくして、部活もなるべくはやく切り上げるようにしたんだ。

アタシの心は醜いから、友希那は声が出なくてツライのに、そのおかげで友希那と一緒の時間がすっごく増えたことにこっそり喜んじゃってたり。

……サイテーだよね、アタシ。こんな汚い感情を抱いたまま、大切で、大好きな人の側にいるなんて。

もちろん、友希那にとってはアタシは幼馴染。恋心はアタシが一方的に片想いしてるだけ。

だからかな、毎晩アタシの夢にはあの幼い頃の光景が蘇ったんだ。それはまるで、あんまりにも自己中なアタシへの罰みたいで。『お前は友希那のことちゃんと分かってないんだぞ』って言われているような感覚。

それでも、友希那は今は声がうまく出せないんだから夢に出てくる思い出の真実を確かめることなんてできなくて。

普段の日常は、友希那が意味深な表情をしてきて、それがなんなのか分からないこと以外は上手くいっていたと思う。

……そう、この一週間を一緒にいる中で、友希那は時折アタシが今まで見たことないような表情を見せることがあった。

友希那はアタシとのなんでもない会話の時に、なんだかその瞳に寂しそうな色を宿して、少し俯いたような目線になることがあったんだ。その初めて見るその表情の理由は、アタシにも分からない。

もちろん、それについてアタシが聞けば友希那は何かしら答えてくれるかもしれない。でも、大切な声を治そうと必死な友希那を邪魔し

ちゃうことなんてできるわけないから。それに、たぶん……なんでか分からないけど、こわい。

だって、その寂しそうな瞳には、冷たさじゃなくて何か熱みたいなものがあるような気がして。

切なくて、熱い感情。それってもしかしなくても……。

……『恋』だったりしたらどうしよう。

友希那がもしかしたら、アタシの知らないところで、誰かに恋してたりしたら……。

いや、待つんだアタシ。いくらなんでも飛躍しすぎでしょ。

だけど、何度もそんな友希那の表情を見る度に、アタシの言いようのない不安感は、その真実を確かめられないからこそどんどん膨らんでいっちゃって。

それにアタシ自身、友希那に恋……してるから。だからなんとなく感じてしまうんだ。

あれは……誰か好きな人のことを思ってる表情なんじゃないかって……。

そう考えだすと、自分は恋心を隠してるくせに友希那のことを疑ってしまってることへの自己嫌悪と、もし予感が当たってしまったらっていう不安と……それが現実になったらどうなるかっていう恐怖が襲いかかってきて　そんなぐちゃぐちゃな状態じゃ、うまくやっていけるわけ無かったんだ。

まだあまり大きな声は出せないし、声色も元どおりではなく掠れているけれど、少しずつ友希那の声が戻りつつあった六日目の夕方に、事件は起きた。

……いや、起きたんじゃない。『起こした』んだ。

アタシが、友希那を、傷つけちゃったんだ。

◆◇◆

友希那の声が風邪で出なくなっちゃってから六日目。大変な日々っていうのは長いようでいてあっという間で。まだ元通りではないけれど、普通に喋れるぐらいには友希那の喉は治ってきていた。

それでも、まだ歌うのは喉に強い負担がかかるからダメだし、完全に声色が戻ったわけではなくて、やっぱりどこか掠れたような状態のままだった。

だから、友希那はまだ極力声を出すのを避けていて、必要最低限の時だけ喋るようにしていた。もし万が一、治療中に声を出してしまったせいで元どおりにならなくなったりしたら怖いから。

今日は紗夜が弓道部の試合前だからって理由で部活の方に行っているし、燐子も用事があるってことでRoseliaの練習はお休み。バイトも部活もないアタシは、放課後は友希那と二人っきりだった。

帰ろうって、友希那に声を掛けに教室へ行ったら、友希那はちょっと調べ物をしたいって言い出して、学校の図書室に一緒に付き合ってあげた。

図書室に入るなり、あまりにも真剣に友希那が本を読み出すものだから、声をかけるのも気が引けて。アタシはアタシで、料理のレシピ本でも眺めながら時間を潰すことにした。

友希那が図書室なんて珍しいなぁ。何か新しい曲の歌詞で資料というかネタを探してるのかな？

初めて見る、幼馴染の表情。最近、アタシはなんだか友希那の『はじめて』をたくさん見かけてる気がする。

だけど、そのどれもがまるでバラバラになったジグソウパズルみたいで、いまはまだうまく噛み合わない。その裏に何があるのか、どんな真実があるのか、今のアタシにはわからない。

ううん、分かるのが怖い。もし、『友希那が誰かに恋をしている』だなんて最悪な予想が当たってたらって思ってしまって。

だけど、好奇心っていうのは一度気になるとなかなか抑えが効かなくて。知るのが恐いのに、友希那が何をそんなに真剣に読んでいるのか知れば、何か分かるかもだなんて思い出してしまうと、そればっかりが気になってしまう。

……なにを読んでるんだろう。

知りたい、何が友希那をそうさせるのか

アタシは本を棚へと戻すフリをして、さっきから友希那が本を取り出しては戻してる本棚へとこっそりと足を運んでみた。

その棚に並ぶ本の背表紙たちを見て、アタシは思わず息がつまりそうになった。

そこに並んでいる本たちは、どれも明るい色の背表紙をしていて、目に入る言葉はどれも実写映画化だとかコミック化だとかで聞いたことがあったり、ベストセラーって噂を耳にしたりする文庫本たち。

そう、それは……どれも、これも、ふたりの男女の切ない恋物語の本だった。

あんなに真剣な顔で、友希那が恋愛小説を読んでた……？

どうして、読んでたの？

……そんなの、気になったからでしょ。

なんで、読んでたの？

……そんなの、読みたかったからでしょ。

なんで、なんで。

アタシは、本の隙間から、奥に座る友希那を盗み見た。

……なんで、そんなに切なそうな顔をしているの。

その場で崩れ落ちないように、アタシはとっさに本棚に片手をついた。

知りたくなかった。こんなの。

知りたくなかったよ、こんなの真実。

この一週間で友希那が見せてた、あの初めての表情や仕草たちが、ほんとは、こんな……。

今までの一週間で目にしたもの。友希那がふとした時に見せた切なそうな表情や、今こうして恋愛小説を、それこそまるで恋する女の子の顔で読んでいること。そしてそれが、普通に男女の恋愛の本だっていうこと。

それらが結びつける真実って、それってつまりは——友希那に誰か、好きな男の人ができていたってこと……。

ぐにゃりと視界が歪んで、はじめてアタシは涙が溢れそうになってるのに気づいた。

だめだよ、ここで声を出して泣いたりしたら、友希那にバレちゃう。親友なら、好きな人ができたら喜んであげるべきなのに。応援してあげるべきなのに。

だけど、そんなの、アタシにはできない。

だって、アタシだって友希那のことが……！

「……っ……く……」

アタシは必死に片手を口に押し当てて、零れ落ちそうになる声を押さえ込んだ。

ダメ、こんな状態で友希那の前に戻るなんてできない。だけど、我慢するなんて、一度溢れ出した涙はそんな簡単には止まってくれなんかしなくて。

アタシはしばらく本棚の背後に隠れて、声を必死で押し殺しながら、涙が止まるまで耐え続けた。

図書室は人がまばらだったからか、ラッキーなことに誰にも見られずにすんだけれど、そんなの、全然嬉しくなかった。

なんとか涙が収まって、息を整えてから友希那の元へ戻ったら、心配そうな瞳で覗かれて。

それがまたつらくて、アタシは「ちょー泣ける本を読んじゃっただけだから」だなんて、下手な嘘をついて誤魔化そうとしたんだ。

だけど、友希那はアタシが嘘ついてるってことを感づいた様子だった。そうだよね、幼馴染みなんだもん。何かあったってぐらい、バレちゃうよね……。

それでも、友希那は特にそれ以上は聞いては来なくて。

ただ、短く「帰りましょう」とだけ、掠れた小さい声のまま口にしたんだ。

ふたりで歩く、無言の帰り道。

今までこんなに苦しい友希那との帰り道はなかったかもしれない。それなのに、空は憎らしいぐらいの秋晴れで。重苦しいのは世界でアタシだけでも言うようで、それが更にアタシの心を追い立てる。

もうすっかり冬の気配を感じさせる秋空はだいぶ日が傾いていて。薄い雲がいくつもの層に分かれていて、夕暮れに照らされた雲たちは色んな明るさや鮮やかさのオレンジ色に染まってる。その雲たちの奥には、夜に向けて空が蒼く深く色づきはじめてた。

空との境界にはアタシたちがいつものる電車の線路が、真っ黒なくっきりとしたシルエットで浮かび上がっていて、なんだかそのコントラストが切り絵みたい。

まるで詩人みたいなことを考えて現実から逃げてみるけれど、全然心は軽くなったりなんかしやしない。

だけど、下を向いたらきっとまた泣き出しちゃうから。アタシはとにかく前を向いて歩き続けた。

そうして必死に心の傷を抑えてたら、不意に友希那が声をかけてきて。

「ねえ、リサ。何が、あったの」

まだちょっとたどたどしい友希那の声。今のアタシには、そのしゃがれてしまった声も、心配そうな瞳も、その気遣いの優しさも、ぜんぶが、痛い。

「なんでもないよ」

自分でもそんな言い方どうなのって思うけど、それでも、心に余裕のカケラもないアタシは、トゲの声でまるでちょっと突き放すような

言い方をしてしまう。
友希那はそうやって恋に焦がれていても、アタシはついさっき失恋したばっかなんだよ？
だから、放っておいてよ。
身勝手でわがままなアタシのココロ。だけど、友希那は引き下がってくれなかった。
「嘘よ。リサ、何があったのか話してちょうだい」
さっきより強い声で友希那が話しかけてくる。だけど、アタシは友希那へと視線を向けずに答えた。
「言ったでしょ、なんでもないってば」
お願いだから、いまはやめて。ほんと、余裕ないから。
突き刺さる視線から、友希那の苛立ちを感じる。そう、アタシが悪いんだ。心配してくれてるのに、こんな突き放すような態度をされたら誰だって嫌なのに。
でもほんと、今は無理なの。
だってさ、大好きで大切な人が本当は別の人のことが好きで、大切な人だから応援しなきゃいけないけれど、大好きな気持ちを諦めるなんてできなくて、でも『友希那のこと一番支えてきた幼馴染み』なアタシは友希那の恋を支えてあげなきゃなんなくて、もう訳がわかんなくなっちゃって、もう心が悲鳴を上げて壊れそうなの。
だから、今はアタシに構わないで……優しくしないで。大好きだから、他の誰かを好きっていう友希那の気持ちに、アタシが黒い感情を持っちゃわないように。気持ちの整理をする、時間が欲しいから。
「友希那、まだ声が治ってないでしょ。だからそんなに……」
「いいかげんにして!!」
アタシの言葉を遮る友希那の怒鳴り声に、アタシは思わず立ち止まった。それと同時に、グイッと腕を引かれて友希那の方へ無理やり振り向かされちゃう。
「そんな泣きそうな顔して、なんでもないわけないでしょう!? なにがあったのか話して」
久しぶりに見る、怒りを滲ませた友希那の瞳。一週間前のあの時とは反対な、アタシを心配してくれてる眼差し。
あの時とはまるで真逆な、今のアタシたち。
あぁ、なんかもう……いいや。友希那に言っちゃおうかな……。そう、心の底で黒い感情が渦巻く。
だけど、そのままこのドロドロとした想いを吐き出してどうなるんだろう。
アタシの勝手な恋、勝手な失恋。幼馴染の、しかも同性なのに好きって感情。そして、アタシ以外を好きになるなんて嫌だっていう、ワガママで自己中な気持ち。
そんなの、友希那からしたら、迷惑以外のなにものでもないのに。
それに、伝えたならもう元の関係にはきっと戻れない。女同士なのに好きだなんて、気持ち悪いって引かれて、もう隣に立つことすら拒絶されたとしたら……。
もしそうなったらと想像すると、絶望で心が押しつぶされそうになる。
そんなの、絶対いやだ。本当のことなんて、ぜんぶ言えるわけなんてない。

だから、アタシは無理矢理本当の気持ちに半分フタをして、友希那の問いに答えた。
「アタシ、失恋したんだ」
自分の口から出た言葉に、思わず自分で泣きそうになっちゃうけれど、なんとか耐える。
「えっ……」
アタシの言葉に、友希那は驚いて固まっちゃってる。だけど、それに構わずアタシは言葉を続けた。
「ずっとね、好きな人がいたの。いつから好きだったか分かんないくらい、ずっと」
そう、いつからこんなに好きになったのか、思い返せないくらい好きなんだよ、友希那のこと。
「だけど、その人は別の人が好きでさ。だからさ、うん。アタシ失恋したんだよ」
アタシの言葉が、アタシ自身を切り刻んでく。その痛みに耐えきれなくって、最後の方は本当、友希那に聞こえているのか分かんないぐらい声が小さくなっちゃった。
目線もどんどん下に向いちゃって、こぼれそうになる涙を見られたくなくてアタシは俯いたまま顔をあげることができなかった。
アタシたちの間を、周りを歩く人たちの音や、遠く聞こえる電車の音だけが過ぎていく。
最初にアタシたちの沈黙を破ったのは、友希那だった。
「誰なの、その人」
あはは、そんなの言えるわけないじゃん。だって、目の前にいるんだから。
アタシは答える気は無いってつもりで、俯いたまま顔をあげなかった。
「リサ、教えて。誰なの、リサの好きな人って」
そんなに気になるんだ……。そうだよね、仲の良い幼馴染が失恋で悲しんでたら、それが誰か気になるもんね。
だけど、好きな人にそうやって聞かれるのは、やっぱりキツい。アタシだって、そんな映画に出てくるサブヒロインみたいにさ、潔く身を引いたり出来るほど強くなんかないんだよ。
だから……。
「ごめん、放っておいて」
そう、友希那を突き放した。
だけど、友希那はアタシの腕を掴む手をほどかずに、まだくいついてきた。
「ねぇ、リサ……」
アタシ自身、なんでそんなことしちゃったのか分かんない。だけど、引き下がらずに聞いてくる友希那に、アタシの心の何かが壊れて、一気に頭が熱くなっちゃって。
「言ったでしょ！ アタシのことは放っておいて!! アタシの気持ちなんてわかんないくせに!!」
そうアタシの口から出た怒鳴り声に、自分でびっくりしちゃう。それと同時に、すっごい後悔が襲いかかってくるけど、もうなにもかも手遅れだった。
アタシの身勝手で最低な言葉と、それにひどく傷ついた友希那の表

情、一週間前も見た、友希那の苦しそうな表情。あの時とは違う、今度はアタシが……アタシの身勝手さが傷つけた表情。

もうなにもかもがグチャグチャで、メチャクチャで。耐えきれなくなったアタシは友希那の手を振りほどいて、その場から走り逃げ出してしまう。

「リサ！」

背後から友希那の叫び声が聞こえるけれど、それに構わず全力で走った。

走って、走って、走って。

いつもは帰りに通らない、線路の高架下の道へと逃げこんだ。

アタシは走ってる間ずっと泣いちゃってたみたいで、立ち止まってみれば顔は涙でグチャグチャだった。

「バカだアタシ……ほんと、何やってんの……っ」

すっごい自己嫌悪が襲いかかってくるけど、もう何もかも手遅れだった。

明日からどう顔を合わせればいいんだろう。

明日からどう話せばいいんだろう。

明日から……。

ほんと、サイテーだ、アタシ。

自分が情けなくて、友希那を奪られたのが悔しくって、友希那にあたった自分が憎くって。このまま、消えてしまいたい……。そう思っちゃえば、もう抑えなんてきかなかった。

アタシの心は決壊しちゃって、そのまま思いっきり声を上げて泣いてしまった。

高架下に響く電車の通る音が、アタシの泣き声をかき消していく。轟音にかき消されながら、泣いて、泣いて。

力がうまくはいらなくて、そのままフェンスに寄りかかった。

そうして、どれくらい泣いていたか、分かんなくなった頃。

涙も枯れそうになっていて、ふと気づけばすっかり周りは暗くなってた。少しふらつきながら、アタシは駅へとふらつきながらも歩き出した。

その後家に着くまで、友希那と会うことはなかった。

◆◇◆

学生ってのはツラいもので、どんなひどい失恋をしても登校すればその人と同じ空間で過ごすことになっちゃう。あんなに友希那と同じクラスだったらって思ってたのに、今は友希那と別々のクラスなことに感謝してしまう。

結局、あの喧嘩別れみたいな出来事のあとからアタシは友希那とまともに会話できていないまま。アタシはまるで友希那から逃げるように、バイトのシフトや部活の予定を放課後に入れた。今はまだ、全然心の整理が追いつかないから、友希那と会ったらまた身勝手に傷つけてしまいそうでこわかったんだ。

加えて相変わらず夜はあの夢を見てしまって、目が覚めれば現実は最悪な状況だしで、なんだかうまく寝付けない日々が続いてしまった。

ただラッキーなのは、次のバンド練がまだ何日か先なことぐらいだった。いくら友希那と顔を合わせるのが辛くたって、友希那の居場所であるRoseliaの足を引っ張ることはしたく無い。

そして、バンド練になれば友希那と会うことになる。だから、それまでにはなんとかして心の整理をしなきゃ。

だんだん迫り来るバンド練の日。だけど、一向に心の整理なんかできなくて。うまく眠れなくて、寝たら夢にうなされて、起きて学校へ行けば友希那を避けるようにしてしまう自分自身へのストレスで、アタシはかなり疲れが溜まっちゃってたみたいで。

あの喧嘩別れした日から三日目。いよいよバンド練が明日あるっていう日に、アタシはホームルーム後にそのまま自分の机で寝落ちしちゃったんだ。

また、あの夢。

幼い頃のアタシと友希那の、思い出の夢。『声』が抜け落ちた夢。夢の中だけれど、眠りが浅いのかな。アタシは今机で寝落ちしててこの夢を見てるんだってぼんやりと感じる。夢の景色は空が夕暮れに染まっていて、これはたぶん実際に現実は夕暮れ時だから深層心理だかなんだかで影響されてるんだろうなー、なんて。

まったく、寝落ちしてまでこの夢を見せられるなんて、特に今はかんべんしてほしいのに……。

そう思いながら、夢の世界を見守る。いつもどおり、幼いアタシが泣き出して、そんなアタシの頭を友希那があやすように撫でている。

そうしてまた、幼い友希那は『それを見ているアタシの方』へ振り向いて、声が無く聞こえない言葉を言って――。

『泣かないで、リサ』

――初めて、声が、聞こえた。

目蓋にオレンジ色の眩しい光が刺さる感覚が広がって、ぼやけた教室がだんだんとくっきり見えてくる。

照明が消された教室内は少し暗くて、夕陽だけに照らされオレンジ一色に塗りつぶされた景色に、もう夕暮れ時なんだって気がつく。

寝落ちしたアタシが悪いんだけど、みんな帰る前に起こしてくれたっていいのに。

そう心の中で独りごちながら、目元をこすりながら面をあげた途端、アタシは息をするのすら忘れてしまいそうになった。

目の前の席には、丁度横向きに友希那が座っていて、作詞した内容が綴っているノートを、静かに読んでいた。

夕陽を浴びて輝く銀髪が、ノートのページを追う金色の瞳が、オレンジ色に染まる白い肌が、すっごい綺麗で。

アタシはそんな友希那の姿に見惚れてしまう。

そんなアタシをよそに、本人はといえば何食わぬ顔でこっちに振り向いて。

「おはよう。ようやく起きたわね」

いつも通り力強いけど落ち着いた様子で、すっかり治ったいつもの声で、声をかけてくれた。

「友希那……どうして……」

もしかして、アタシが寝ちゃってる間ずっと……前の席に座って、一緒にいてくれたの……？

「随分疲れ切ってた様子だったから、そっとしておいたのよ」
そう話す友希那の肩越しにチラリと見えた時計は、もう十七半時を過ぎていて。もうホームルームが終わってから、二時間以上経つのに、ずっと、側にいてくれたってことで……。
「喉を壊した私が言うのも変だけれど、無茶はダメよ。ちゃんと休みなさい」
ダメだよ、そんな優しくしないでよ。また、泣きそうになっちゃうから……。また、心がかき乱されちゃうから。
「……悩みを聞くことぐらいなら、私にもできるから」
そう話す友希那に、アタシはうまく言葉を返せなくて。
「どうして、側にいてくれたの」
そんなぶっきらぼうな聞き方をしてしまう。
「リサが私を避けるから、こうして捕まえるために待ってたのよ」
澄ました顔でそんなこと言う友希那に、アタシはほんっと顔が熱くなってしまう。
「やめてよ……勘違いしちゃうじゃん……」
小さな声でそうこぼしたけど、友希那はしっかり聞きとったみたいで。
「勘違い……？」
キョトンとした様子で、聞き返したりしてくる。
「あはは、気にしないで。こっちの話」
アタシがそう言うと、友希那は少し眉間にシワを寄せた。
「またそうやって、はぐらかすのね」
友希那のその言葉がグサリと刺さる。アタシはその傷をやり返すかのように、トゲのある言葉を返してしまう。
「友希那だって、アタシに隠してるでしょ」
あぁ、やっぱりダメだ。全然心の整理なんてできてない。普段のアタシなら、こんな友希那のこと傷つけると分かってる態度なんてとらないはずなのに。
友希那はアタシの言葉に、少し目を伏せた。
「そう……気付いていたの」
その態度にすら、アタシの心は揺れて。余計なことまで口にしてしまう。
「あんなに様子が変なら気付くよ、幼馴染みだもん。好きな人、できたんだってことぐらい」
アタシの指摘に、友希那は図星を突かれた顔をして。ヤダ、そんな恋しそうな顔をしないで。アタシ以外の誰かを好きな顔を、見せないで……!!
「誰だか知らないけど、そんなに好きならアタシなんか気にしてないで、その男の人のところにいきなよ」
なんて嫌味な言い方をするんだろう、アタシ。こんな最低なことを言う自分の顔を見られたくなて、思わず机の上に視線を逸らしちゃう。こんなアタシを見られたくないし、そんな風に誰かを恋しく思ってる友希那も見たくない……!
だけど、アタシの前から聞こえたのは全然予想もしてない言葉だった。
「えっ……男の人？」
あんまりに気の抜けた友希那の言葉に顔を上げてみたら、目を丸くしてる友希那と目が合った。
その反応の意味が分からなくて、アタシは思ったことをそのまま口にしてしまう。
「だって、友希那って男女の恋愛小説を読んでたじゃん」
「あれは新しい曲の作詞の資料に読んでただけよ」
友希那はそう言うけれど、アタシは見たんだよ。あの恋しそうにしてる顔を。
「でもあの時の友希那は誰か好きな人のこと考えてる顔……してたよ」
アタシの指摘に、友希那の顔が赤くなる。ほら……やっぱり……!
「それに、あの頃の友希那はしょっちゅう誰か好きな人のこと考えてるんだなって顔してたもん。アタシだって気付くよ、友希那に好きな男の人が出来たことぐらい……!」
そうまくし立てるアタシに、友希那はなんだか不思議そうな顔をしていて。なんだか怒るように喋るアタシの方が変みたい。
だけど、友希那のその表情は嘘偽り無くて本当に不思議で分かんない時の顔だっていうのは、幼馴染みなアタシには分かる。
そうしたら、逆に友希那はなんであんな切なそうな表情や仕草をあの図書室とかでしてたんだろうって余計に分かんなくなって。アタシの方も何がなんだかこんがらがってきてしまった。
そうやって悩みこんでしまってたら、友希那の表情がほころんで。
「……っ、ふふ。あははは」
いきなり友希那が口元を手で抑えて、その隙間から声が漏れちゃうくらい声を出して笑い出しちゃった。
「ふふっ、リサってばだからあの時……あははは」
何年ぶりか分かんないくらいに、無邪気に友希那が声を出して笑っていて。何度も見た夢の中での幼い頃の友希那の笑顔が、目の前の今の友希那に重なってくる。
「ほんと、変なの……ふふ」
友希那はそう言いながら、もう一度アタシに向き直ってくれて。
「ねぇ、リサ。私ね、あの声が出なくなった一週間をあなたにたくさん支えて貰って、気付いたことがあったの」
あの本を読んでいた時と同じ、恋しそうな顔を、アタシに向けてくれる。
「私はこんなにも、今までもたくさんリサに支えられていたんだって」
とても愛おしそうに話す友希那の声色に、アタシの心臓の鼓動がどんどんはやくなっていっちゃう。
「だから、曲を作ろうと思ったのよ。あなたへの感謝を綴った曲を」
すごい幸せそうにほころぶ友希那の表情に、どんどん頬が熱くなってく。
「だけど、歌詞に綴る言葉をいくら考えてもなんだか物足りなくて。それで私なりに今の気持ちを色々調べてみたの」
重ねられた友希那の手はひんやりと冷たくて、そういえば友希那って血圧低かったもんね、だなんて場違いなことが頭に浮かんでは消えてく。
違う、そうじゃない。そんな、それどころじゃ今はなくて。
「そうして図書室でも色々調べたけれど、まさかそれを……ふふっ」
また、友希那がおかしそうに笑って。

心のどこかで友希那の笑顔はやっぱり可愛いな、だなんてまだ現実を受け止めきれずに変なこと考えちゃってるアタシがいる。

「確かに私には好きな人がいるけれど、リサの予想は全然外れね」

でも、と友希那が少し顔を近づけてきて。夕陽に照らされて煌めく金色の瞳に、ああ、アタシの好きな人って本当に綺麗な人だなぁ、なんて見惚れてしまう。

「私が本気で好きなのは、当たってるわ」

真剣な瞳で、友希那が真っ直ぐ射貫いてくる。アタシはその金色の輝きからを逸らせない。

世界から、音が離れてく。

友希那の声しかまるで聴こえないように、世界が静まり返るようで。

世界から、色が遠のいていく。色づいているのは、友希那だけ。

友希那の姿しか見えなくなるように、世界が一歩下がったようで。

アタシの世界に、今この瞬間に聞こえるのは、見えるのは、友希那だけ。

そして——。

「私が好きなのは、あなたよ。リサ」

その言葉に、アタシの世界が、眩しく輝いた。

じんじんと目頭が熱くなって、心臓はもうこのまま止まっちゃうんじゃないかなってぐらい早鐘を打ってる。

頬を熱いものが幾筋か落ちていく感覚がして、初めてアタシは自分が泣いているのに気付いたんだ。

恥ずかしくて目をそらしたいのに、身体は全然言うこと聞かなくて呂律が上手く回らないアタシは、舌っ足らずなままこの気持ちを、答えを、口にした。

「アタシも……すき、友希那が、好き」

どんどん、アタシの心から好きが零れてくる。

「好き……っ。大好き。好きなの、ゆきな……っ」

すっごく嬉しくて笑顔になるはずなのに、涙声で声はつっかえて、目から溢れる涙も全然止まらない。たぶん、今のアタシはすんごい表情になってると思う。

だけど、友希那は少し目元に涙を滲ませながら優しく笑ってくれて。

「良かった……リサも私のこと好きでいてくれて」

その言葉と一緒に、友希那の頬も涙が伝っていった。

「恐かったのよ？　リサが失恋したって言うから。私以外に誰か好きな人がいたんだって」

そう話す友希那の声は少し震えてた。

そうだ、アタシはあの時失恋したって友希那に当たり散らして。アタシのことを好きだったなら、あの時の友希那はすっごい傷付いたはずなのに。アタシ、なんてバカなことして……。

「ごめんね……ゆきな……っ。あんなヒドイこと言って」

アタシのその言葉に、ふるふるって友希那は小さく顔を横に振って。

「私の方こそ、あの声が出なくなった日にリサにあたってごめんなさい」

でも、と友希那が嬉しそうに言葉を続け。

「あの時、リサが怒ってくれたから、勇気を出せたの。私のことをあんなに大切に想ってくれることに気付けたから、例えフラれるかもしれなくても、リサに感謝と好きって気持ちを伝えなきゃって」

だから、ありがとう――。

そう話す友希那に、アタシもありがとうって返したくて。

気付いたら、少し友希那の方へ身を乗り出してしまって。身体が勝手に心より先に動いちゃった。

くちびるに、すっごく熱い感覚。

頬に感じる、アタシとは違う絹糸のような髪の感触。

世界に、友希那しか見えない。

たぶん、触れたのは数秒。

目の前にはまん丸になった友希那の瞳。今はそこにアタシの顔がはっきり映り込んでるのが見えた。

アタシ自身、自分がいきなり何をしたのか理解出来なくて。

お互いの熱い吐息がくちびるを撫でていく感触と、少し早くなった息づかいの音だけが、世界に感じる。

一気に友希那の色白な肌がはっきり分かるぐらい紅く染まっていって。

「リサって、結構大胆よね……」

口元を指先で隠しながら、友希那がそう漏らした。いや、アタシ自身もびっくりしてるっていうか、何してるんだアタシ……!?

「ご、ごめん。気付いたら、なんか……しちゃった」

うまく言葉に出来なくて、しどろもどろになりながら答えちゃう。

そしたら友希那はおかしそうに笑ってくれて。

「リサってば……ふふ。なんだか猫みたい」

まるでいつも猫を可愛がってる時のような声色に、また友希那のことが好きって気持ちが積み重なってく。

「そんな猫みたいかな……?」

本当は嬉しくてたまらないのに、今この幸せを素直に受け止めきれなくて、つい口からは疑問混じりの言葉が零れてしまう。

だけど、友希那はそんなアタシの言葉も優しく肯定してくれて。

「ええ。いきなり本能のままに動くところとか」

そんな甘い音色を孕んだ言葉に、アタシは固まってしまう。

そうしてアタシが固まっちゃっていたら、友希那は熱っぽい目で見てきて。

「ねえ、リサ」

まだお互い近い距離のままだから、その言葉の熱すらはっきり伝わってきて。

「もう一度、いい?」

そんなこと言われたら、我慢できるわけないじゃん。

そのままちょっとだけ距離を詰めて、またアタシたちはお互いのくちびるを繋げた。

さっきと同じ、触れるだけで、ほんの数秒だけのキス。

くちびるとくちびるをただ合わせただけの、キスなのに。

すっごいドキドキして、あんまりに幸せで、足下がふらつきそうな感覚すらしてきちゃう。永遠に感じるような、瞬って、こういう感じ

なのかな。

閉じた目蓋を開けながら、繋がっていたくちびるを少し離して。同じように目蓋を開いた熱っぽい金色の瞳に見とれながら、友希那だって猫みたい、だなんて思ってしまったり。だけど――。

「友希那、もう一回、しよ」

そんなこと言い出すアタシは、やっぱり猫みたいに甘えたがりで、どうしようもなく欲張りかもしれないなー、なんて。

でも、いいよね。

だって、この幸せを何度でも確かめたいから。

何度でも、友希那のことを、感じていたいから――。

もうだいぶ陽は傾いていて、さっきまでオレンジ色に染め上がっていた教室は随分と暗くなっている。

そんな中で、窓から零れ入る街明かりがほんのりとアタシや友希那の輪郭を浮かび上がらせていて。

そんな輪郭が繋がって朧げになっちゃいそうなくらい、アタシたちは手を握ってくっつくように寄りそいながら、教室を後にした。

◆◇◆

その日の夜、アタシは夢を見た。

それは、ここ最近見ていた、あの幼い頃の友希那とアタシの思い出の夢。

近所にある、大きな公園の丘の上で、ふたりで一緒にタンポポの花かんむりを作って、お互いにプレゼントしてあげた、思い出の夢。

その丘には、まるでアタシたちふたりを優しく撫でるかのように、春のそよ風が吹いていて、春を告げる野花で鮮やかに染まってる。

そんなまるで絵本みたいな景色の中で、アタシたちはお互いに花かんむりを載せあって。

だけど、今まではその後友希那がアタシにどんな言葉をかけたのか、夢の世界から『声』が抜け落ちちゃっていてわかんなかった。

でも、今日の夢の世界は違った。ちゃんと『声』が聞こえる夢だった。

「はい、リサにあげる!」

そう無邪気な声色で、友希那が幼いアタシの頭の上にちょこんって花かんむりを載せてくれる。

「ゆきな……あたしもあげる!」

すかさず幼いアタシも、自分が作った花かんむりを友希那の頭に乗せてあげて。

そしたら、友希那は――。

「これでわたしもリサも、ずっといっしょだね! だって、タンポポって――」

『あいのお告げって意味があるんだよ』

その言葉に、幼いアタシはぽろぽろと涙を零し出しちゃって、友希那は慌てた様子でアタシの頭を撫でながら心配そうに声をかけてくれる。

「泣かないで、リサ」
違うんだよ、友希那。アタシ、嬉しかったの。友希那がずっと一緒って言ってくれたことが、その気持ちの証にまるでお嫁さんみたいに花かんむりをくれたのがとっても嬉しくて。
だから、なんて言うかな。思わず感激のあまり号泣、みたいな感じだったんだ。
思い出したよ、アタシはこの時からずっと、友希那に恋に落ちてたんだ。まだ幼かったから、それを恋心だって気付くのはもっと後だけど、それでも、この時のことが切っ掛けでアタシにとって友希那は幼馴染以上の、もっと特別な存在になったんだ。
「ありがとう、友希那」
そう、夢の中の幼い友希那に、ふたりを眺めるアタシは声をかけた。
そしたら、幼いアタシの頭を撫でながら、友希那がこっちに振り向いてくれて。
まるでもう大丈夫って言ってくれるみたいに、優しく頷いてくれた。

明るい日差しに目蓋がちょっと熱い感覚。うっすらと目を開けてみれば、窓から見える空は雲ひとつない秋晴れの空だった。
まるで、あの友希那が風邪で声が出なくなっちゃった日とは反対な目覚めに、ちょっと口元が緩んじゃう。
きっともう、あの夢を見ることはなさそう。何でかわかんないけど、そんな風に思う。
きっとタンポポの花かんむりだっただけに、神様のお告げだったのかもしれないなーなんて、夢見すぎかな？
随分あの夢には悩まされたけど、でもこうして見れるのも終わりなんだろうなって感じると、少し寂しさもこみあげちゃったり。
布団に入ったまま視線だけ壁に掛けられてる時計を向ければ、いつもより三十分近く早く目が覚めてた。
アタシは窓から見える晴れわたった空に、なんだか朝の空気を感じたくなって、勢いよくバサッと布団を跳ね除けて、グーッと思いっきり背伸びをしながら、そのままベランダに出てみた。
もう十月の下旬だから、流石にパジャマのままだと肌寒い。でも、朝の澄んだ空気はとても気持ちよくて、まるで身体も心も澄んでいくような感覚がする。
そしたら、向かい側にある友希那の部屋のカーテンが開いた。
友希那もどうやらアタシとほぼおんなじタイミングで目が覚めて、そしておんなじことを考えてたみたいで。小さく笑いながら、友希那もベランダへと出てきた。
ちょうど太陽はアタシの背中側に昇ってるみたいで、朝日を浴びて煌めく友希那の銀髪に目を奪われちゃう。
本当に、綺麗。
かっこよくて、綺麗だなんて、友希那は本当にずるい。
つい昨日、アタシはこんなに素敵な幼なじみと両想いになれたんだって思うと、嬉しくて泣きそうなっちゃいそうになるのは、たぶん相当重症なんだろう。
だけど、今は。
とびきりの笑顔で、友希那との恋人同士として初めての朝を迎えたいから。

このアタシの溢れそうなほど幸せな気持ちが伝わりますようにと願いを込めて。
「おはよう、友希那！」
幸せを込めたアタシの言葉に、友希那は。
「おはよう、リサ」
おんなじくらい、想いの詰まった笑顔と声で返事をくれた。

大分遠回りもしたし、些細なことで喧嘩もしちゃったりして、しかも思い返せばしょうもない勘違いで傷付けあったりもしちゃったアタシたちだけれど、やっと掴めた幸せだから。
もう二度と、友希那との幸せを、声を失くしてしまわないように。
そう、決意を込めて。
青い、青い朝晴れの空の下で。
凛と冷えた風に揺れる白銀色をした髪をふわりっておさえながら、ふたつの太陽のような瞳をたたえた愛しい人に。
「好きだよ、友希那」
これからはこの本当の気持ちを、ちゃんと『声』にして伝えるの。
「わたしもよ、リサ」
アタシが世界で一番大好きな人の『声』が、そう答えてくれるから。

あとがき

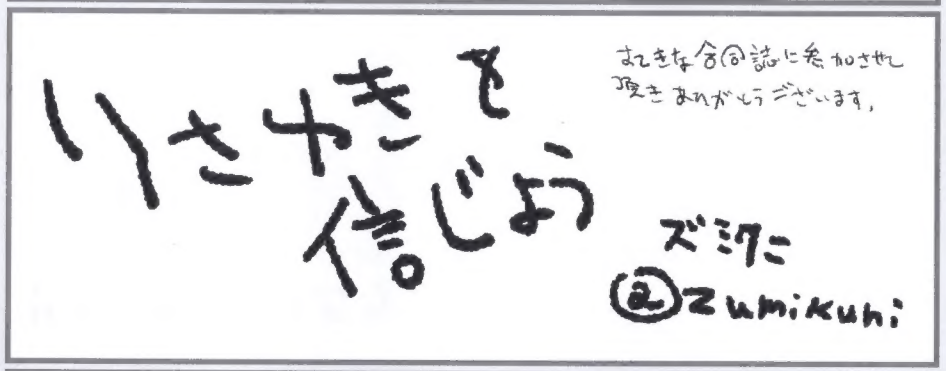
この度はリサゆき合同誌にお誘い頂き
ありがとうございました。
告白という素敵なテーマを、リサゆきで
描くことが出来て嬉しかったです。
他の参加者の皆様が本当に豪華なので、
お話を読めるのが今から本当に楽しみです！
これからもバンドリ界随一の仲良し夫婦として、
末永く幸せな二人でいて欲しいなと思います。
重ねてお誘いありがとうございました！

リサゆき小説合同発刊おめでとうございますと、お誘いいただきありがとうございます！
神様ばかりのリサゆき合同の中恐縮ながら作品を寄稿させていただきました！
リサゆき幸せになってほしいですね。あとモカ蘭も幸せになってほしいです。

トラ柄

ディープキスまではセーフって主催が言いました！！！
（言い訳）
冗談はさておき、今回こうして寄稿できたのは主催様、絵師様、読んでくださる皆様のおかげです。ありがとうございました！

cucumber



リサゆき小説合同をお買い上げ下さいましたあなた。はじめまして、にゅーと申します。
リサゆき愛のやべえ方々のやべえ作品群の中にこの度混ぜていただける運びとなりました。
私事ですがこのように自分の文が本として具現化するのは初めてです。
いうなれば同人活動処女ともいうべきものをこの素晴らしい合同に捧げた形になります。
心底本望です。
当然後書きというのも初めてですので、硬い文になることをお許し下さい。
この度お誘いくださった主催様、合同に参加なさっている作家や絵師の皆様、そして読者の皆様本当にありがとうございました。何よりリサゆきありがとう。
この合同を読んで何かを感じ取った皆様の手によってさらなるリサゆきが世に放たれることを、何よりそれらで殴られることを強く願っております。
Twitter → Nu_Nu_Nu0685
pixiv → https://pixiv.me/nu_nu_nu0685

この度は合同誌へのお誘いありがとうございました。
大変恐縮ながらにゅーさんの素晴らしいリサゆきに
挿絵を描かせていただけたこと、感無量でございます。
リサゆきの需要が高まる現代社会、リサゆき補充が足
りず飢えに苦しむ人々が増加しつつあります。
そんな方々にとってこの一冊は最上級の一品になった
のではないでしょうか。んまー！

Manato
（@manato_illust）

アリエッタ、というのはイタリア語でそよ風という意味らしいです。
または音楽用語で、小規模なアリアをそう呼ぶのだとか。
今回のアリエッタはそのどちらでもなく、作中の舞台のモデルのうち
ひとつから拝借させていただきました。

推しカプの旅、最高ですね。
また書きたいです。そのときはご縁があれば、よろしくです。

Pixiv(17398068)　Twitter(@DaisChill_grp)　　大村千里

この本を手に取ってくださった方と、この本を共に制作した
作家さん達がこれからもリサゆきのことをずっと好きでいて
くれると嬉しいなあと思いますね。
も一りす先生、この度は素敵な企画に誘っていただいて
ありがとうございました。
機会がありましたらまたよろしくお願いします。

ななもり

この度はリサゆき挿絵付き合同誌をお手にとって頂き、誠にありがとうございます。

2018年2月頃に「リサゆきが告白する小説合同欲しい」と思い企画してから、10月7日のイベント当日に至るまで約半年ほど、小説作家の皆様や、挿絵絵師の皆さんに支えて頂きこの願望を形にすることが出来ました。参加して下さった皆様、本当にありがとうございました！

また、こうして合同誌が発刊出来たのは、今この本を読んで下さる「リサゆきが好きな皆様」のおかげでもあります。リサゆきが好きな同志がいてくださるから、合同誌を形にすることが出来ます。

「リサゆき好きによる、リサゆき好きのための、リサゆき」合同誌を支えて下さった皆様、本当にありがとうございました！！

ちなみに、作品内で友希那が風邪を引いて声が出なくなりますが、あれは実体験だったりします。
みなさんも急に寒くなる10月、風邪にはどうかお気を付けて。

Twitter：Moriss_Lva
PixivID：214310

表紙　斜森

主宰　北野 もーりす

小説
加瀬
cucumber
大村 千里
トラ柄
にゅー
北野 もーりす

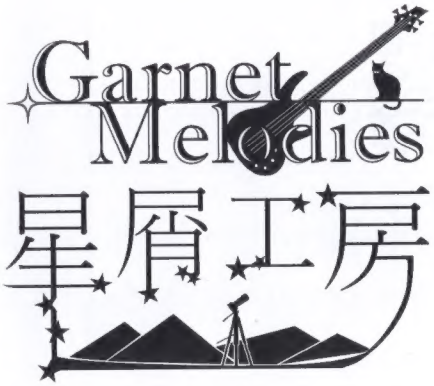
挿絵
あいなめ
加瀬
ズミクニ
斜森
Manato
北野 もーりす

【購入者特典】
下記リンクもしくはQRコードより、フルカラー版の合同誌をパソコンやスマートフォンでお楽しみ頂けます。
リンク先のDropBox共有フォルダより、ご自身のPCやスマホにダウンロードしてご利用下さい。PDFファイル形式となっておりますので、別途PDFを閲覧出来るソフト・アプリなどをご用意の上でお楽しみ下さい。

URL：http://bit.do/exNWm

※フォルダ内のファイルは直接編集・削除などは行わないで下さい。
※ファイルサイズが大きいので、必ず固定回線もしくはWiFi接続下にてダウンロードして下さい。
※もしダウンロードできない・ファイルが見つからない等のトラブルがありましたら、主宰まで直接ご相談下さい。
※下記リンクやフルカラー合同誌の無断転載は固くお断り致します。

本合同誌は非公式の二次創作であり、版権元とは一切の関係はありません。
また、この同人誌内の文章・イラスト・その他コメント等の無断転載・複製・再配布は固くお断り致します。



■奥付■
タイトル：Garnet Melodies
発行日：2018年10月7日
発行サークル：星屑工房
代表者：北野 もーりす
連絡先：
Mail：starry.heavens.workshop@gmail.com
Twitter：@Moriss_Lva
印刷会社 ：株式会社 栄光 様

本合同誌は非公式の二次創作であり、版権元とは一切の関係はありません。
また、この同人誌内の文章・イラスト・その他コメント等の無断転載・複製・再配布は固くお断り致します。